



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

文部科学省指定

平成30(2018)年度 スーパーグローバルハイスクール研究報告書

平成26(2014)年度指定 第5年次

「Active Dialog ー共生の実現へー」



学校法人聖心女子学院
札幌聖心女子学院中学校・高等学校

目 次

I. 巻頭言	
II. 研究開発報告	
(1) 平成30(2018)年度 研究開発完了報告書	
(2) 平成30(2018)年度 教育課程表	
(3) SGH自己評価・アンケート（生徒・教員対象）	
III. 学校設定科目「グローバルイシューズ」の取組	
(1) 高校1年	
フィールドワークと連動した探究学習（人との共生）	
論証重視型日本語ディベート	
(2) 高校2年	
フィールドワークと連動した探究学習（自然との共生）	
即興性重視型英語ディベート	
(3) 高校3年	
アクションプランの計画と実行（人との共生、自然との共生）	
IV. ニューヨーク国連研修報告	
V. 司書・学校図書館の役割	
VI. 今後の教育課程について	
VII. 関係資料	
(1) 本校のSGH構想の概要	
(2) SGH運営指導委員会議事録	

Active Dialog — 共生の実現へ —

札幌聖心女子学院中学校・高等学校

校 長 阿 部 益太郎

札幌聖心女子学院は、1963年に創立したカトリックの精神に基づく中高一貫教育校であり、国内に6つある学校法人聖心女子学院の姉妹校の一つです。「よりよい社会を築くことに貢献する賢明な女性の育成を目指す」ことを教育理念に掲げ、「魂を育てる」、「知性を磨く」、「実行力を養う」の3つを教育方針の柱としております。

本校は1999年度から20年の間にGLOBE、SELHi、IBに関する調査研究校として文部科学省から指定を受け、研究活動を行ってまいりました。2014年度にはスーパーグローバルハイスクール(SGH)に採択された56校中の1校に選ばれ、「Active Dialog — 共生の実現へ —」を研究開発構想とし、「人との共生・自然との共生を目指し、諸課題に挑戦する」を研究開発テーマと定め、課題探究能力とプレゼンテーション能力の定着を図り、グローバルリーダーの育成を目指すことを目的として5年間実践的な研究を積み重ねてきました。このたび2018年度をもって完了します。

SGH研究を進めるにあたり、本校が総合的な学習として実施してきた「課題研究」を発展させ、「フィールドワークと連動した探究学習」、「課題研究ミーティング」及び「ディベートワークショップ」の3つの柱からなる学校設定科目「グローバルイシューズ(GI)」を開設し、全学年全生徒で展開しました。5年間の取組を通して、生徒たちは、なっぴほしい4つの姿、「自ら学ぼうとする意欲を持つ生徒」、「課題を見出す目を養う生徒」、「課題解決策を考え、実行に移す生徒」、「プレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を磨く生徒」に見事に育ちました。

高校1年生では「人との共生」、高校2年生では「自然との共生」をGIのテーマとし、共生を果たす上での課題を自ら見出し、その解決策を自ら考える取組を行いました。併せて、論理的な思考力や発表力育成を身につけることが、グローバル社会で協調して課題解決を図っていくうえでの基礎となると考え、高校1年生は日本語ディベート、高校2年生は英語ディベートを行うことにより、交渉を行う際にその土台となる言語活用力や論理的に説明できる力などの育成を図ってきました。GIのフィールドワークでは、現場に出かけていくことによって、実際の状況や実行されている課題解決策を見聞きすることができました。現場で実際に行われている解決策と、自分たちが考え出した解決策を比較することにより、それぞれの解決策の有効性や新たな解決策を考える貴重な機会となりました。

高校3年生では2年間の活動を基に、課題解決に向けた実行計画「アクションプラン」を作成し、生徒自身が企業やNPO法人、学校や関係機関等の外部団体と交渉し、校外に出てそれぞれのアクションプランを実行しました。生徒自らが直接交渉の表舞台に立ち、外部の方に考えを説明し、理解を得て実行できたこと、または理解が得られるよう、より一層工夫しながら説明したことなどは、これからの現実社会を生き抜いていく彼女たちにとってのかけがえのない財産となりました。アンケート調査からも、最終的に合意していただき実行できたことが、いかに大きな達成感となったのかが分かりました。

本事業を実施するにあたり、文部科学省をはじめ、関係機関の皆様にご多大なご支援を賜りました。この機会をお与えいただいたことに心より感謝申し上げます。そして、ご多忙の中、研究推進等についてのご指導・ご助言をいただいた運営指導委員の皆様へ、厚くお礼申し上げます。

SGH研究を進める中で、生徒たちの優れた取組や、その成長には目を見張るものがありました。さらに、高校生の活動や成果を間近に見ていた中学生に、強い刺激と多くの意欲を与えるものとなりました。本校ではSGH指定終了後も教育課程の中に学校設定科目「グローバルイシューズ」を位置づけ、実り多い研究成果を今後の教育活動に反映してまいります。本校で学ぶ生徒たちは、自らの変容を自覚し、必ずや世界で活躍するグローバルリーダーとなるものと期待しております。

ぜひ、これからも本校教育活動に対してご指導、ご助言等くださいますようお願い申し上げます。

研究開発完了報告

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所	東京都渋谷区広尾 4 丁目 3 番 1 号
管理機関名	学校法人 聖心女子学院
代 表 者 名	理事長 宇野 三恵子 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日（契約締結日）～平成31年3月29日

2 指定校名

学 校 名	札幌聖心女子学院高等学校
学校長名	阿部 益太郎

3 研究開発名

Active Dialog ―共生の実現へ―

4 研究開発概要

本校が、総合的な学習として実施してきた課題研究を発展させた学校設定科目「グローバルイシューズ」（以下、GIとする）を全学年に開設し、実践を行った。

高1では「人との共生」、高2では「自然との共生」について、共生を果たすうえでの課題を自ら見出し、その解決策を考えた。フィールドワークも実施し、そこでは現場の状況や、実際に行われている課題解決策を見聞した。現場で実際に行われている解決策と自分たちが考え出した解決策を比較し、それぞれの解決策の有効性や新たな解決策を考える体験となった。高3では2年間の活動を基に課題解決に向けた企画・立案としての「アクションプラン」を作成し、企業やNPO法人等の外部団体と連携し、校外でそのアクションプランの実践を行った。

また、高1は日本語ディベート、高2は英語ディベートで、交渉を行う際にその土台となる応用力や論理性の育成を図ってきた。論理的な思考力や発表力育成を身につけることが、グローバル社会で協調して課題解決を図っていくうえでの礎となると考えている。それぞれの学年の前半のGIを探究の重点期間とし、特に、高3は進学の準備があるため、やはり前半のアクションプラン計画が重要となっている。

研究成果発表の場として、10月5日には広く一般に公開したSGH研究発表会を、10月6日にはSGHフィールドワーク報告会を実施した。また、2月1日には道内のSGH指定校およびアソシエイト校を中心とした北海道教育委員会主催の北海道SGH高校生ミーティングに参加し、取組の内容を発表するとともに、参加した各校の生徒と交流を行った。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

- ①実施計画に基づき、研究開発名でも掲げている「共生」実現に向けた取り組みが支障なく推進できるよう、フィールドワークおよびアクションプランの実施に伴う活動費や、アドバイザー等の人件費、ICT環境の構築に必要な支援を行う。
- ②各支援の内容についての意見や要望を生かし、日程や内容について実施校と調整を図りながら計画を推進する。

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A) フィールドワーク・アクションプラン活動費補助		A	A	A	A	A	A	A			A	
B) 人件費補助	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
C) 姉妹校ウェブシステム		C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C

(2) 実績の説明

- ①ニューヨーク国連研修を筆頭に、各フィールドワーク実施のために必要な経費について、文部科学省からの予算に追加して実施校に補助を行った。参加対象者は高1と高2全員である。
- ②高3のアクションプランの実行にあたり、それに必要な経費についても上記①と同様に補助を行い支援した。
- ③関連業務など業務量が増大しているため、海外交流アドバイザーや事務的な業務のサポートを行う職員を雇用し、高1・高2の探究学習およびフィールドワーク、および高3のアクションプランの実行など生徒の活動を最大限支援できるよう配慮し、経費の支援を行った。
- ④ウェブシステムを活用し、ニューヨーク国連研修期間中に、研修に参加している生徒と札幌で活動している生徒との間で情報交換ができるよう支援した。また、タブレット端末設置台数を増やし、グローバルイシューズはもちろんのこと、他教科・科目の学習においても整備されたインターネット環境を生かし、姉妹校間をはじめとする生徒どうしのコミュニケーション手段として幅広く活用させた。最も積極的に活用したのは、ニューヨーク国連研修の事前・事後学習における現地（ニューヨーク）との情報交換や課題提示等で利用している高1である。通信速度の向上をはじめとする快適なインターネット環境を整備すべく、引き続き支援を行っている。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（平成30年4月1日（契約日）～平成31年3月29日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
探究学習 ①課題設定 ②調査・研究	高1 高2	高1 高2	高1 高2	高1 高2	高1 高2	高1 高2	高1 (NY国連 研修生)	高1 (NY国連 研修生)	高1 (NY国連 研修生)	高1 (NY国連 研修生)	高1 (NY国連 研修生)	
探究学習 ③フィールドワーク		高2		高1 高2	高1 高2						高1 (NY国連 研修生)	
探究学習 ④研究発表会・報告会							高1 ～高3					高1高2 翌年度へ

業務項目	実施期間（平成30年4月2日（契約日）～平成31年3月29日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
⑤課題研究ミーティング	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3		高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3	高1 ～高3
⑥論証重視型日本語ディベート							高1	高1	高1	高1	高1	
⑦即興性重視型英語ディベート							高2	高2	高2	高2	高2	
⑧キャリア教育との連携							高1					
⑨アクションプランの立案と実行	高3	高3	高3	高3	高3	高3	高3	高3	高3		高2	高2

（２）実績の説明

①探究学習：課題設定

高1では「人との共生」について、難民・移民への支援、移住者と地元住民との共生、観光客と地元住民との共生を探究テーマとして設定し、それぞれのテーマについて共生を果たすために課題となることは何かを生徒自らに見出させた。高2では「自然との共生」について、水資源の利活用、廃棄物の活用、外来生物、気候変動への対応を探究テーマとして設定し、高1と同様に課題となることを見出させた。なお、いずれの学年においても、前年度に作成された探究報告書に目を通し、継続性と新規性も考慮した課題設定となるよう配慮した。

高1においては、論証重視型日本語ディベートとニューヨーク国連研修のいずれかを選択することとし、ニューヨーク国連研修に参加する生徒は、後期においても引き続き「人との共生」に関わる課題設定を行った。

②探究学習：調査・研究

生徒自ら設定した課題に対して、その情報収集や現状分析、課題解決策の立案等を行った。情報の取捨選択や真偽の見極め、根拠の提示、論理的思考力の育成を主眼とした能力の開発に努めた。自分の言葉で、第三者にもわかりやすく、限られた情報量で提示することができるようプレゼンテーション能力の育成にも努めた。

③探究学習：フィールドワーク

A）SGH東京研修（7/23～25、高1…10名）

特定非営利活動法人である難民を助ける会（AAR Japan）、およびチャイルド・ファンデーション、東京入国管理局を訪問し、難民認定の現状や、異なる立場での支援について講話を聞き質疑応答を行うなどの事前学習を行った。入国管理局においては、難民の一時待機所などを見学させていただくなどのご配慮をいただいた。

B）SGH恵庭研修（5/31、高2…7名）

「環境負荷を軽減し、持続可能な社会の形成に貢献したい」の思いで立ち上げられた「えこりん村」を昨年に引き続き訪問した。外来生物である「セイヨウオオマルハナバチ」の駆除活動の様子について話を聞き、捕獲実習を行う予定であったが、捕獲実習については当日の気温や天候の影響でセイヨウオオマルハナバチ自体がおらず、叶わなかった。しかし、代わりに別な外来生物の捕獲を実習させていただくなどのご配慮をいただいた。「えこりん村」は企業のCSR活動（企業の社会的責任）や、子どもを対象にした学習支援活動にも積極的に取り組んでいるなど、フィールドワークの場として最適である。

C) SGHニセコ研修 (7/23、高1…10名)

ニセコ町は海外からの移住者が急増し、人口の10%近くにもものぼっている。土地価格の上昇や急激な都市開発、また、生活上の習慣の違いなど地元住民との間で様々な問題が生じつつも、それを上手に解決・乗り越えようとしている取組に着目して、ここ数年継続して訪れている。役場、移住者、地元住民と3つの立場から、ニセコ町での生活や共生を図るうえでの課題を探ることが出来た。観光や自然豊かな環境など外国人を引き寄せる魅力についても調べを進めた。

D) SGH美瑛研修 (6/29、高2…9名)

豊かな自然やその中で収穫された野菜などを観光資源としている美瑛町で、訪れる観光客が無断で土地に入り込み、地元住民と軋轢が生じることが多くなっていることに注目した。地元経済を潤すにはたくさんの観光客を受け入れたいが、その一方でこれまでの生活を大切にしたい住民の複雑な思いがあり、その両方を両立するためにどのような解決策があるのかを探ることができた。

E) SGH美唄研修 (7/17、高2…6名)

全国の多くの学校で使用されているチョークを製造している日本理化学工業を訪問した。ホタテの貝殻を再利用し、品質の良いチョークを製造しているだけでなく、障害のある人たちが働きやすい環境も提供している。チョークは、ホタテの貝殻の活用法の一例ではあるが、北海道内に複数存在するホタテの貝殻は地域によっても活用方法が違うことなども知る機会となった。また、障害者の雇用に関して職場環境の構築や改善にも熱心に取り組んでおり、「人との共生」についても学ぶことができた。

F) SGH東川研修 (7/20、高2…6名)

昨年度に引き続き訪問したが、「水道のない町」と言う言葉は、生徒たちにはインパクトが大きかった。大雪山系から流れ出る伏流水を利用していること、水質の維持についてなど、水道をあたり前のように利用している立場からは、そのためにどれだけの努力と労力がはらわれているかに気付くことができた意義深いフィールドワーク先といえる。

G) SOfIS (8/2～4、高2…2名)

SOfISとは、国内の聖心の姉妹校の頭文字を取ったもので、社会問題に関するワークショップとフィールドワークを柱として毎年開催されており、今年度は静岡県不二聖心女子学院で行われた。テーマは気候変動への対応であり、「自然との共生」では初めて扱うテーマではあったが、集中豪雨による被害やチベット高気圧による猛暑による影響など、タイムリーなテーマを扱い、単なる”調べ学習”に留まらず、自分たちに出来る対応策や解決策を提案し、その妥当性や実現の可能性について探った。また、不二聖心女子学院の広大な敷地には豊かな自然環境が残されている一方、確認された動植物の種が変化していることをフィールドワークで確認し、気候変動が与える影響について身近なところで感じ・考える機会となった。株式会社RICOH環境事業開発センターも訪れ、「捨てる」から「活用する」ことを主眼に置いたリサイクル・リユース活動がビジネスとして成立することを実証している現場を見学した。

④探究学習：研究発表会・報告会

高1・高2は取り組んできた探究学習について、高3はアクションプランの立案と実行について、その成果を校内はもとより、広く一般にも普及する目的で研究発表会や報告会を実施した。限られた情報量と時間で、自分たちの取り組んでいる活動の内容そのものや意義を伝えることの難しさや、理解を得ることの大変な苦労を身をもって経験する機会となった。特に、発表内容についての質疑応答の際には、自分たちの気付かなかった着目点に気付かされるなど、生徒にとっては非常に意義深い機会となっていた。また、取組に対する励ましなども多く寄せられ、生徒の意欲の向上につながっていた。

<実施または参加した主な発表会等>

・2018年10月5日(金)

名称 : SGH研究発表会

公開対象 : 一般 (主としてSGH指定校・アソシエイト校教員、保護者)

・2018年10月6日(土)

名称 : SGHフィールドワーク・体験学習報告会

公開対象 : 保護者

・2019年2月1日(水)

名称 : 北海道SGH高校生ミーティング (北海道教育委員会主催)

公開対象 : 道内SGH指定校・アソシエイト校教員および生徒、道内中学校教員

⑤課題研究ミーティング

課題研究ミーティングとは、国際文化・環境科学・人間関係の3つのカテゴリに関するタイムリーな話題を中心に、様々な角度での有識者の講話を聞く機会である。SGHに指定されてからは、「人との共生」および「自然との共生」に即するテーマとなるよう配慮している。講話を聞くだけに留まらず、その講話の中から課題を自ら見つけ出し、それに対する意見や考え、解決策を600字の文章としてまとめることを求めている。論理的な意見の構築が出来ているか、根拠が提示されているか、客観性が保たれているかなどについて繰り返し添削がなされ、まとめあげていくものである。高1は年に4本、高2は年に2本、高3は年に1本の意見文を書き上げることが課されている。高3は、進路のための準備等や、卒業研究に取り組むことも考慮され、課される意見文の数が少なくなっている。

今年度の実施状況については以下のとおりである。

日付	テーマ	分野	講師名	参加人数
4/18(水)	「人間関係という『見えない資産』を活かす」	人間関係	船木幸弘 氏 (藤女子大学 人間生活学部人間生活学科准教授)	59名
5/23(水)	「世界を舞台に自分に何ができるか考えてみる」	国際文化	鍋島孝子 氏 (北海道大学大学院「7・コミュニケーション」研究院准教授)	46名
7/ 4(水)	「なぜ教会で結婚式を行うようになったのか —中世フランスの騎士の結婚と恋愛—」	国際文化	印出忠夫 氏 (聖心女子大学現代教養学部史学科教授)	35名
8/22(水)	「次世代につなぐ環境首都SAPPORO ～持続可能な開発目標(SDGs)って何だろう～」	環境科学	松本尚 氏 (札幌市環境局環境都市推進部環境計画課長)	23名
10/ 3(水)	「職場におけるハラスメント これってセクハラ？ ～『セクハラ』『マタハラ』『パワハラ』について考える～」	人間関係	白水方子 氏 (札幌法務局人権擁護部第二課調査救済第一係長)	37名
11/14(水)	「モンゴル紀行」	国際文化	松嶋範男 氏 (札幌医科大学名誉教授)	24名
12/ 5(水)	「私たちは何を学ぶべきか ～2030年の学校教育を考えよう～」	国際文化	山中康裕 氏 (北海道大学大学院環境科学院・地球環境科学研究院教授)	39名
1/23(水)	「エンカル消費を学ぼう」	環境科学	村木仁美 氏、武田小百合 氏 (札幌市消費者センター啓発指導員)	24名
2/ 6(水)	「スキャンダルとファン心理？」	人間関係	小城英子 氏 (聖心女子大学現代教養学部人間関係学科准教授)	32名

⑥論証重視型日本語ディベート

高1で論証重視型日本語ディベートは取組を始めて5年目となる。論題の設定は、「人との共生」に沿ったものとしている。

今年度は、1つの論題に対して1回目で肯定側だったグループは2回目に否定側を、またはその逆のパターンで対戦するよう変更した。

中学の国語科の授業でもディベートが取り入れられ、どの生徒も経験済みではあるが、

約半年に渡って本格的に取り組むのはほとんどの生徒が初めてである。生徒にとっては手探りで始まるディベートであり、準備の不十分さが目立っていたが、一度指導され後は大きな改善がみられるようになった。また、ディベートそのものの能力を高める以外に、チーム内の役割分担や話し合いを行い、協力し合いながら活動するなど副次的な効果もみられた。国内、海外の様々なテーマを扱うことで、これまで関心の少なかった出来事や問題に目を向けるようにもなった。

⑦即興性重視型英語ディベート

高2の即興性重視型英語ディベートは5年目となる。言語は異なるが日本語ディベートとともに論理的思考の側面では共通部分が多い。2年生には、3年生が前年度取り組んできた成果をモデルディベートとして参観する機会が設けられ、英語によるディベートのイメージを持つことができています。今年度は英語力によるコース別にせず、学年全員で授業を行い、進度や難易度は昨年度までの発展コースと標準コースの間に設定して行った。また、今年度は留学生6名（台湾3名、メキシコ2名、インドネシア1名）が授業に参加し、それぞれに分かれてチームに入ってディベートを行った。文化的な背景の違いから、様々な視点での意見が生まれ、より幅広い考えを身につけることができた。初めは英語で自分の意見を述べることに不安があったようだが、回数を重ねるごとに伝える楽しさを味わうことができ、最終的には論理立てて話すことができるようになったと生徒自身も振り返っている。この学習を通して、自分の英語を話す力や、英語で意見を述べる力に自信を持ち、今後の学習においても前向きに取り組むことが期待できる。

⑧キャリア教育

今年度も10月に聖心女子大学の計らいで高1の13名が説明会に参加した。聖心女子大学にはSDGsやESDを専門としている教員がおり、また、SDGsについての活動に取り組んでいる大学公認の学生団体もある。特に「人との共生」において高大一貫した学習環境や支援体制が整っていることや、大学としてこれらのことに興味・関心を持っている生徒の入学を心待ちにしている旨の説明が行われた。旧独立行政法人国際協力機構（JICA）広尾センターの建物・土地を取得し、聖心グローバルプラザを開設したことや、SDGsをはじめとする「人との共生」に関係する様々な研究成果について広く社会一般にアピールする場としてグローバル共生研究所が設置され、参加した生徒に対して「人との共生」について追究する環境として、うってつけの場であることがアピールされた。生徒にとっては自分が目指す進路について考える機会となっていた。

⑨アクションプランの策定と実行

高3では、「人との共生」および「自然との共生」に関わるグローバルな視点で課題を見出すことを求めるとともに、その課題解決策であるアクションプランの立案と実行に取り組んだ。本校の最大の特色は、このアクションプランの立案にとどまらず、高3全員がその実行に取り組むことにある。

課題を見出すにあたって求めた「グローバルな視点」とは、どの国や地域にも存在する普遍なことということである。アクションプランの立案にあたっては、自分がその解決にあたる当事者であり、リーダーであることを前提とし、ライフステージを考慮したものとなるよう求めた。また、その立案にあたり、18歳の自分たちが今、取組を始められることをSTEP1とし、プランの完了までにいくつかのSTEPを設定するようなイメージをもたせるようにした。

アクションプランを実行するにあたっては、単なる物品や金銭の寄付にとどまることを良しとせず、それらをどのように活用して課題解決に結びつけるのかということを必ず考えるよう促した。アクションプランの実行にあたっては、それを必要としている現場に生徒自らが出向き、実行することを原則とした。もしそれが、海外など遠く離れている場合であれば、物品や金銭を寄託し、それらで自分たちの立案したアクションプランを反映した支援活動を行ってくれるところを連携先として選定するよう求めるとともに、託して終

わりというのではなく、その連携先が行っている活動に自分たちのアクションプランを反映させたり、連携先の活動状況を常に把握し、アクションプランの進行状況の把握に努めることを求めた。

7 目標の進捗状況、成果、評価

5 年計画の目標は次の 3 点である。

① 人とのかかわる姿勢、新しい経験への勇氣等、海外体験・留学参加への意欲を高める。

SGHに指定され、開設したGIの指導内容や指導方法が軌道に乗り始めたときに入学した現高3生を対象に実施したSGH自己評価・アンケートをもとに、目標の達成状況について検証した。

「人とのかかわる姿勢」について、それに関係する評価項目は多岐に渡るが、その中でも28、62、64、65、66、68、69、73の結果に注目したい。いずれも課題解決に向けて多様な意見や考えを反映し、合意を形成することに苦勞を伴う場面が多いことに対する評価であり、概ね良い平均値である。また、4月に比べて12月の方が良い結果となっている。人とのかかわる姿勢が身につき、その大切さに気づいた生徒が多いといえる。自由記述欄にもその結果を裏付ける記述が散見される。

「新しい経験への勇氣等、海外体験・留学参加への意欲を高める」ことについては、評価項目1、3、18、26、27、29、37の結果から、積極的にグローバル社会で活躍すべく、そのチャレンジ精神や海外へ飛び出していこうとする意欲が感じられる。ただ、評価項目30の平均値が今ひとつ思わしくなく、気にかかる結果となっている。この項目について低い評価を付けた生徒に個別にインタビューしてみたところ、次のようなことがわかった。グローバル社会に関する会議やシンポジウムに参加すること自体への意欲は高いが、そのような場面での英語の活用能力に不安を抱いているということが低い評価につながったということが判明した。

本校には豊富な海外体験学習プログラムが用意されており、それへの参加希望者は非常に多くなっている。また、高1の時点で長期の海外留学に出る生徒が複数現れたり、留学に関する相談希望者が増えていることから、海外体験や留学することへの意欲は高まっているといえる。

② 「課題研究」において大学や専門機関との連携を広げ、国際社会、環境、政治など、広い視点から、より明確なビジョンを持って進路を選択する。

SGH指定に伴い開設された科目であるGIの構成内容の一つである「課題研究ミーティング」において、特に大学や専門機関との連携が進んでいる。課題研究ミーティングで行われる講話は、共生に関わる様々な分野のタイムリーなテーマを取り上げ、生徒の興味・関心を持つ幅を広げることにつながっている。それが将来の職業選択や、それに伴う進学先の選択にもつながっている。今年度の例では、「SDGsの普及」をテーマにアクションプランに取り組んでいた高3の生徒が、自分たちの取り組んでいることに対して大学教員から適切な助言が得られたこと、その教員の研究テーマが自分の取り組んでみたいと考えていたことと合致していることから、当初志望していた大学から進学先を変更した。この春から、その大学教員による指導を受け、SDGsの普及をライフステージ上に位置づけて、自分がそのリーダーとなって取り組みたいと意欲を燃やしている。GIの取組は、将来の進路選択において重要な影響を与えるとともに、生徒自身に明確なビジョンをもたせることにつながっているといえる。

③ 国連やNGOと連携し、人々と共生することの理解を深め、グローバルな問題や課題を見つけ、行動を起こし、将来の様々な職業分野において使命感をもって社会貢献する。

共生を実現するうえでの課題を見出すとともに、その課題解決策を立案し、そのうえで、その解決策を実行するということを本校のSGHの取組では大切にしてきた。課題が生じている現状を知ることはもちろんのこと、立案した解決策の実行と有効性の検証など、どれをとっても「現場」に出かけ、自分の目と耳で確かめることは書くことのできない要素

である。それがきっかけとなって生徒自身が共生を果たすうえでの使命感をもち、社会に貢献する活動に取り組むようになって考えている。

カトリック学校である本校の設立母体は、「聖心会」という修道会である。聖心会自身が、国連経済社会理事会ECOSOCとの協議資格を持つNGOである「RSCJ at UN」を設立しており、ニューヨーク国連研修の研修プログラム（事前・事後学習およびフィールドワーク）の構築および実施（生徒への指導）に全面的な連携と協力をいただいている。国連の各部署に訪問し、様々なミーティングへの参加や、インタビュー、ディスカッションの機会をつくっていただくなど、RSCJ at UNの協力なしには叶わないことばかりである。また、研修プログラムの内容や効果をともに検証し、翌年度の研修に向けたプログラムの改善を図るなど連携が深められている。

高1で取り組まれている「難民や移民への支援」をテーマとした課題探究においても、チャイルド・フアンド・ジャパン、難民支援協会（JAR）、難民を助ける会（AAR Japan）等のNGOにフィールドワークへ協力いただいたり、これらのNGOが主催する講演会などで生徒に発表の機会を与えていただくなど連携を進めている。

<添付資料>

- ・平成30（2018）年度スーパーグローバルハイスクール研究報告書 第5年次
- ・平成30（2018）年度スーパーグローバルハイスクール探究学習・活動成果報告書
- ・SGH自己評価・アンケート集計結果（生徒対象および教員対象）

8 5年間の研究開発を終えて

（1）教育課程の研究開発の状況について

SGHの指定に伴って教育課程編成の特例が文部科学省より許可され、必修である科目である「社会と情報」や総合的な学習の時間、増単していたコミュニケーション英語Ⅰの単位数を減じ、各学年に2単位ずつ、学校設定科目としてGIを開設した。

GIの内容は、減じた科目や総合的な学習の時間の趣旨や内容を包括して構成した。科目毎に指導にあたるよりも体系的に整合性がとられるようになった。

科目名	単位数	標準 単位数	特例指定前			特例指定後		
			高1	高2	高3	高1	高2	高3
コミュニケーション英語Ⅰ	2	2	5			4		
社会と情報	2	2		1	1			
総合的な学習の時間	2	2	1	1	1			
グローバルイシューズ						2	2	2

（2）高大接続の状況について

姉妹校である聖心女子大学との間では、特に「人との共生」に関する探究活動について講師派遣や生徒の探究学習に対する指導や助言を仰ぐ機会が設けられ、有意義に作用したと考えている。また、キャリア教育に関する記述にもあるとおり、高大接続を意識した生徒へのアプローチもなされ、今年度の高3生には当初志望していた大学から変更し、聖心女子大学への進学を決定したようなケースも見られた。

（3）生徒の変化について

添付したSGH自己評価・アンケートの結果が示すとおり、探究学習やフィールドワーク、アクションプランの実行などグローバルリーダーとしての資質を磨くこのような取組には、最初は意義を感じたり、興味や関心を抱く者は多くはなかった。しかし、取組を進めるにつれてその意義を深く理解し、世界で起きている様々な社会問題に目を向けるようになり、グローバル社会に生きる一員としての自覚や、課題解決に自らが取り組もうとする姿勢に目覚めるなど、SGHの取組は生徒の発達に大いに資するところがあったと考えている。一方で気になる点もいくつか見出された。まず一つ目はグローバル社会で「リー

ダーとして活躍する」ことに躊躇する傾向がみられるということである。そして二つ目には、英語（外国語）の活用能力の向上が思うように達成できていないことを気にしていることである。自己の評価を低くつけた生徒に聞き取り調査を行ったところ、次のようなことが判明した。

- ・グローバル社会に飛び出すことを躊躇しているのではない
- ・むしろ、グローバル社会で自分も活躍したい、貢献したいと思っている
- ・しかし、「リーダーとして」となると自分にその能力や資質があるか自信がない
- ・英語ができないとグローバル社会で活躍するのは難しいのではないかとと思っている

気になる2つの点は連動しており、それがともに低評価に結びついたといえる。しかし、この聞き取り調査によって、決して生徒の意欲や意識が低いわけではなく、むしろグローバル社会で活躍することを望んでいたり、そのようなチャンスを自分でつかもうとしていることもわかった。本校ではSGHの趣旨を反映して開設した学校設定科目GIを指定終了後も開設することが決定している。引き続き、グローバル社会に生き、リーダーたる資質と能力をもてる人材を育成することに努めていきたい。

（４）教師の変化について

本校では従来より課題を見出す目を養い、その解決策を考えるという探究学習の要素を取り入れた授業に展開するよう教師に求めてきた。教師は皆、その趣旨を理解して教育活動を行っている。SGH指定に伴い、教科横断型ともいえる探究学習科目であるグローバルイシューズを開設した。その指導内容は体系化されている。

従来は課題解決策の立案にとどまっていたものが、実行に移すことを求められたSGHの取組は、教師にとっては戸惑いの連続であったことが添付資料にある教員対象のSGH自己評価・アンケート（以下、自己評価）の結果から読み取れる。この自己評価の結果から読み取れる教師の意識の変化について他にも取り上げてみたい。まず一つ目に、SGHの趣旨そのものや、その取組を行うことでグローバルリーダーの育成を推し進めること自体には、ほとんどの教師が賛成している一方で、そのために自分が指導する立場に立つとなると、様々な苦悩を感じる様子も読み取れる。評価項目03、04の結果は連動していることが多い。専門としている教科に関係したり、専門ではないが教師自身が興味・関心をもつ分野であると、生徒への指導も積極的になる傾向がみられる。そのような場合、生徒への適切な助言を与えられるよう教師自身が積極的に学ぶ傾向も高くなるのが特徴的である。一方、探究学習の指導を負担に感じている教師がいるのも事実である。探究学習にそもそも関心がないか、もしくは評価項目02、03の結果から、専門とする教科の特性上、探究学習を取り入れにくい、あるいは馴染みがない教師は探究学習に対する抵抗感が強い。探究学習への取組に対して比較的抵抗感が少ない教師（教科）と、抵抗感の強い教師（教科）の二極化の傾向があることがわかった。ただ、いずれの立場の教師も、評価項目07、17にあるように、グローバル教育の推進そのものには賛成しており、自由記述に残された意見からは探究学習そのものにも肯定的である。

また、探究学習に取り組む生徒のモチベーションが、指導する教師のモチベーションにも反映される傾向がみられることが明らかになった。このアンケートは記名式で行われているが、個々の教師の結果を詳細に分析してみたことがわかったことである。生徒のモチベーションをアップさせることは、教師にとっての永遠の課題である。個々の生徒の能力や、状況に対応した指導方法の工夫を考えていくことが求められる。

（５）学校における他の要素の変化について（授業・保護者等）

各教科・科目において、探究学習の要素を指導内容に取り入れたり、授業展開に反映させるなど波及効果が見られた。新しく告示された学習指導要領や、新しい大学入試制度で生徒に求められる資質や能力を養うための取組を先進的に行う機会が得られたと考えている。

保護者には当初、SGHの趣旨やGIの取組そのものについて、「生徒にどれだけ役立つものなのか」という懐疑的な見方が多かった。しかし、生徒が家庭学習でGIの課題に取

り組んでいる様子や、各発表会でのプレゼンテーションを目にする機会を通じて、物事を深く考えるきっかけを与えられたことや、社会生活を送るうえでの他者との関わり方について学ぶなど、成長の様子がうかがえる姿を見て、好意的な反応が多くを占めるようになった。一方で、現在のところまでは大学入試そのものが各教科・科目の知識や理解度をはかる内容であるため、探究学習の負担を懸念する声があることもまた事実である。

(6) 課題や問題点について

フィールドワークを海外で行うことについては様々な課題が生じた。当初は姉妹校が主催する海外体験学習をフィールドワークの場として活用することとしていたが、実際にはこちらが意図した内容を、その体験学習の内容に反映させることは非常に難しく、1年で断念した。これにより海外でのフィールドワークの場は、本校主催の海外体験学習（タイ王国）と、SGHの指定に伴って企画されたニューヨーク国連研修の2つしかなくなった。在校生の人数を考慮すればこれで十分な側面もあるが、より多くの選択肢を与えられなかった。本校の設立母体である聖心会や姉妹校ネットワークを活用し、本校主催の海外フィールドワークを設定することは可能ではあったと思われるが、その準備に時間的な制約があり、実現できなかったのは残念であった。また、海外にフィールドワークの場を求めた場合の経済的な負担についても大きな課題が残った。国からの予算措置では到底間に合わず、管理機関からの支援とともに、保護者にも応分の負担を求めた。保護者の経済的な負担能力によって、生徒が海外へのフィールドワークに参加できる・できないが左右されることは望ましいとはいえない。

英語の活用能力向上については大きな課題が残った。これについては英語科ともっと連携を取り、生徒の英語活用能力をこまめに把握することに努め、レベルに応じた指導計画の作成と指導内容の検討を行い、英語の授業に反映させることができたのではないかとと思われる。

(7) 今後の持続可能性について

SGH指定終了後も、学校設定科目である「グローバルイシューズ（GI）」を継続して開設するなど、この5年間で培った有意義な取組を継続することにした。今年度の第2回運営指導委員会の議論でもあったように、GIやその関連活動と総合学習や各教科の学習（特に中学校段階）の連携を図る教育課程を編成し、SGHで得られた成果を活かしながら、この取組をより発展させていく所存である。

【担当者】

担当課	札幌聖心女子学院高等学校	T E L	011-611-9231
氏 名	梅原 宏之	F A X	011-612-0980
職 名	教頭	e-mail	kyoto@spr-sacred-heart.ed.jp

教 科		標準	53回生		52回生				51回生												履修単位					
			S		G		S		G		S						G									
			1学年		1学年		2学年		2学年		3学年						3学年									
			必修	選択★	必修	必修	地歴選択◆	選択★	必修	選択■	私立文				国公文		理		必修	地歴選択◆	選択■	私立文	国公文	理		
											地歴選択◆	地歴演習選択▲	理科選択●	選択★	必修	地歴選択◆	社会演習選択▲	選択■								演習選択▲
国語	国語総合	4	5		5																					
	国語表現	3								2					2					2						
	現代文A	2																								
	現代文B	4				3			3	2					2			2		2						
	古典A	2																								
地理歴史	古典B	4				2			2	2					2			2		2						
	国語演習																									
	世界史A	2																								
	世界史B	4	2		2	2			2																	
	日本史A	2																								
	日本史B	4					4		4																	
	地理A	2																								
	地理B	4					4																			
	世界史特講										3				3							3				
	日本史特講										3				3							3				
公民	世界史演習										2				2							2				
	日本史演習														2							2				
	地理演習																					2				
	現代社会	2																								
数学	倫理	2								2					2			2		2						
	政治・経済	2	2		2																					
	公民演習	2															2		2							
	数学Ⅰ	3	4		3																					
	数学Ⅱ	4				4																				
	数学Ⅲ	5																								
	数学A	2	2		2																					
	数学B	2				2																				
	数学演習Ⅰ													2				2								
理科	数学演習Ⅱ																2	2								
	数学活用	2																								
	科学と人間生活	2																								
	物理基礎	2				2																				
	物理	4					2													2						
	化学基礎	2	3		3																					
	化学	4				2				2					2			2								
	生物基礎	2	2		2																					
	生物	4					2													2						
保健体育	地学基礎	2						2					2													
	地学	4																								
	環境科学							2					2													
	理科演習													4			2	2								
芸術	体育	7~8	2		2	2			2	3				3					3							
	保健	2	1		1	1			1																	
	音楽Ⅰ	2	1		1	1			1	1				1				1		1						
	音楽Ⅱ	2																								
	美術Ⅰ	2					2		2																	
	美術Ⅱ	2																				2				
外国語	書道Ⅰ	2					2		2																	
	書道Ⅱ	2												2									2			
	コミュニケーション英語基礎	2																								
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	4		4																					
	コミュニケーション英語Ⅱ	4				4			4																	
	コミュニケーション英語Ⅲ	4								4					4			4		4						
家庭	英語表現Ⅰ	2	2		3																					
	英語表現Ⅱ	4				2			3	2				2			2		3							
	英語会話	2			2				2	2							2			4						
	家庭基礎	2	2																							
情報	家庭総合	4							2											2						
	生活デザイン	4																								
	ライフデザイン（学設）									2																
	社会と情報	2																								
学定校科設目	情報の科学	2																								
	宗教		1		1	1			1	1				1				1		1			3	3	3	3
	社会福祉学習				1	1																	0~5	0~1	0~1	1~5
	社会福祉研究							2		2					2											
	ソフィアサイエンスクラブ		1			1				1				1				1					3	3	3	0
	クローハースキルスⅠ			1	1																					
総合的な学習の時間	クローハースキルスⅡ								2														0~1	0~1	0~1	5
	クローハースタディーズ																									
	クローハースイシュース		2		2	2			2	2				2			2		2				6	6	6	6
	総合的な学習の時間	3																					0	0	0	0
特別活動（ホーム活動）		3	1		1	1			1	1				1				1		1		3	3	3	3	
小計			37	1	38	32	4	2	36	2	29	3	2	2	2	31	3	2	2	34	2	2	31	3	2	
単位合計				38	38		38		38			38				38			38			114	114	114	114	

「社会と情報」、「総合的な学習の時間」は、SGH指定に伴う教育課程の特例により、「グローバルイシューズ」をもって代替とする。

高1 S G H自己評価・アンケート			評価平均 (4段階)
カテゴリー	評価項目		2018年 12月
国際理解・異文化理解・自国理解	1	いろいろな国（または文化圏出身）の人たちと知り合いになりたい	3.59
	2	外国の文化圏の美術、音楽、娯楽も受け入れることができる	3.59
	3	多文化的な環境に身を置くことに積極的に参加したい（異文化経験を積むために海外に行きたい）	3.63
	4	多文化的な環境に暮らすことはとても楽しく、興味深い	3.44
	5	外国で起きたいくつかの歴史的事件について関心を持つようになった	3.15
	6	外国の文化の歴史や地理を学ぶこと（知ること）は楽しい	3.33
	7	外国の文化・歴史・伝統・風習に興味をもつようになった	3.37
	8	世界の主な宗教の特色に関心を持つようになった	2.96
	9	外国を訪れたならば、地元の習慣や文化に触れたい	3.63
	10	外国を訪れたならば、地元の習慣や文化を尊重し、行動したい	3.52
	11	異なる文化的集団には、意見や考え方などに違いがある（あって当然である）とあらためて認識した	3.52
	12	異なる歴史的背景や文化圏出身の人々の考え方や行動を互いに理解しあうには努力が必要である	3.59
	13	難民や移民、少数民族の人達が新しい文化に適応するための手助けをしたい	3.44
	14	自分の国は素晴らしい国であり、その国民であることを誇りに思う（＝自分の国に生まれ育ってよかったとあらためて思う）	3.41
	15	自国の文化や習慣、歴史をあらためて見つめ直す必要があると思う	3.33
	16	自国の文化や習慣について、その良さを知ってもらいたい、伝えていきたい	3.59
	17	外国との交流を図るうえで、歴史上の関わりを考慮する必要があると考えるようになった	3.37
	18	外国人に積極的に話しかけ、英語の活用能力を向上させたり、歴史や文化を互いに知りあうきっかけをつかみたい	3.44
	19	文化的多様性を維持し、発展させることは共生を目指す社会に必要であり、役立つことである	3.41
国際貢献	20	将来、社会に貢献する活動に取り組んでみたい	3.44
	21	自らがリーダーとなり、周りの人々にも協力を求め、共に貢献活動を行っていききたい	3.07
	22	自分のもつ知識や技能を活用し、貢献活動を行うことでそれを喜んでくれる人や感謝してくれる人がいることは励みになる	3.44
	23	世界の自然や環境を守るために活動している機関を支援したい	3.41
	24	開発途上国の子どもたちが教育の機会に恵まれるよう支援していききたい	3.52
	25	難民や移民、貧困にあえいでいる人々にまずは自分のできる支援とは何かを考え、実行するようになった	3.33
	26	困難に直面しても、いろいろな人と協力して問題解決に取り組んでいきたい	3.41
	27	支援を求めている人々のニーズにあった貢献活動ができるよう、率先してアイデアを出していきたい	3.37
	28	他者の意見に耳を傾け、相手の気持ちを理解しようとするのが問題解決において大切である	3.48
	29	将来、国際的な仕事で活躍したい	3.19
	30	将来、グローバル社会に関する会議やシンポジウムに参加したい	3.11
外国語の活用	31	英語以外の外国語を学ぶことへの興味・関心が高まった（英語以外の外国語を学べる機会を得られたことは有意義であった）	3.37
	32	日本語を含め2つ以上の言語を学べることを誇りに思う	3.63
	33	英語（外国語）で書かれた新聞や雑誌に目を通す機会をもつようになった	3.30
	34	英語（外国語）を学ぶこと自体は大切だと感じるようになった	3.48
	35	英語（外国語）の学習は苦手なところもあるが、それを克服する努力を行っている	3.22
	36	いろいろな面から物事を考えられるよう、そのためのひとつの手段として英語を学習している	3.41
	37	英語（外国語）の活用能力を高めることは、グローバル社会で生き、活動するために必要なスキルの一つであると思う	3.63
	38	英語の4技能を身につけること自体も大切だが、その身につけた能力を生活や仕事、社会貢献の場で活かしていきたいと思う	3.41
	39	自分の言いたいことを英語（外国語）で表現できる	2.63
	40	日常生活において外国人と接するうえで、不自由のない程度にコミュニケーションがとれる英語（外国語）による会話が身についている	2.74
	41	英語（外国語）でのコミュニケーション能力をさらに高めていきたい	3.48
	42	今までに身につけた英語（外国語）の知識や技能をこれからも活用していきたい	3.59
	43	外国の人たちと知り合いになるきっかけをつかむために、英語（外国語）を学ぶのはひとつの有効な手段であると思う	3.56
	44	英語（外国語）を勉強することで、その言葉に対する知識や使い方について理解を深めることは楽しい	3.44
	45	英語（外国語）を学ぶことは、自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できるようになるための手段の一つである	3.52
S G Hの取組について	46	S G Hの取り組み全般は自分にとって有意義なものである（現時点で）	3.41
	47	G Iの取組みを始める前と現在とを比べると、「人との共生」「自然との共生」を図ることの大切さを認識するようになった	3.41
	48	難民や移民、少数民族の他に障害のある人やLGBTの人たちとの関わりなど、「人との共生」を様々な形で進めていくことが大切である	3.52
	49	世界のどこかで起こっているさまざまな社会問題に目を向けるようになった	3.33
	50	関心をもった社会問題について、その本質を見出したり、原因を探るようになった（探ろうとするようになった）	3.26
	51	生じているさまざまな社会問題について、知識や経験を活かして説明することができる	2.96
	52	PCやタブレット端末などICT機器を使うスキルを身につけ、積極的に活用するようになった（活用している）	3.30
	53	仮説を確かめるため、およびそれを実証するために必要な情報やデータを収集することができるようになった	3.37
	54	収集した情報やデータを適切に取捨選択できるようになった	3.26
	55	収集した情報やデータの信頼性や発信元を意識し、正確さを判断するよう努めた（判断できるようになった）	3.19
	56	収集した情報やデータを集計して図や表にまとめ、適切な使い方をすることができるようになった	3.15
	57	作成した図表や分析結果を用いて、有効な課題解決策を提案できるようになった	3.15
	58	「人との共生」や「自然との共生」を図るうえで課題となっていることを適切に捉えることができるようになった	3.37
	59	その課題がどれくらい重要であるかを判断し、その根拠を提示することができた	3.37
	60	課題解決に向けた仮説を立てることができた	3.19
	61	ターゲット（到達目標）を意識して課題を設定することができた	3.19
	62	課題が生じている原因を列挙し、重要度を考慮しながらチームメンバーとともに絞り込むことができた	3.19
	63	ライフステージを考慮し、18歳の自分が取り組むことができるものをアクションプランの最初のSTEPとして定めることができた	高3のみ
	64	より良い課題解決策を構築するためには、多様な意見や考えを可能な限り反映させることが必要だ	3.33
	65	合意形成を図るうえで、自分とは異なる意見や考えを反映させることは必要なことだ	3.52
	66	合意形成を図ることは難しい面もあったが、やりがいを感じた	3.33
	67	提案内容を初めて見聞きする人に対し、自分の言葉でわかりやすく、内容に工夫してプレゼンテーションするよう心がけた	3.19
	68	課題解決のためのアクションプランを実行するにあたり、外部機関との連携を模索し、積極的に交渉にあたった	高3のみ
	69	課題解決のためのアクションプランについて、その準備過程や実行したことによる成果を広く一般市民にも普及させようと努力した	高3のみ
	70	物事を批判的に分析することができるようになった	3.19
	71	分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる	3.19
	72	英語（外国語）の活用能力を身につけることはグローバル社会で活躍するためのツールであり、その他に専門的知識・技能が必要だと思う	3.37
	73	討論や交渉が必要な場面で、G Iでの経験を生かすことができると思う	3.48
	74	大学進学後や社会人となってからも、「共生」に向けた何らかの課題解決に向けたアクションに関わっていききたい	3.30
	75	タイムマネジメントを自ら適切に行うことができる	3.15
	76	下級生への引き継ぎを考慮し、報告書をまとめることができた	3.11

SGHの取り組みが貴方にもたらしたこと（自由記述、良い点も改善が必要な点も含めて）
「世界に目を向ける」と、一言で言っても「どこ」に「どんな立場」から見ていくのかによって、人・物・価値観・文化などが違ってくると言う、「学びの深さ」を実感した。よって、これまで以上に多方面から考えるようになったと思う。
SGHの取り組みは、大変なことがある分やり切った時の達成感をすごく感じた。SGHで学べることは、自分にとって良い影響ばかりですごく良い学びが出来ていると感じている。NY国連研修に行ける事を感謝して責任をもって頑張っていきたい。また、帰ってきたときには、学年全体に東京研修よりもっと良いプレゼンがしたいと思った。
SGHの取り組みを始めてから、普段あまり考えることのない日本や世界が抱える課題を解決する為に、私自身が貢献できることや何か力になれることはないかを自ら考えるようになった。
SGHの取り組みで意見を簡潔にまとめることができるようになった。しかし、課題を見つける点はあまりうまくはいかなかったと感じる。
英語力がついたと思う。
これまで人との共生に関して調べる機会はありませんでしたが、GIの事前学習を通して人との共生の大切さを感じることができて良かったです。しかし、人との共生の中でももう少し事前学習の内容に新しいものを加えるともっとよりよい研究になると思います。
ただ新聞などを読み調べることは自分でもできるけれど、さらに深く書籍やインターネットなどの様々な情報をもとにまとめ、より深く学ぶことが出来た。
他国と共生していくにあたり、世界の問題を知ることは大切なことであると強く思った。その為にも英語は必要不可欠であると感じた。
学びが深まった
この世の中のことが知れた
PCでの作業の仕方
物事を多様な観点から捉えること。チームと協力しないと大変だということ。
調べたり、レポートを作成する力、自分の意見や発想を発言する力
GIに取り組む前は自分自身の意見を客観的にまとめたり、批判的な目線を持って調べることはあまり得意ではありませんでしたが、先生型のサポートの元、それらのスキルを磨くことが出来、将来に役立つと思います。今行っているディベートもとても楽しいです！
人の意見を聞いたり、違うグループの物を見たりすることで様々な考えを知ることができた。自分が調べているところに実際行って確かめることも大切だと感じた。
文章をまとめる力がついた。世界の状況を知ることができた。
自分の調べてた事があまり結果に出せてなく、次回は生かしたいと思う。みんなと資料を共有できたことは良かった。
より広い視野で物事を見つめることの大切さを知り、前よりもそれが出来るようになった。改善点としては、まとめを作るのに苦労したので、もっとチームメンバーと連携して話したい。
調べ学習時の書籍やインターネットの使い方
関心をもった。
人との共生について考えられるようになった
SGHの取り組みによって今まで、興味もなかったことまで知ることが出来た。また、フィールドワークに行くことで、事前調査より詳しい情報を集めることが出来た。その経験を今後に活かしたいと思う
知識が深まった
世界の難民の状況を知り、教育を受けている自分たちが苦しんでいる人々の役に立ちたいと思いました。
SGHを通してどのようにまとめるかが分かるようになった

高2 SGH自己評価・アンケート			評価平均(4段階)	
カテゴリ	評価項目		2018年 4月	2018年 12月
国際理解・異文化理解・自国理解	1	いろいろな国（または文化圏出身）の人たちと知り合いになりたい	3.48	3.43
	2	外国の文化圏の美術、音楽、娯楽も受け入れることができる	3.61	3.70
	3	多文化的な環境に身を置くことに積極的に参加したい（異文化経験を積むために海外に行きたい）	3.35	3.27
	4	多文化的な環境に暮らすことはとても楽しく、興味深い	3.45	3.30
	5	外国で起きたいいくつかの歴史的事件について関心を持つようになった	2.26	3.20
	6	外国の文化の歴史や地理を学ぶこと（知ること）は楽しい	3.23	3.30
	7	外国の文化・歴史・伝統・風習に興味をもつようになった	3.61	3.33
	8	世界の主な宗教の特色に関心を持つようになった	2.48	3.03
	9	外国を訪れたならば、地元の習慣や文化に触れたい	3.52	3.47
	10	外国を訪れたならば、地元の習慣や文化を尊重し、行動したい	3.32	3.57
	11	異なる文化的集団には、意見や考え方などに違いがある（あって当然である）とあらためて認識した	3.55	3.67
	12	異なる歴史的背景や文化圏出身の人々の考え方や行動を互いに理解しあうには努力が必要である	2.45	3.63
	13	難民や移民、少数民族の人達が新しい文化に適応するための手助けをした		3.20
	14	自分の国はすばらしい国であり、その国民であることを誇りに思う（自分の国に生まれ育ってよかったとあらためて思う）	3.32	3.53
	15	自国の文化や習慣、歴史をあらためて見つめ直す必要があると思う	3.32	3.43
	16	自国の文化や習慣について、その良さを知ってもらいたい、伝えていきたい		3.37
	17	外国との交流を図るうえで、歴史上の関わりを考慮する必要があると考えるようになった		3.57
	18	外国人に積極的に話しかけ、英語の活用能力を向上させたり、歴史や文化を互いに知りあうきっかけをつかみたい		3.30
	19	文化的多様性を維持し、発展させることは共生を目指す社会に必要であり、役立つことである		3.37
国際貢献	20	将来、社会に貢献する活動に取り組んでみたい	3.23	3.40
	22	自分のもつ知識や技能を活用し、貢献活動を行うことでそれを喜んでくれる人や感謝してくれる人があることは励みになる	3.42	3.40
	23	世界の自然や環境を守るために活動している機関を支援したい	3.23	3.30
	24	開発途上国の子どもたちが教育の機会に恵まれるよう支援していきたい		3.33
	25	難民や移民、貧困にあえいでいる人々にまずは自分でできる支援とは何かを考え、実行するようになった		3.03
	26	困難に直面しても、いろいろな人と協力して問題解決に取り組んでいきたい	3.23	3.33
	27	支援を求めている人々のニーズにあった貢献活動ができるよう、率先してアイデアを出していきたい	3.10	3.13
	28	他者の意見に耳を傾け、相手の気持ちを理解しようとするのが問題解決において大切である	3.35	3.53
	29	将来、国際的な仕事で活躍したい	2.97	2.93
	30	将来、グローバル社会に関する会議やシンポジウムに参加したい	2.74	2.43
外国語の活用	31	英語以外の外国語を学ぶことへの興味・関心が高まった（英語以外の外国語を学べる機会を得られたことは有意義であった）	3.35	3.17
	32	日本語を含め2つ以上の言語を学べることを誇りに思う	3.06	3.47
	33	英語（外国語）で書かれた新聞や雑誌に目を通す機会をもつようになった	2.48	2.77
	34	英語（外国語）を学ぶこと自体は大切だと感じるようになった	2.10	3.77
	35	英語（外国語）の学習は苦手なところもあるが、それを克服する努力を行っている		3.20
	36	いろいろな面から物事を考えられるよう、そのためのひとつの手段として英語を学習している	3.10	3.20
	37	英語（外国語）の活用能力を高めることは、グローバル社会で生き、活動するために必要なスキルの一つであると思う	3.35	3.53
	38	英語の4技能を身につけること自体も大切だが、その身につけた能力を生活や仕事、社会貢献の場で活かしていきたいと思う		3.40
	39	自分の言いたいことを英語（外国語）で表現できる	2.52	2.62
	40	日常生活において外国人と接するうえで、不自由のない程度にコミュニケーションがとれる英語（外国語）による会話が身に付いて	2.45	2.62
	41	英語（外国語）でのコミュニケーション能力をさらに高めていきたい	3.61	3.57
	42	今までに身につけた英語（外国語）の知識や技能をこれからも活用していきたい	3.48	3.40
	43	外国人のたちと知り合いになるきっかけをつかむために、英語（外国語）を学ぶのはひとつの有効な手段であると思う	3.42	3.57
	44	英語（外国語）を勉強することで、その言葉に対する知識や使い方について理解を深めることは楽しい	3.13	3.17
	45	英語（外国語）を学ぶことは、自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できるようになるための手段の一つである	3.42	3.63
SGHの取組について	46	SGHの取り組み全般は自分にとって有意義なものである（現時点で）	3.06	3.23
	47	G Iの取組みを始める前と現在とを比べると、「人との共生」や「自然との共生」を図ることの大切さを認識するようになった	3.29	3.63
	48	難民や移民、少数民族の他に障害のある人やLGBTの人たちとの関わりなど、「人との共生」を様々な形で進めていくことが大切である		3.60
	49	世界のどこかで起こっているさまざまな社会問題に目を向けるようになった	2.77	3.50
	50	関心をもった社会問題について、その本質を見出し、原因を探るようになった（探ろうとするようになった）	3.03	3.13
	51	生じているさまざまな社会問題について、知識や経験を活かして説明することができる	2.65	2.90
	52	PCやタブレット端末などICT機器を使うスキルを身につけ、積極的に活用するようになった（活用している）	3.42	3.40
	53	仮説を確かめるため、およびそれを実証するために必要な情報やデータを収集することができるようになった	2.97	3.27
	54	収集した情報やデータを適切に取捨選択できるようになった	3.06	3.27
	55	収集した情報やデータの信頼性や発信元を意識し、正確さを判断するよう努めた（判断できるようになった）	3.10	3.30
	56	収集した情報やデータを集計して図や表にまとめ、適切な使い方をすることができるようになった	2.90	3.23
	57	作成した図表や分析結果を用いて、有効な課題解決策を提案できるようになった	2.84	3.07
	58	「人との共生」や「自然との共生」を図るうえで課題となっていることを適切に捉えることができるようになった	3.10	3.27
	59	その課題がどれくらい重要であるかを判断し、その根拠を提示することができた	2.65	3.30
	60	課題解決に向けた仮説を立てることができた	2.90	3.17
	61	ターゲット（到達目標）を意識して課題を設定することができた		3.10
	62	課題が生じている原因を列挙し、重要度を考慮しながらチームメンバーとともに絞り込むことができた	3.03	3.00
	63	ライフステージを考慮し、18歳の自分が取り組むことができるものをアクションプランの最初のSTEPとして定めることができた		高3のみ
	64	より良い課題解決策を構築するためには、多様な意見や考えを可能な限り反映させることが必要だ	3.23	3.27
	65	合意形成を図るうえで、自分とは異なる意見や考えを反映させることは必要なことだ	2.94	3.27
	66	合意形成を図ることは難しい面もあったが、やりがいを感じた		3.23
	67	提案内容を初めて見聞きする人に対し、自分の言葉でわかりやすく、内容に工夫してプレゼンテーションするよう心がけた	2.90	3.27
	68	課題解決のためのアクションプランを実行するにあたり、外部機関との連携を模索し、積極的に交渉にあたった		高3のみ
	69	課題解決のためのアクションプランについて、その準備過程や実行したことによる成果を広く一般市民にも普及させようと努力した		高3のみ
	70	物事を批判的に分析することができるようになった	2.84	3.17
	71	分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる	2.90	3.13
	72	英語（外国語）の活用能力を身につけることはグローバル社会で活躍するためのツールであり、その他に専門的知識・技能が必要だ	3.29	3.50
	73	討論や交渉が必要な場面で、G Iでの経験を生かすことができると思う	3.39	3.40
	74	大学進学後や社会人となってからも、「共生」に向けた何らかの課題解決に向けたアクションに関わっていきたい	3.06	3.20
	75	タイムマネージメントを自ら適切に行うことができる	2.68	3.03
	76	下級生への引き継ぎを考慮し、報告書をまとめることができた	3.13	3.13

※質問項目は整理・統合を重ねているため、一部の項目については比較できないことをご容赦ください。

SGHの取り組みが貴方にもたらしたこと（自由記述、良い点も改善が必要な点も含めて）
日本国内だけでなく世界全体に目を向けることができた。また、情報が行動の基盤になることなどを実感した。
人との繋がり
日本国内だけでなく世界全体に目を向けることができた。また、情報が行動の基盤になることなどを実感した。
自分の意見を簡潔にまとめて述べる力がついたこと。
SGHの取り組みによって人との出会いが増え、沢山の刺激をいただいた。同世代はもちろん、多くの経験を経た先輩方から受けたアドバイスは、私たちだけでは考えが及ばなかったことばかりで、客観的な考えを取り入れることに大切さを学ぶことができた。
上手くいかないこともあり躓いたこともあったのですが、今になって振り返ってみると全て無駄なことはなかったと感じることができました。外部の人と交渉するのはやっぱり大変なことが多かったので先生方のきちんとしたご指導がもうちょっと必要だと感じました。失敗したことも全て自分のためになったと思います。
高1から高3まで、GIの授業が大変でしたが、根性、伝えること、悪いところをどのように改善していくか(アクションプラン)、行動力…多くのことが身につきました。
良い点は、課題探求学習において、人や自然との共生の大切さに改めて気づき、自ら問題解決に取り組めるようになったこと。高校に入学するまでは、積極的に行動できていない自分がいたが、SGHの取り組みによって知識と自信を持って行動できるようになった。改善点は、高校三年生からは進路関係で忙しく、SGHの取り組みまで手が回らない。レポート作成や提出期間など大変苦労した。
SGHの取り組みを通し、持続可能な社会について考えるようになりました。それぞれの生徒が幅広いグローバル 이슈ズを選んだように、この世界には解決すべき多くの問題があります。それらをステップを組んで長期的な解決に繋げていくためには、社会全体の意識改革が必要です。自分自身のアクションに留めず、過程や結果、現状などをより多くの人と共有することが持続可能な社会、問題解決において必要なことなのだと思えました。今後の自分の心構えと学びにつながっていく良い経験となりました。
世界の社会問題を広い視野で見えて考えることができた。
答えのない課題に対して取り組み姿勢を学ぶことができた
世界の問題に目を向けられるようになった。特に、難民・SDGsについて考えるようになった。
スケジュール管理の大切さ
忍耐力ができました。
世界の問題に目を向けることができた。
多面からの思考ができるようになったと思う。また、アクションプランを通して、人との共生を深く学べたと思う。
もっと期日などを明確にする必要があると思う
英語でのディベートは言語の力はもちろん、チームメイトと協力し、自分の役割を果たすことの重要性を学びました。アクションプランにおいては、日本だけでなく世界で起きている問題に対し自分は何が出来るのか、どうしていけばよりよい世界になるのか考えるいい機会になったが高校生の私たちにはスケールが大きすぎる為、小さな問題を沢山集め、グループになって一つ一つ話し合う方が今の私たちには向いているのではないかと思います。
自ら考え実行することの大切さを知れた。
グローバルな視野をもつことができた
GIを行うまでは共生という言葉すら知りませんでしたが、体でも頭でも心でも共生というもんものについて学ぶことができました。
高校一年生からの三年間を通して、文章力をつけることができました。この先大学や社会に出ていくうえで必要な力を身に付けることができました。
大人の方との電話のやり取りや名刺の受け取りを体験することが出来ました。今日、世界で問題となっている事柄について知ることが出来たと共に、問題に対して意識し、目を向けられるようになりました。
問題を捉える際に多面からの視点を重要視するようになったこと。
自分から考えて行動することの大切さを学びました。
共生について考えるようになりました。
物事を考える視野が広がったこと
ただ目標達成のために考えるだけではなく、実行出来るようなアクションプランを立て、自分で行い、皆で実行する道筋を立てるという事までが大切だと学ぶことができた。
世界の問題に目を向ける機会をくれ、今の私にできることを精一杯行おうという意欲的な姿勢が身に着いた。
世界で起きる出来事を他人事としてではなく私事として考えられる事ができるようになった
自ら行動する力が養われた。
大学や将来就職してからやるようなことをいまのうちに経験できて良かった。大変なことだけれど自分の力になることなので続けて欲しい。
知らないことの怖さを知った
最初は、GIと課題を両立するのが難しかったですが、GIを終えて今思うことは学ぶものが計り知れないということです。後輩には、ぜひこれからも頑張ってもらいたいです。

高3 S G H自己評価・アンケート		評価平均(4段階)		参考
カテゴリ	評価項目	2018年 4月	2018年 12月	前年度の 高3の12月
国際理解・異文化理解・自国理解	1 いろいろな国（または文化圏出身）の人たちと知り合いになりたい	3.69	3.71	3.50
	2 外国の文化圏の美術、音楽、娯楽も受け入れることができる	3.50	3.91	
	3 多文化的な環境に身を置くことに積極的に参加したい（異文化経験を積むために海外に行きたい）	3.67	3.69	3.23
	4 多文化的な環境に暮らすことはとても楽しく、興味深い	3.47	3.54	3.67
	5 外国で起きたいくつかの歴史的事件について関心を持つようになった	2.61	3.34	2.53
	6 外国の文化の歴史や地理を学ぶこと（知ること）は楽しい	3.17	3.34	3.50
	7 外国の文化・歴史・伝統・風習に興味をもつようになった	3.44	3.63	3.13
	8 世界の主な宗教の特色に関心を持つようになった	2.58	3.26	2.93
	9 外国を訪れたならば、地元の習慣や文化に触れたい	3.67	3.71	3.60
	10 外国を訪れたならば、地元の習慣や文化を尊重し、行動したい	3.69	3.71	
	11 異なる文化的集団には、意見や考え方などに違いがある（あって当然である）とあらためて認識した	3.69	3.74	3.67
	12 異なる歴史的背景や文化圏出身の人々の考え方や行動を互いに理解しあうには努力が必要である	3.14	3.66	
	13 難民や移民、少数民族の人達が新しい文化に適応するための手助けをしたい		3.54	
	14 自分の国は素晴らしい国であり、その国民であることを誇りに思う（自分の国に生まれ育ってよかったとあらためて思う）	3.42	3.71	3.50
	15 自国の文化や習慣、歴史をあらためて見つめ直す必要があると思う	3.42	3.51	
	16 自国の文化や習慣について、その良さを知ってもらいたい、伝えていきたい		3.57	3.37
	17 外国との交流を図るうえで、歴史上の関わりを考慮する必要があると考えるようになった		3.34	
	18 外国人に積極的に話しかけ、英語の活用能力を向上させたり、歴史や文化を互いに知りあうきっかけをつかみたい		3.57	3.27
	19 文化的多様性を維持し、発展させることは共生を目指す社会に必要であり、役立つことである		3.71	
国際貢献	20 将来、社会に貢献する活動に取り組んでみたい	3.50	3.71	3.03
	22 自分のもつ知識や技能を活用し、貢献活動を行うことでそれを喜んでくれる人や感謝してくれる人があることは励みになる	3.72	3.80	
	23 世界の自然や環境を守るために活動している機関を支援したい	3.42	3.37	3.37
	24 開発途上国の子どもたちが教育の機会に恵まれるよう支援していきたい		3.74	3.63
	25 難民や移民、貧困にあえいでいる人々にまずは自分でできる支援とは何かを考え、実行するようになった		3.71	3.47
	26 困難に直面しても、いろいろな人と協力して問題解決に取り組んでいきたい	3.42	3.74	3.43
	27 支援を求めている人々のニーズにあった貢献活動ができるよう、率先してアイデアを出していきたい	3.14	3.63	3.47
	28 他者の意見に耳を傾け、相手の気持ちを理解しようとするのが問題解決において大切である	3.39	3.74	3.50
	29 将来、国際的な仕事で活躍したい	3.11	3.37	2.97
	30 将来、グローバル社会に関する会議やシンポジウムに参加したい	2.67	2.97	2.60
外国語の活用	31 英語以外の外国語を学ぶことへの興味・関心が高まった（英語以外の外国語を学べる機会を得られたことは有意義であった）	3.33	3.60	3.57
	32 日本語を含め2つ以上の言語を学べることを誇りに思う	3.06	3.66	3.03
	33 英語（外国語）で書かれた新聞や雑誌に目を通す機会をもつようになった	2.44	3.17	2.67
	34 英語（外国語）を学ぶことは自分にとって大切なことだと感じるようになった	2.42	3.80	3.33
	35 英語（外国語）の学習は苦手なところもあるが、それを克服する努力を行っている		3.43	
	36 いろいろな面から物事を考えられるよう、そのためのひとつの手段として英語を学習している	3.36	3.49	3.03
	37 英語（外国語）の活用能力を高めることは、グローバル社会で生き、活動するために必要なスキルの一つであると思う	3.56	3.80	3.60
	38 英語の4技能を身につけることも自分にとって大切なことだが、その身につけた能力を生活や仕事、社会貢献の場で活かしていきたいと思う		3.66	
	39 自分の言いたいことを英語（外国語）で表現できる	2.69	2.94	2.83
	40 日常生活において外国人と接するうえで、不自由のない程度にコミュニケーションがとれる英語（外国語）による会話力が身についている	2.64	3.11	
	41 英語（外国語）でのコミュニケーション能力をさらに高めていきたい	3.86	3.71	
	42 今までに身につけた英語（外国語）の知識や技能をこれからも活用していきたい	3.53	3.69	3.47
	43 外国の人たちと知り合いになるきっかけをつかむために、英語（外国語）を学ぶのはひとつの有効な手段であると思う	3.64	3.69	3.60
	44 英語（外国語）を勉強することで、その言葉に対する知識や使い方について理解を深めることは楽しい	3.42	3.60	2.93
	45 英語（外国語）を学ぶことは、自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できるようになるための手段の一つである	3.64	3.80	3.13
S G Hの取組について	46 S G Hの取り組み全般は自分にとって有意義なものである（現時点で）	3.53	3.54	3.50
	47 G Iの取り組みを始める前と現在とを比べると、「人との共生」や「自然との共生」を図ることの大切さを認識するようになった	3.72	3.80	3.53
	48 難民や移民、少数民族の他に障害のある人やLGBTの人たちとの関わりなど、「人との共生」を様々な形で進めていくことが大切である		3.86	
	49 世界のどこかで起こっているさまざまな社会問題に目を向けるようになった	3.00	3.66	3.13
	50 関心をもった社会問題について、その本質を見出したり、原因を探るようになった（探ろうとするようになった）	3.14	3.63	3.50
	51 生じているさまざまな社会問題について、知識や経験を活かして説明することができる	2.83	3.37	3.10
	52 PCやタブレット端末などICT機器を使うスキルを身につけ、積極的に活用するようになった（活用している）	3.50	3.54	3.07
	53 仮説を確かめるため、およびそれを実証するために必要な情報やデータを収集することができるようになった	3.03	3.60	3.23
	54 収集した情報やデータを適切に取捨選択できるようになった	3.19	3.57	3.20
	55 収集した情報やデータの信頼性や発信元を意識し、正確さを判断するようになった（判断できるようになった）	3.11	3.49	3.20
	56 収集した情報やデータを集計して図や表にまとめ、適切な使い方をすることができるようになった	3.14	3.46	3.13
	57 作成した図表や分析結果を用いて、有効な課題解決策を提案できるようになった	2.94	3.37	2.87
	58 「人との共生」や「自然との共生」を図るうえで課題となっていることを適切に捉えることができるようになった	3.14	3.57	3.50
	59 その課題がどれくらい重要であるかを判断し、その根拠を提示することができた	2.83	3.51	3.00
	60 課題解決に向けた仮説を立てることができた	2.94	3.49	3.03
	61 ターゲット（到達目標）を意識して課題を設定することができた	3.33	3.63	3.53
	62 課題が生じている原因を列挙し、重要度を考慮しながらチームメンバーとともに絞り込むことができた	3.08	3.50	2.87
	63 ライフステージを考慮し、18歳の自分が取り組むことができるものをアクションプランの最初のSTEPとして定めることができた	3.36	3.71	3.47
	64 より良い課題解決策を構築するためには、多様な意見や考えを可能な限り反映させることが必要だ	3.39	3.63	3.50
	65 合意形成を図るうえで、自分とは異なる意見や考えを反映させることは必要なことだ	3.00	3.66	3.50
	66 合意形成を図ることは難しい面もあったが、やりがいを感じた		3.54	
	67 提案内容を初めて見聞きする人に対し、自分の言葉でわかりやすく、内容に工夫してプレゼンテーションするよう心がけた	2.86	3.60	3.07
	68 課題解決のためのアクションプランを実行するにあたり、外部機関との連携を模索し、積極的に交渉にあたった		3.37	3.37
	69 課題解決のためのアクションプランについて、その準備過程や実行したことによる成果を広く一般市民にも普及させようと努力した		3.40	
	70 物事を批判的に分析することができるようになった	3.17	3.31	
	71 分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる	3.11	3.46	3.14
	72 英語（外国語）の活用能力を身につけることはグローバル社会で活躍するためのツールであり、その他に専門的知識・技能が必要だ	3.31	3.60	3.43
	73 討論や交渉が必要な場面で、G Iでの経験を生かすことができると思う	3.56	3.63	3.40
	74 大学進学後や社会人となってからも、「共生」に向けた何らかの課題解決に向けたアクションに関わっていきたい	3.39	3.51	3.20
	75 タイムマネジメントを自ら適切に行うことができる	2.86	3.34	3.13
	76 下級生への引き継ぎを考慮し、報告書をまとめることができた	2.83	3.51	3.50

※質問項目は整理・統合を重ねているため、一部の項目については比較できないことをご容赦ください。

SGHの取組みが貴方にもたらしたこと（自由記述、良い点も改善が必要な点も含めて）
日本国内だけでなく世界全体に目を向けることができた。また、情報が行動の基盤になることなどを実感した。
人との繋がり
日本国内だけでなく世界全体に目を向けることができた。また、情報が行動の基盤になることなどを実感した。
自分の意見を簡潔にまとめて述べる力がついたこと。
SGHの取組みによって人との出会いが増え、沢山の刺激をいただいた。同世代はもちろん、多くの経験を経た先輩方から受けたアドバイスは、私たちだけでは考えが及ばなかったことばかりで、客観的な考えを取り入れることに大切さを学ぶことができた。
上手くいかないこともあり讀いたこともあったのですが、今になって振り返ってみると全て無駄なことはなかったと感じることができました。外部の人と交渉するのはやっぱり大変なことが多かったのですが先生方のきちんとしたご指導がもうちょっと必要だと感じました。失敗したことも全て自分のためになったと思います。
高1から高3まで、GIの授業が大変でしたが、根性、伝えること、悪いところをどのように改善していくか(アクションプラン)、行動力…多くのことが身につきました。
良い点は、課題探求学習において、人や自然との共生の大切さに改めて気づき、自ら問題解決に取り組めるようになったこと。高校に入学するまでは、積極的に行動できていない自分がいたが、SGHの取組みによって知識と自信を持って行動できるようになった。改善点は、高校三年生からは進路関係で忙しく、SGHの取組みまで手が回らない。レポート作成や提出期間など大変苦労した。
SGHの取組みを通し、持続可能な社会について考えるようになりました。それぞれの生徒が幅広いグローバルイシューを選んだように、この世界には解決すべき多くの問題があります。それらをステップを組んで長期的な解決に繋げていくためには、社会全体の意識改革が必要です。自分自身のアクションに留めず、過程や結果、現状などをより多くの人と共有することが持続可能な社会、問題解決において必要なことなのだと実感しました。今後の自分の心構えと学びにつながっていく良い経験となりました。
世界の社会問題を広い視野で見て考えることができた。
答えのない課題に対して取り組む姿勢を学ぶことができた
世界の問題に目を向けられるようになった。特に、難民・SDGsについて考えるようになった。
スケジュール管理の大切さ
忍耐力がつけました。
世界の問題に目を向けることができた。
多方面からの思考ができるようになったと思う。また、アクションプランを通して、人との共生を深く学べたと思う。
もっと期日などを明確にする必要があると思う
英語でのディベートは言語の力はもちろん、チームメイトと協力し、自分の役割を果たすことの重要さを学びました。アクションプランにおいては、日本だけでなく世界で起こっている問題に対し自分は何が出来るのか、どうしていけばよりよい世界になるのか考えるいい機会になったが高校生の私たちにはスケールが大きすぎる為、小さな問題を沢山集め、グループになって一つ一つ話し合う方が今の私たちには向いているのではないかと思います。
自ら考え実行することの大切さを知れた。
グローバルな視野をもつことができた
GIを行うまでは共生という言葉すら知りませんでした。体でも頭でも心でも共生というもんものについて学ぶことができました。
高校一年生からの三年間を通して、文章力をつけることができました。この先大学や社会に出ていくうえで必要な力を身に着けることができました。
大人の方との電話のやり取りや名刺の受け取りを体験することが出来ました。今日、世界で問題となっている事柄について知ることが出来たと共に、問題に対して意識し、目を向けられるようになりました。
問題を捉える際に多方面からの視点を重要視するようになったこと。
自分から考えて行動することの大切さを学びました。
共生について考えるようになりました。
物事を考える視野が広がったこと
ただ目標達成のために考えるだけではなく、実行出来るようなアクションプランを立て、自分で行い、皆で実行する道筋を立てるという事までが大切だと学ぶことができた。
世界の問題に目を向ける機会をくれ、今の私にできることを精一杯行おうという意欲的な姿勢が身に着いた。
世界で起きる出来事を他人事としてではなく私事として考えられる事ができるようになった
自ら行動する力が養われた。
大学や将来就職してからやるようなことをいまのうちに経験できて良かった。大変なことだけれど自分の力になることなので続けて欲しい。
知らないことの怖さを知った
最初は、GIと課題を両立するのが難しかったのですが、GIを終えて今思うことは学ぶものが計り知れないということです。後輩には、ぜひこれからも頑張ってください。

教員対象 S G H自己評価・アンケート		評価(4段階)			
カテゴリー	評価項目	非常に そう思う	そう思う	あまり 思わない	全く 思わない
教員・学校にもたらした効果	1 SGHの趣旨を理解し、生徒への指導に積極的に取り組んだ	26.92%	65.39%	3.85%	3.85%
	2 SGHの取組に関わることは、自分にとって負担が大きかった	19.23	42.31	30.77	7.69
	3 自身の教科の専門性を活かした指導をすることができた	15.38	61.54	15.38	7.69
	4 生徒への指導テーマが専門外のことであったも、適切な助言を与えられるよう自身も学ぶよう努力した	26.92	61.54	7.69	3.85
	5 SGHの取組は、自身の指導力向上に役に立った	34.62	53.85	7.69	3.85
	6 専門とする教科の指導に探究学習を取り入れるようになった	7.69	53.85	30.77	7.69
	7 SGHの取組を通じて、グローバル教育の推進が必要だと思うようになった	34.62	65.38	0.00	0.00
	8 多様な意見や考え方があることに気付かせるよう、適切な助言を与えることができた	26.92	69.23	0.00	3.85
	9 客観性をもたせることを意識し、その根拠やデータを提示できるよう指導した	38.46	53.85	3.85	3.85
	10 外国語の活用能力を高める効果的な指導法の研究と改善を進めるべきであると思う	30.77	69.23	0.00	0.00
	11 フィールドワークやアクションプランなどで外部機関と連携することは、教育活動を進めるうえで有益であった	53.85	42.31	3.85	0.00
	12 SGHの取組を通じて教員間の協力関係の構築や、連携が図られた	23.08	53.85	23.08	0.00
	13 全ての教員が関わって指導にあたることが望ましいと思う	46.15	34.62	19.23	0.00
	14 SGHの取組は、学校運営の改善や強化に役に立った	15.38	53.85	30.77	0.00
	15 SGHの取組は地域住民やが学校関係者以外にも、学校そのものや生徒の取組を知って貰う良いきっかけとなった	46.15	53.85	0.00	0.00
	16 本校の研究開発テーマに基づいたSGHの取組は、グローバル社会で活躍する人材の育成に役に立つことだと思う	61.54	38.46	0.00	0.00
	17 本校での取組に限らず、SGHの取組は全般的に将来のグローバルリーダーの育成に役に立つと思う	38.46	57.69	3.85	0.00
	18 国からの予算措置は、フィールドワークの旅費やICT設備など、学習環境の整備に役立った	46.15	46.15	7.69	0.00
生徒にもたらした効果	19 自国の文化や歴史をより深く知ろうとするようになった	11.54	61.54	26.92	0.00
	20 外国の文化や歴史をより深く知ろうとするようになった	23.08	69.23	7.69	0.00
	21 国際的な貢献活動・社会貢献活動に参加する意欲が高まったり、意義を深く理解するようになった	30.77	65.38	3.85	0.00
	22 身の回りで起こっている社会問題へ目を向けるようになった	30.77	69.23	0.00	0.00
	23 本校の研究開発テーマである「人との共生」「自然との共生」について探究する意義を理解するようになった	23.08	69.23	7.69	0.00
	24 周囲と協力して取り組む姿勢がみられるようになった	26.92	65.38	7.69	0.00
	25 粘り強く取り組む姿勢がみられるようになった	26.92	61.54	11.54	0.00
	26 課題を見出す目が養われた	23.08	65.38	11.54	0.00
	27 多様な意見や考えを反映し、課題解決策を生み出すよう努力していた	19.23	76.92	3.85	0.00
	28 自ら調べ、考える姿勢がみられるようになった	26.92	69.23	3.85	0.00
	29 ICTを活用する能力が育ってきている（向上している）	53.85	42.31	3.85	0.00
	30 情報を収集するにあたり、図書館とインターネットそれぞれの特性を理解し、使い分けることができていた	19.23	57.69	23.08	0.00
	31 情報の取捨選択能力が育ってきている	11.54	69.23	19.23	0.00
	32 批判的分析力が育ってきている	11.54	46.15	42.31	0.00
	33 自分の考えや意見をデータや根拠を提示して示すようになった	19.23	69.23	11.54	0.00
	34 プレゼンテーション能力（文章表現力、限られた文字数での要点提示、図表・データの活用）が育ってきている	46.15	53.85	0.00	0.00
	35 生徒の負担は増しているように感じる	61.54	34.62	3.85	0.00
	36 生徒にとって、フィールドワークやアクションプランは探究学習や課題解決に有益に作用していた	57.69	42.31	0.00	0.00
探究学習を進めるうえでの課題や成果、グローバルイシューズを指導してみでの感想など、SGHの取組に思うところを自由にお書き下さい					
有益なことも多かった一方で、生徒の能力差を大きく感じる（時間の使い方、情報処理能力、発表能力）を感じました。差が大きいので、一律な指導には難しさを感じます。					
これまでの実践を今後に活かしていかなければならないが、指定が終了した中で具体的にどうしていくか悩ましいところである。実践が上手くいくかどうかは各学年の生徒たちの特性にも随分左右されると思う。教員の意識としても「一段落」という感じになってしまっているので、上手くつないでいかなければと考えている。					
探究学習を教科・科目に取り入れるのではなく、教科・科目の指導内容そのものを探究的要素にした方が良い。そのためには、今の教科書の内容を精選してもらいたい。あれもこれもでは生徒はパンクしてしまう。					
国内外のフィールドワークは事前事後学習をしっかりと行った上で出かけていたので実りが大きかったと思います。					
そもそも問題を問題だと思える力、問題を解決したいと思うモチベーションがない生徒に対しては、成果が得難いが、熱心に取り組む生徒の姿を見せることだけでも意味のある活動だと思う。					
生徒は忙しかったと思う。悪い事ではない。しかし、一つのことにじっくり取り組むには時間が足りなかった。教員も慌ただしい。担任として年次進行でGIに関わり、NY以外は全て経験した。一つひとつは良いものと思ったが、個人的には負担も大きかった。特に後期高3の指導と共に、高2ディベートに関わったが、時間的にはきつかった。教員配置は課題と感じた。					
聖心の教育は元来、SGHの取り組みと同様な取り組みをしてきたので、大々的な新しいプログラムとは考えずに指導しやすかったと感じます。					
授業時間外で行わなければならない課題が多く、特定の生徒への負担が大きくなってしまったと感じました。グループの人数が多いと、生徒同士協力して取り組むよう指導することが難しく、それが課題であると感じました。					
特定の生徒に負担が集中する傾向を感じるが、素晴らしい試みだと思えます。					
教員の負担も生徒の負担もとても大きかったが、生徒たちに世界の問題について考えさせ、共生について考えさせるとてもよい機会となった。					
「共生社会」を目指しつつ、探究学習を進めることは、これから生きる生徒にとって必須の活動であった。GIの多忙さは否定できないが、全員での調査、全員でのフィールドワーク、全員での発表、全員が行う報告書作成だったからこそ、皆が取り組めた活動だった。負担を減らすことが伸ばせる力の減少につながることは避けたいが、必死に取り組んだからこそその成果だったことは否めない。無理なく、かつ効率的と思える取り組みがあるのか、相談・研究したい。成長には負荷が不可欠、と考えるからである。					
G Iの取り組みは教育改革で求められていることを先取りした他校には簡単に真似できない素晴らしいものだと実感しています。同時に、生徒にかかる負荷に目をつぶって強引に進めざるをえないこともあり、生徒だけでなく教員にとってもオーバーワークになっていたとも感じています。また、外部との連携はリスクと紙一重とも感じています。今後もG Iのエッセンスは是非とも残すべきと思いますが、ボリュームは減らすべきだと強く思います。そのためにはある程度自由度を犠牲にする必要があると思います。例えば、●教員体制は1人1学年とし、教員の人数に合わせてその学年のグループ数を制限する。●高1はS D G sの1～17について分担して調べ学習をし、プレゼンテーションを行う。●高2から高3前期までで、自分の興味のあるS D G sテーマに着目した課題発見からアクションプランの企画・実施までをおこなう。●アクションプランについては外部との連携を推奨しつつも絶対条件とはせず、教員が十分任せられると判断した場合に限り、それ以外はポスター作成や手作り品の販売などでも可とする。 といった感じでいかがでしょう。					
はじめは面倒くさいと文句を言い、あまり意欲的には見えなかった生徒達も取り組みが始まると、熱心に動き始めていた。全ては自発的ではないかもしれないが、彼女達には適した取り組みであったと思う。					
中高一貫校での取り組みとして、高校の取り組みを見据えた中学でのプログラム作成が望まれる。					
にとって、やや負担感はあるものの生徒にとっては大きな学びとなり、自分の考えを外部に発信していく力はS G Hになる前に比べて格段に伸びたと思う。教員も生徒を導くと言うだけでなく、生徒が取り組んでみたらよいと思われるものを自らも探し、体験し、提案するなど新たな関わり方をするように成ったと考えています。中心になってくれた先生方に感謝しています。					
教員の指導法の工夫改善に大きく貢献する取組であった。					
情報を収集する際、ピンポイントで検索できるメディアを利用することが多くなってきているように感じています。情報の集め方、文章の					

グローバルイシューズの取組

高1 フィールドワークと連動した探究学習（人との共生）

I. 目的・ねらい

- 1) 生徒が主体的に国際社会及び国内の課題を捉え、それに対しどのように向き合っていくべきかを考察し、実行可能な解決策を打ち出せるようにする。
- 2) 大学等の専門機関や企業等と連携することで、自らの課題設定の妥当性や改善点を知り、より現実的な課題解決能力を身につけられるよう努める。
- 3) 自分の考え・主張を正しく、効果的に他者に伝える能力を向上させ、国際社会で活躍するグローバルリーダーの育成に取り組む。

II. 前年度からの変更点

- 1) タイ体験学習が隔年実施のため、フィールドワーク先を国内3箇所とした。
- 2) レジューメは手書き、PC入力から選択できるようにした。
- 3) 研修後の各フィールドワークでの分かち合いや意見交換、報告会の準備・リハーサル等を出るだけ授業時間内に設けるよう工夫した。

III. 実施内容

1) 上級生からの引き継ぎ

高校生として初めてとなるGI（グローバルイシューズ）の授業に関して、高校2年生（代表生徒7名）からガイダンスを受けた。内容は以下の通り。

- ①図書館や情報センターを利用したのりサーチ作業、レジューメ作成について
- ②現地フィールドワークについて
- ③パワーポイントによるプレゼンテーション準備、発表と「探究報告書」の作成について
- ④後期実施の日本語ポリシーディベートについて
- ⑤課題研究ミーティングへの参加と意見文について
- ⑥NY国連研修について

2) 各研究テーマで共通した取り組み

A) 課題設定と調査・研究

高校1年生には「人との共生」をメインテーマ、「多文化共生のための地域作りに必要なこと」をサブテーマにした研修を3つ設定した。初めのガイダンスで年間のスケジュール、高校2年生からの引き継ぎを受けた生徒たちは、自らの興味・関心に問いかけながら自主的にフィールドワーク先を選択した。5月からは、フィールドワークごとの作業となり、生徒一人ひとりに担当教員が付き、テーマの妥当性や進捗状況を随時確認した。

テーマ決定後は、各自リサーチを行った。リサーチとは、設定したテーマに対する調査・研究のことで、主に学校図書館、情報センターを活用し行われた。

リサーチにあたっては、調査メモを利用した。調査メモを活用し整理することによって、情報量の確認や管理、取捨選択などが簡潔に行われることを狙った。その結果、情報の管理がしやすくなり、情報をまとめる際に再度調べ直す時間が縮小される。更に使い方に慣れると、全ての情報を書き写すのではなく、重要なポイントのみを抜き出すことが可能となり、情報を読み取る能力が向上したようである。

B) レジューメと探究報告書の作成

5月からの個人又はグループでの取り組みを最終的に報告書にまとめるべく作業を進めた。調査メモ、参考資料リスト、7月学校祭でのリサーチ発表レジューメ、質問リスト、研修の振り返りシート等すべてを活用しての総まとめとなった。

探究内容、各自で見出した課題とその理由、課題解決策、下級生への引き継ぎ事項等、いず

れも高校生として初めて取り組んだ探究課題に一人ひとりが熱心に向き合うこととなった。8月末に提出された報告書は各メンターが目を通し、いくつかの指摘を通して完成に導いた。

C) ディスカッション

すべてのフィールドワークが終了した後に、各グループでディスカッションを行った。まずは「どのような人」との共生を意識していたかをふまえ、研修の目的を再確認した。次にフィールドワークの収穫として得たこと、GI(グローバルイシューズ)を通してわかったこととこれからの自分たちの課題を出し合い、9月の学年報告会に備えた。

学年での報告会では、限られた時間ではあったが、各グループの分かち合いを共有し、自分のグループとの共通点・相違点を見つけることができた。更に10月の研究発表会に向けては、他グループからの指摘を受け、より相手に伝わるプレゼンテーションをするべく改善を重ねた。

D) 研究発表会

10月5日のSGH研究報告会では、高校1年生として前期に行ったフィールドワークと連動した探究型学習の報告を行った。司会の2人が4月からの取り組みを日本語と英語で紹介し、続いて各グループからの報告を行った。

ニセコ研修は他地域からの移住者や外国人との共生を、美瑛研修は農家と観光客との共生を、東京研修は移民・難民との共生を柱とし、問題意識を明確にした調べ学習を進めてきたことと、そこから得た発見や新たな課題を紹介した。

限られた時間の中で研修の目的、スケジュール、課題、提言を紹介することは初めての生徒たちにとって易しいことではなかったが、グループを超えての協力的な姿勢によりやり遂げた。昨年からの反省を踏まえ、分かち合いやリハーサルなどの時間をできるだけ授業時間に組み入れるよう改善したことは大変有効であった。

IV. フィールドワーク先と取組

1) 北海道ニセコ町研修

A) 研修の目的

身近な地域で成功、実施されている「人との共生」の具体的な方法や問題点などについてニセコ町を通して考える。

B) 事前学習

研修参加10名に対して、研究テーマを右表のように設定し、事前調査を行った。表中の2・3のテーマについては、内容をさらに分けて2名ずつで進めた。

図書室の蔵書やインターネットの情報のほか、事前に取り寄せたパンフレットなどをもとに調査を進め、レジュメ(学校祭展示用)を作成した。作成途中で他のグループ(美瑛、東京)のメンバーによって互いのものを読み合わせ、付箋によるアドバイスをもらい、より良くわかりやすいものに仕上げた。

レジュメ作成と並行して、研修当日にする質問を下記の例のようにまとめ、ニセコ町役場へ送付した。

1	ニセコ町長の目指すもの
2	ニセコ町のまちづくり
3	海外からの移住者との共生
4	国内からの移住者との共生
5	海外からの観光客との共生
6	ニセコエリア内の近隣町村との共生
7	地元高校の取り組み
8	ニセコ町の現状と展望

例	・外国人移住者が増加し続けていることを住民の方々はどの様に受け止めていますか ・ニセコ町の不動産を外国資本や外国人が購入していることをニセコ町はどのようにとらえていますか。
---	---

C) フィールドワーク

①ニセコリゾート観光協会

事前に送付した質問内容に答える形式でニセコ町の観光についてお話しいただいた。「ビュープラザ(道の駅)ができた経緯と役割」、「観光協会とまちづくり」、「ニセコ町の観光が目指すもの」、「ニセコエリア全体としての課題」、「地元住民・移住者・観光客の誰もが住みやす

い社会のために何が必要か」など。

②プラティーボ（昼食）

羊蹄山を一望できるレストランでニセコ産野菜のビュッフェを味わった。

③ニセコ町役場企画環境課

事前を送付した質問内容に答える形式でニセコ町の観光についてお話しいただいた。「外国人移住者との共生についてどのような取り組みをしているか」、「共生においてニセコ町のかかえる課題は何か」など。

④ニセコ町国際交流員

中国、アメリカ、アイルランド、ドイツ出身の4名の国際交流員の方にお話を伺った。ニセコで暮らす外国人として不自由なことや困っていること、また、国際交流員としてどのような活動をしているかを具体的に話してくださった。

⑤ニセコビュープラザ見学

リゾート観光協会の方に詳しい説明を聞いた後、実際に訪れ、観光客で賑わう様子を見学した。

⑥ニセコワイナリー、ほんま文庫

ニセコ町唯一のワイナリーであるニセコワイナリーを見学し、オーナーの本間泰典氏よりニセコでワイナリーを営む理由、ニセコ高校との連携、ワイン造りを通してのまちづくりについてお話を伺った。羊蹄山の麓に広がるワイナリーの美しい姿に生徒たちは心を打たれていた。また、オーナーの奥様である絵本作家の本間眞由美氏のお話を伺い、ワイナリー敷地内のほんま文庫を見学した。絵本創作に至るまでの歴史やニセコ町で長年に渡り、多言語読み聞かせを行われている理由についてお話を伺った。

ニセコリゾート観光協会、ニセコ町役場、ニセコワイナリーでそれぞれお話を伺ったが、どの場所でも、「共生」というキーワードがお話の中で何度も使われており、ニセコでは「共生」を常に意識して生活されているということを生徒たちが実感することができた。またニセコという大自然の中の町での研修であることから、「人との共生」とともに「自然との共生」について考える機会も多く、この二つのつながりの深さについても感じる機会となった。



ニセコリゾート観光協会にて



レストラン プラティーボにて



国際交流員の方々と



ニセコワイナリーの見学

D) 課題や改善点

フィールドワーク日程が札幌からの日帰りのため、4カ所で話を伺うことは時間的にかなり厳しかった。質問内容を厳選してそれぞれの話の時間を短くするか、または話を聞く場所を減らす必要がある。話の時間に比べて見学の時間が短く、ニセコに行かないとできない体験が少ないので、今後は話の時間を減らして見学の時間を増やすとよいと考える。

2) 北海道美瑛町研修

A) 研修の目的

身近な地域で成功、実施されている「人との共生」の具体的な方法や問題点などについて美瑛町を通して考える。

B) 事前学習

研修参加9名に対して研究テーマを右のように設定し、事前調査を行った。1～3のテーマについては、内容をさらに分けて2名ずつで進めた。

1	「日本で最も美しい村」連合
2	美瑛町の観光に関する課題 ～哲学の木から考える～
3	美瑛町の観光業への転換
4	美瑛町の農業
5	美瑛町の隣町、富良野
6	美瑛町の観光業からの発展

図書室の本や情報センターの蔵書のほか、事前に取り寄せた

パンフレットなどをもとに調査を進め、レジュメ（学校祭展示用）を作成した。作成途中で他のグループ（ニセコ、東京）のメンバーによって互いのものを読み合わせ、付箋によるアドバイスをもらい、より良くわかりやすいものに仕上げた。

研修実施が6月29日とほかのグループより早いため、レジュメ作成と並行して、研修当日に聞きたい質問を9つにまとめ、美瑛観光協会へ送付した。

- 例）
- ・観光客を増やすための工夫・政策で、最も効果が上がったのはどのようなものですか。
 - ・ビエティフル等のブランド化により、変化したことがありますか。

研修が近づくに従って事前研修に対する取り組みへの意欲が増し、各自特に何を見て聞きたいか考え、最終的には良い事前学習・準備ができたと思えている。

C) フィールドワーク

①拓真館

美瑛町観光協会の庄司篤史氏に合流した。ここから午後まで、現地案内をしてくださった。拓真館は昭和の写真家で美瑛の名を世に広めた前田真三氏の写真ギャラリーである。写真を通して美瑛の四季折々の美しさを表現し、観た人の心をつかんだことによって、美瑛が全国に知られるようになった。生徒たちは短い時間であったが美瑛全体の自然を感じ、その美しさに感動していた。

②青い池

年中自然の織りなす色の神秘をみることのできる今一番人気スポットの青い池。その成り立ちを庄司氏から伺い、学んできた理科の知識と懸命に結びつけていた。天気によって青色の濃淡が違って見えたりする不思議な場所であった。やはりアジア（中国・タイなど）からの観光客が多く訪れていた。

③十勝岳防災シェルター

青い池から十勝岳望岳台に向かい、望岳台駐車場の敷地に2016年に建てられた。庄司氏から、ここは突発的な噴火による噴石から身を守る緊急避難施設（避難シェルター）で、非常用備品・食料品の備蓄のほか非常用発電機があり、一時避難施設としての機能を持っていることなどの説明を受けた。残念ながら雲に覆われ十勝岳の全景は見られなかったが、噴火など自然災害に対する備えとして大事な施設であることがわかった。

④美瑛カレーうどん（昼食）

昼食には地産地消のものを食べようと、美瑛駅が見えるレストランKOERUでご当地カレーうどんをいただいた。つけ麺タイプで、地元産小麦でつくるうどんに地元産豚肉と野菜をふんだんに使いとても美味しかった。セットのびえい牛乳も含め、皆大満足であった。

⑤美瑛観光協会（質疑応答）

駅前の四季の情報館の中にある観光協会。その会議室で庄司氏に美瑛についてお話をいただき、事前に伝えていた質問について答えをいただいた。その後実際に美瑛を観光中で考えたことや疑問を出発時間ぎりぎりまで正味2時間聞いていただいた。観光客の靴についている雑菌や他の種子が畑の土に入ると作物を全滅させてしまいかねない事など、丁寧に教えてくださった。さらに事前学習の内容に即した質問が皆から次々と出て、あっという間の2時間だった。庄司氏からは最後に、高校生の眼で見て感じたこと、美瑛へのアドバイスをぜひ今後も教えてほしいと言われた。

⑥美瑛選果（直売所）

J A びえいが運営する農作物の直売所。美瑛研修の最後に当たり少しの時間買い物をし、自然が作り出す実りを購入した。



拓真館



青い池



防災シェルター



美瑛カレーうどん



観光協会で質疑応答



集合写真

事前学習で自分が調べたことに対して実際はどうか。一人一人の研修に臨む姿勢は予想以上に真剣であり、見学場所での観光協会の庄司氏の説明を良く聞いていた。

午後の質疑応答では、町についての説明、こちらからの事前質問に対する回答のあと、実際に見て新たに出てきた疑問をぶつけ、答えを得ていた。それぞれの事前学習テーマと見学した内容によっては、当日直接答えが聞けるかどうかには差が出てくるのは仕方が無いが、それぞれに受け止めよく取り組んでいた。ほぼ全日程を一緒に周りながら説明し、答えて下さった美瑛町観光協会の庄司氏に心から感謝したい。最後に立ち寄った美瑛選果で買い物をしたことで、わずかながら地元に戻り、思い出を形にして持ち帰ることができた。

D) 課題や改善点

事前学習については、前年度から続くテーマを9名（昨年6名）に割り当てて行った。昨年度は8月末に実施したが、観光客の増えるオンシーズン前に早めることも可能とのことで6月末に変更した。車の量がさほど多くなく、移動はほぼ予定通りに進んだが、まだ丘の農作物が実る前で美瑛らしい丘の色を味わうことができなかったのは残念でもあった。

時程については、朝7時に学校を出発し、旭川ICから美瑛に向けて南下し、片道3時間かけての到着であった。現地の滞在時間は5時間半で、学校帰着は18時半。日帰りという限られた時間の中では、内容が盛りだくさんで、観光協会の方に質疑応答をする時間も2時間フルに使っている。事前学習に即した内容をできるだけ盛り込み、現地の方にも直接質問ができている現在の内容は、これ以上増やしたくとも削減は出来ないと考える。

3) 東京研修

A) 研修の目的

「人との共生」を柱として、難民や移民、貧困に苦しむ人々をテーマとして事前学習を行う。実際に入国受け入れに関する事業を行う国の機関や、難民のサポート・発展途上国の貧困に苦しむ子どもたちの援助支援を行っているNPO団体を通して、現状を的確につかみ、課題解決のための行動のヒントを得る。

B) 事前学習

研修参加希望者10名に対して研究テーマを右表のように設定し、事前調査を行った。難民はどのような人々を指すのかという法律や条約をもとにした定義から、世界の状況の把握、日本を軸とした支援のかたちなどを中心に調査を行った。ニュースや新聞、雑誌などを利用し、必

1	難民・移民の定義、日本の外国人人口
2	在留資格、入国手続き
3	世界の難民の状況（ロヒンギヤ、シリア）
4	日本の難民保護の仕組みと他国との比較
5	難民申請中の人や難民認定された人の生活支援
6	国境を超えた支援のかたち
7	日本に移住した人々（オールドカマー、ニューカマー）
8	外国人労働者、技能実習制度

要な情報を抜粋し、まとめるトレーニングを行う中で、情報の収集のための媒体を何に依るかということについて選ぶ必要があることを認識させるように意識した。また、情報には意図的に、またはそうでなくても偏りや軽重があり、それを把握したうえで上手に使い分けていくこと、また多方面からの情報収集の重要性を学ぶというメディアリテラシーの涵養を意識して活動をするよう促した。

主体的にフィールドワークで活動できるように、調査をふまえて現地で聞いてみたい質問事項を整理して、持参することとした。

C) フィールドワーク

①チャイルド・ファンド・ジャパン

1990年代から交流がある団体で、フィリピンの貧困家庭の子どもを1人、高校卒業までの支援を行っている。組織の活動説明のほかに、支援している子どもの映像を見せていただくことができ、全校生徒の集会の際に、その映像を放映することとした。

②難民支援協会

日本国内で難民申請中の人々や、申請を目的として来日した人々を中心に、衣食住、教育等

の支援を行っている。ちょうど新しい場所に移転したばかりで、外国の方が相談するブースや、支給する食料品や衣料品のストックなどを見学した。ちょうどアフリカから来日したばかりの親子もあり、食事をしているところに居合わせた。5部屋ある相談ブースはプライバシーに配慮されたつくりとなっており、困って来室する方々のことの気持ちになった作りであることに生徒たちは感心したようであった。

③難民を助ける会

1970年代に問題となったインドシナ難民の救済を目的に設立され、現在は難民だけではなく、海外にも拠点を置いて、災害や貧困などで苦しむ人々のサポートを行っている。ゲームを交え、自分が難民キャンプにいる人であったらという想定をしながら、人々の置かれている状況や、難民には一人ひとり違う背景と家族がいるのだという当たり前のことを改めて認識することができた。

④東京入国管理局

在住資格を得ている外国人の管理や、難民の受け入れに関する手続きや審査を行っている。難民条約に則って行われている審査の現状や、受入数に関するお話を伺い、民間支援団体と国の機関の立場や見解の相違についての理解を深めた。

2泊3日の行程うちの前半2日は、NPO団体3つを訪問し、民間レベルで支援活動を行っている人々と接する。2日目の午後には中間点でのまとめのディスカッションを行っているが、その際に必ずと言っていいほど論点となるのが「なぜ日本は難民受け入れが進まないのか」という点である。このフィールドワークの最終日に、国の機関である東京入国管理局の訪問を設定している理由はそこにある。ディスカッションでは、学年による差は多少あるが、おおむね国の政策に対する批判めいた意見が大半を占め、もっと多くの難民申請者を受け入れ、入国させるべきなのではないかと考える生徒が多い。しかし、入国管理局を訪問し、どのようなことが管理局内で行われているのかという事実を知ると、ただの数字だけの問題ではない、考えなくてはならないことが多く存在することを知る。いろいろな立場の方々から意見を聞き、多角的に物事をとらえるということの大切さを身をもって経験することになる。



チャイルド・ファンド・ジャパン



難民支援協会



東京入国管理局



寄付された洋服（難民支援協会）

D) 課題や改善点

前述したように、フィールドワークの前半ではある意味偏った意見にまとまりがちだが、相対するような意見を聞き、知ることによってニュートラルな意見にまで引き戻されていくのがこの研修の特徴であると思う。

「難民」というキーワードを柱に、多種多様な立場や意見があり、また解決のためにもこれもまた多種多様な行動の仕方があるのだということに気づくのが大切である。

しかし、その学年の理解の深度と、

ディスカッションの時間の長さや方向性によっては、ニュートラルに戻り切れない部分が見られる。特に2018年度については、その特徴が顕著であり、一番強く印象に残った団体の話がいつまでも残り、わかりやすい立場や共感しやすい意見に引き寄せられてしまう傾向が強かった。よって、今後もこのような形でフィールドワークやディスカッションを行う場合には、ファシリテーターによる誘導を、生徒の特徴に合わせて弾力的に行う必要を感じる。



難民を助ける会でのワークショップ

V. 評価・検証

生徒および指導教員によるルーブリック評価（別添資料）を実施。比較検証した。

1) テーマ設定とリサーチについて（1点～4点）

	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
情報検索	3.21【80%】	3.07【77%】
情報の取捨選択	3.07【77%】	2.96【74%】
情報の読解	3.18【79%】	2.81【70%】
調査メモの扱い	3.07【77%】	3.30【82%】
多言語活用*	—【- %】	—【- %】

いずれの項目においても生徒自己評価に比べ教員評価が低い傾向にあるが、特に「情報の取捨選択」「情報の読解」には課題が多いと判断する。内部進学生は中学で卒業研究を手がけているとはいえ、GI（グローバルイシューズ）での調査・研究学習の基本である情報の扱い、メディアリテラシーについては、まだ十分に慣れていないようだ。

なお、「多言語活用」に関しては利用した生徒が少数のため、分析には含めないこととした。

2) 発表（1点～3点または4点）

	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
調査メモの利用	3.41【85%】	3.26【81%】
レジュメの内容	3.37【84%】	3.15【79%】
レジュメの構成	3.41【85%】	3.44【86%】
口頭発表のまとめ	3.72【91%】	2.48【83%】
聞き取る姿勢	3.37【84%】	3.07【77%】

昨年の高校1年生においてはレジュメの作成を全員手書きとしたが、今年度はPC入力も選択可とした。思いの外、手書きの生徒が多かったが、レイアウトの工夫や構成に関しては教員の評価も高い。ICTスキルの向上は今後も課題である。ただ、口頭発表となると調査メモ、レジュメに書かれた範囲内での報告にとどまる者が多い点が残念であった。

3) フィールドワークに関して (1点～4点)

	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
聴取	3.70【93%】	3.31【83%】
聞き取る姿勢	3.74【94%】	3.35【84%】

聴取、聞き取る姿勢ともに生徒自己評価がとても高い。事前の準備と当日の疑問解消、情報収集の点でフィールドワーク全般に対する満足度が高かったことによるものと思われる。教員評価も他の項目に比べ高く、1年生なりの努力が表れた評価となった。

4) 探究報告書の作成に関して (1点～3点または4点)

	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
報告書の内容①	3.19【80%】	2.63【66%】
報告書の内容②	2.59【86%】	2.12【71%】

レジュメと同じく個人での作業に関する評価である。特に探究報告書はほぼ夏休み中の作業となるため、自分の持っている情報とまとめる力を頼りにする以外にない。当然のことながら評価には大きな開きがあり、教員評価はおしなべて厳しいものとなった。

生徒たちの自己評価は総合すると高いものである。GI(グローバルイシューズ)としての取り組みは初めてながら、上級生からの引き継ぎを経て必死に取り組んできた、その努力と達成感が自己評価には表れている。教員評価はある程度厳しいものの、研究報告会に向けての協力の姿勢など、思いがけずうれしい評価をつけられる場面もあり、これからの伸びしろに期待も大きい。

エネルギーのある学年だけに荒削りな食欲さを修正しながら、持続可能な共生社会を生きるための力を身につけられるよう導きたい。

VI. SGH自己評価・アンケート結果より

1年生では12月に自己評価・アンケート(以下、自己評価)を実施した。質問項目は2年生や3年生と同一であるが、一部の質問項目については、1年生では回答できないものもあり、それについては省略した。また、2年生と3年生は4月にも同様の自己評価を行い、達成度の変化の状況等の比較を行っているが、1年生については4月の時点ではまだグローバルイシューズに取り組み始めたばかりであり、自己評価ができるほど活動が進んでいないこともあり、12月のみの実施となった。なお、評価基準は右表に示すとおり、4段階評価とした。

評価基準	評価4:よくあてはまる
	評価3:どちらかというにあてはまる
	評価2:あまりあてはまらない
	評価1:全くあてはまらない

評価項目を4つのカテゴリに分け、評価平均値が3.5前後であれば、おおむねSGHの取組により目標を達成している、または今後、取組を進めていく中で十分に目標を達成しうると考えた。ここでは、評価平均値が3.0を下回った評価項目を中心に考察したい。

「国際理解・異文化理解・自国理解」のカテゴリでは、次の2項目については気になる結果となっている。

評価項目5:外国で起きたいくつかの歴史的イベントについて関心を持つようになった

評価項目8:世界の主な宗教の特色に関心を持つようになった

「人との共生」に関わる課題の多くに、気付いていないわけではないが世界における出来事や宗教に特色に対する理解の乏しさ、それに対する自己評価の低さが影響していると推察される。調査・研究を進めていく中で、メンターによる日頃からの適切なsuggestionを行うことで十分に改善できると見込まれる。

「国際貢献」のカテゴリでは、次の3項目について考察してみることとする。

評価項目21：自らがリーダーとなり、周りの人々にも協力を求め、共に貢献活動を行って
いきたい

評価項目29：将来、国際的な仕事で活躍したい

評価項目30：将来、グローバル社会に関する会議やシンポジウムに参加したい

これらの評価項目について低い評価をつけた生徒に聞き取り調査をしてみると、いずれも意欲が低いわけではないことがわかった。例えば、評価項目21については、貢献活動そのものには自分も携わってみたいが、「リーダーとして」ということに尻込みしている。また、評価項目29については、「国際的な仕事」を「海外に出て」というように解釈しており、それに抵抗を感じている。これは評価項目30にも共通している。「海外に出て」というイメージから、英語（外国語）を駆使しなくてはならず、そこまでの能力が身につくかどうか不安を感じているようで、それは「外国語の活用」カテゴリの次の評価項目の平均値が低いこととも連動している。

評価項目39：自分の言いたいことを英語（外国語）で表現できる

評価項目40：日常生活において外国人と接するうえで、不自由のない程度にコミュニケーションがとれる英語（外国語）による会話力が身についている

英語（外国語）の活用能力を高めようとする意欲は、評価項目35の評価平均値から判断して決して低いものではない。今後、特に英語科とも連携し、その対応策を実行していくことで改善を図っていきたい。

「SGHの取組について」カテゴリについて見てみると、このカテゴリでは評価平均値が3.5を超えていない評価項目が多数見られるのが特徴といえる。特に次の評価項目については、前述した評価項目5や8の評価平均値が低いこととも連動している。

評価項目51：生じているさまざまな社会問題について、知識や経験を活かして説明することができる

この他に、このカテゴリの評価項目の中で、情報の取捨選択や課題設定、プレゼンテーションなど、これまであまり取り組んだ経験がないことに対して評価平均値が低い傾向が見られる。これらについては、経験を積み重ねることにより要領を得てその能力を身につけていくことは3年生の自己評価の結果からも明かであり、さほど心配する必要はないものと考えている。

この自己評価では、最後に「SGHの取組が貴方にもたらしたもの」について自由記述を求めているが、その各々のコメントを見てみると、SGHの取組そのものに対しては概ね肯定的に捉えられており、なおかつ自分自身の課題をきちんと捉えている姿が浮かんでくる。SGHの指定が終了後も、本校では引き続きグローバルイシューズを学校設定科目として継続して開設することが決定している。1年後に、各々の生徒が確かな自己の変化を実感できるようになることを次の目標としたい。

高1 論証重視型日本語ディベート

I. 目的・ねらい

ポリシーディベート（論証重視型・準備型ディベート）を通して、プレゼンテーション能力（論理的にわかりやすく話す力）と課題分析能力（要点を整理しながら聞く力）を育成する。具体的には、理論や根拠に基づき自分の意見や考えを主張でき、また相手の考えや意見に耳を傾け自己のそれとの相違点を意識しつつ、改めて自分の意見を論理的に構築できる力を養うことを目的とする。以下は生徒に示している具体的目標である。

- ①日本語ポリシーディベートについての理解を深める。
- ②実施に向けて資料収集・調査、相談・検討をメンバーと協力して行う。
- ③実践と観戦、判定を通して自己の取り組みを客観的に振り返る。
- ④評価・反省を通して、次回への課題を見つける。

II. 前年度からの変更点

- 1) ディベートの総合時数が半減したため、導入、準備、実践の時間を大幅に削減した。
- 2) 限られた時間の中で実践の機会を重視するべくテーマは二つに厳選した。かつ、肯定・否定の両方を担当することで広い視野と柔軟な思考を養えるよう工夫した。
- 3) 変化・成長を意識できるよう、1回目、2回目終了後の2回、ループリック評価を行い、さらにアンケート評価で具体的な成果を計れるようにした。

III. 実施内容

1) オリエンテーション

まずは、オリエンテーションを前期末の国語総合（現代文）の時間に実施し、論証型ディベートの概略とあり方をプリントと大学生によるディベート実践の映像を通して理解した。その後の活動内容は以下の通りである。

1回目は事前に選出したメンバーによるシナリオディベート体験をした。役割を担当する生徒はもちろんのこと、聞いている生徒にとっても、ディベートの始めから終わりまでの流れや展開、発言の仕方、審判までのイメージを持つことが出来、大変有効であった。

A～Dのグループはクラスや発言のバランスを考えて教員が決めた。4～5人からなるグループを発表した後、くじ引きでテーマを決定した。グループを牽引するリーダーは生徒たち自身で決めている。テーマは「人との共生」を柱に教員が決めた。図書館の蔵書を含めディベートに十分な情報が得られるか、を中心に、肯定・否定ともに議論が尽くせるようなテーマを熟考した。このテーマ決めは、ディベートを始めるに当たっては教員側で最も時間を要する重要な作業である。今年度のテーマを以下に挙げる。

テーマ1 「難民条約の日本の定義を変更すべきである。是か、否か。」

テーマ2 「日本における外国人介護福祉士の資格要件を緩和すべきである。是か、非か。」

2018年度の日本語ポリシーディベートの担当教員は図書館司書を含めて7名である。4つのグループを1テーマ3人ずつが担当するよう割り振った。

2回目の授業からはいよいよ情報収集の開始である。前期の探究型学習で活用した調査メモを使いながらまずは情報を集める。書籍、新聞の切り抜きを始め、情報センターでのPC利用またはipadの利用も可とし、効率的に作業を進めていた。配付したのは立論シート、質疑シート、反駁シートで、一人ひとりが収集したものを次はグループ内で検討していく。

立論構成を含めた作戦会議は4回目の授業時間まで続けられた。その間、担当教員とシートの提出・返却のやりとりが繰り返され、実践の前には各グループがディベート原稿を完成させた。テーマによる不公平をなくすべく提出期日はすべて同じとした。



図書館のディベートコーナー



指導教諭との顔合わせ



図書館での作戦会議



熱のこもった意見交換

2) 実践

5回目の授業からいよいよ実践が始まった。初めのテーマは「難民条約の日本の定義を変更すべきである。是か、否か。」本校では中学からの内部進学者は中学3年の国語の授業で日本語即興型ディベートを経験している。高校からの入学生も何かしらのディベートを体験している生徒が半数であった。初めてのポリシーディベート（論証型・準備型ディベート）は5人ずつのグループによる対戦となった。

今回ディベートに参加している生徒は10月時点で19名で、その他の生徒9名はニューヨーク国連研修参加のため事前学習を行っている。出来るだけバランスよくグループ分けをしたつもりではあったが、実際にふたを開けてみるとリーダーシップ、協調性、責任感など様々な点で差が出てくる。初戦は5対0の大差で肯定派の勝利となった。

6回目の授業はテーマを変えて「日本における外国人介護福祉士の資格要件を緩和すべきである。是か否か。」のディベートを行った。一度観戦しているメリットがあるとはいえ、実施する生徒の意欲的な発言が際立ち、かなり白熱した論戦は観戦者、審判団ともに目の離せない展開であった。

今年度は昨年よりもディベート担当の生徒数が減ったために4チームと減少した。よって、審判は下記のように分担し、すべての生徒が実践、審判を体験出来るように配慮した。同時に司会、審判長、タイムキーパーの担当を任意で決め、運営を任せた。

実践1 A対B、C審判・D観戦
C対D、A審判、B観戦

実践2 C対D、B審判、A観戦
A対B、D審判、C観戦

実践1の2回目は最終的には2対3で否定側の勝利となったが、スコアの通りどちらが勝ってもおかしくない接戦であった。

審判団にはフローシートを配付し、まずは自分自身の評価を決めた上で、検討会議に臨んでもらうこととしている。どうしても他者の意見が気になり、個人の評価が出来なくなってしまうためだ。実践1の初回ではその反省が強く確認された。

また審判長には、限られた時間の中で総合評価をまとめることとそれぞれのグループに対するコメントが求められる。勝者・敗者いずれに対しても優れていた点、改善すべき点をあげねざらうことは高校1年生にとっては容易なことではないが、それぞれの審判長は自覚を持って発言すべく努力していた。

第1回目の実践の後は最初のルーブリック評価を生徒、教員ともに行った。その上で、冬休みを挟み、第2回目の実践に備える。クリスマスコンサートという大きな行事と長期休暇を経ての準備となるが、両者同じ条件での作業である。担当教員は前半戦と変わらずに肯定側担当者は引き続き肯定を、否定側指導者は引き続き否定を担当し、公平を期した。

冬休みが明けて最初の授業での実戦開始はこれまでにない強行軍であり、12月休業前の立論シート提出、1月始まってすぐの質疑・反駁・総括シート提出を経て当日を迎えた。第2回目の実践は前回と順番を変え、「日本における外国人介護福祉士の資格要件を緩和すべきである。是か、非か。」から行った。資料調査はすでに十分終え、相手のついてくるところも予想できているはずの展開だが、それだけにやや緊張感に欠けるきらいもあった。何より授業時間が全く確保できず、宿題と指導教諭とのやりとりのみの準備である。GIの授業以外にも総合学習意見文、教科の課題、追試などに追われる生徒たちにとってはおよそ現実的ではないスケジュールであったことは大きな反省点である。その結果、各チームのリーダーに過重な負担がかかることになり、最後までその傾向はぬぐえなかった。それでも各担当の責任感と少なからず養った自信により、いずれも実力が伯仲した試合となった。「介護福祉士」の実践は3対2で否定側が、最後の「難民条約の日本の定義を変更すべきである。是か、否か。」は同じく3対2で否定側の勝利であった。二度の実践を経た後は再度ルーブリック評価を行い、各自の改善点を確認した。



立論の様子



作戦タイム



質疑



審判団の判断



審判長より講評



終了後の握手

IV. 評価・検証

日本語ポリシーディベートの評価はルーブリック（別添資料）による生徒個人評価、指導教員からの評価をそれぞれ2度にわたって行った。

また、それとは別に文章表記によるアンケート評価（別添資料）を行った。その結果を以下に示す。

1) リサーチに関して 12点満点（0点～4点）

1回目終了後	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
情報検索	2.94【74%】	2.00【50%】
情報の取捨選択	2.89【72%】	2.28【57%】
立論作成	2.78【69%】	2.59【65%】

2回目終了後	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
情報検索	2.78【69%】	2.00【50%】
情報の取捨選択	2.83【71%】	2.06【51%】
立論作成	2.41【60%】	1.17【29%】

いずれの項目においても生徒自己評価に比べ教員評価が低い傾向にあるが、特に2回目終了後の評価でその差が際立った。さすがに生徒たち自身も1回目比べて2回目はリサーチにおいては取組が不十分だったことを自覚しているようだ。それでも2度目の準備、実践でやることが分かっており、心理的に余裕を持って取り組めたと感じた生徒たちと、誠実な準備と協力的姿勢の点で大きな課題を感じた教員との差が出たようである。多くの資料が図書館に用意されているにもかかわらずそれを手にしなかったり、タイムリーなニュースに気づかなかったりしたことは残念であり反省事項である。

2) ディベートに関して（グループとして） 30点満点（0点～3点、4点、5点）

1回目終了後	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
声の大きさ	2.44【81%】	2.00【67%】
立論	3.64【73%】	3.29【66%】
聴く姿勢	2.47【82%】	2.06【69%】
質問	2.88【72%】	2.88【72%】
反駁	2.88【58%】	3.86【77%】
総括	2.75【55%】	3.43【69%】
全体として	3.50【70%】	2.83【57%】

2回目終了後	生徒の自己評価の平均	指導教員による評価の平均
声の大きさ	2.56【85%】	2.11【70%】
立論	4.06【81%】	3.43【69%】
聴く姿勢	2.72【91%】	2.38【79%】
質問	2.83【71%】	3.25【81%】
反駁	3.39【68%】	4.86【97%】
総括	3.22【64%】	3.43【69%】
全体として	3.50【70%】	2.86【57%】

グループとしての評価も、おおよそ教員からの評価の方が低く出ているのはリサーチと変わらないが、「質問」、「反駁」、「総括」においては教員の評価の方が高い。個人の取り組みはともかくとして、リーダーの統率力と意気込みによりチームとしての実践結果が期待以上のものであったことを示している。

さらに2回目のループリック評価と同時にとった記述式アンケートで、日本語ポリシーディベートへの取り組みを通して身についた力について、複数挙げてもらった。

8つの項目のうち最も多かったのはA「書籍・雑誌・新聞記事・ウェブサイトなどの適切な手段で、必要な情報を調べて集める力」で78%の生徒があげており、下記のような理由が挙げられている。

「公的機関の情報を主に使用できるよう取捨選択した。」

「より新しい情報を集めるためニュースを頻繁に確認した。」

「欲しい資料や裏付けが見つからず苦労しているときに、他の資料をあたり自分に必要なものを選ぶことが出来るようになった。」

次に多かったのはC「集めた情報をもとに、立場を明確にしながら、筋道を立てて論を組み立てる力」とF「メモを取りながら相手の話をよく聞き、論の弱点や矛盾点に気づく力」で56%の生徒が選択した。

Cでは「根拠を明確にして論を組み立てることが出来た」、「情報に順位をつけ、効果的な発言を工夫した」や「自分が担当した立論が審判団や他チームから評価された」という声があった。

Fでは「話を聞きながらメモをとり、自分たちにとって有利な点、不利な点を聞き分けるのは難しかったが、数をこなすことで聞き、判断する力が鍛えられた」「相手の主張は質疑や反駁を考えながら聞かねばならず大変だったが、少しでも反論の余地を探しながら聞くことが出来るようになった」などが挙げられた。

I「その他」では、「何が一番言いたいことで、どのように語れば相手に一番よく伝わるか」ということを考えながら論をまとめる力」が挙げられた。これからの高校、大学、社会人としての生活において、必然的に求められる力が身についたと思われる。

このように、後期に取り組んだ日本語ディベートを通して、生徒たちは「人との共生」に向けての現在の課題の一部を知ることが出来た。更には、言葉や知識の上ではわかっているつもりの「難民」の現実や少子高齢化の日本にある介護福祉士不足の問題を自分のこととして考える姿勢が今後も引き続き求められる。

次年度に向けての改善策としては、授業内での最低限の準備時間の確保とテーマに対して日頃から向き合えるよう促すことが挙げられた。

高2 フィールドワークと連動した探究学習（自然との共生）

I. 目的・ねらい

- 1) 1年生で実施した「人との共生」を探究テーマとしたグローバルイシューズ（GI）の取り組みで深めた見識を踏まえ、新たな研究テーマとして「自然との共生」を設定し、探究学習を行うことで共生社会についての視座を高める。
- 2) 担当する探究テーマに関して主体的に探究活動を行い、情報を精査しながら国外も視野に入れた中で課題を見出し、その課題とどのように向き合っていくべきかを考察し、実行可能な解決策を考えていくことで、グローバルな視野を持った思考力・判断力を養う。同時に3年生のGIにおけるアクションプラン（課題解決策）の作成・実行につなげる。
- 3) レジュメや探究報告書、プレゼンテーション資料の作成をグループワークやディスカッションを交えて行うことにより、自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えるための表現力を磨くとともに、他者を理解する寛容性を養う。また、ワープロやパワーポイント、タブレットのアプリケーションなどを積極的に使うことでICTスキルの向上を図る。

上記1)～3)を通して、グローバルな視点で持続可能な共生社会に生きる人間として必要な態度と、リーダーとなり得る能力を育成する。

II. 前年度との変更点、改良点

1) グループ探究テーマについて

タイ体験学習は本校の海外体験学習の1つだが、隔年で実施しており、今年度はその該当年度ではないためGIのグループ探究テーマとしては設定しなかった。

また、毎年日本の聖心の姉妹校合同で行っている勉強会（SOFIS）のテーマが今年度は「気候変動について」であったため、これをグループ探究テーマの1つとして加えた。

さらに、前年度にニューヨーク国連研修に参加した生徒は、その事後学習を同じ目的で行うこととした。

その他、年度当初は前年度の2年生が設定したタイ以外の4つのグループ探究テーマ「メタンと地球温暖化の関係」、「廃棄物の処理と活用」、「水資源の確保と活用」、「外来生物との共生」を更に深く掘り下げるためにそのまま引き継ぐ予定だったが、希望調査の結果「メタンと地球温暖化の関係」を第一希望とする生徒がいなかった。教員で話し合い、全員第1希望のグループ探究テーマで調査を行うことに重きを置いた結果、今年度は「メタンと地球温暖化の関係」のグループは設定しなかった。

2) 事前・事後アンケートについて

今年度はGIの取組が生徒にどのような変容をもたらすかをより明確にするため、生徒全員を対象として、4月と12月にGoogle Formを利用したアンケートを行った。

III. 実施内容

1) 各研究テーマに共通した取り組み

A) 下級生への引継ぎ

前年度行った方法が効果的であったため、今年度も同じ方法で年度初めに2年生の代表者が1年生全員に対し、GIの取り組みに関するアドバイスをを行った。事前にこうした生徒による引継ぎの機会を設けることは、1年生、2年生双方にとって、GIの取り組みの質を高めるよい機会となっている。

B) オリエンテーション

初回の授業では、以下の内容でオリエンテーションを実施した。

①G I のねらい・目的と年間活動スケジュールの説明

②ループリックの提示

何のために、いつまでに、どうやって、何を達成するかを初回の授業で明確にしておくことにより、取り組み内容の一層の充実を図った。

③各グループ探究テーマの説明・希望調査

例年に倣い、まずグループ探究テーマ（メインテーマ）を決め、その下で個々の個別探究テーマ（サブテーマ）を設定する流れとした。

各グループの担当教員から概要説明を行い、その場で調査用紙を配布し、希望調査を行った。

グループ探究テーマ	1. メタンと地球温暖化の関係 2. 廃棄物（ホタテの貝殻とウロ）の処理と活用 3. 水資源の確保と活用 4. 外来生物との共生 5. 気候変動について（SOFIS） 6. ニューヨーク国連研修事後学習
-----------	--

上記Ⅱ－１）の通り、「メタンと地球温暖化の関係」については第１希望の生徒がいなかったため、実際は２～６のグループに分かれて調査を行った。今年度は、生徒がより積極的に取り組めることを期待し、全員第１希望のグループに配置した。

C) 活動

①リサーチ

リサーチは主に、図書館や情報センターで書籍、ネットを利用して行った。

本校は中学入学時より図書館の活用の仕方を学ぶ機会を多く設けており、必要とする本の探し方や、調査メモを利用して得た情報を活用する方法など、生徒たちはこれまでもリサーチの仕方について様々なことを学んできている。また、ネット情報についても、その特徴や信ぴょう性について学ぶ機会がこれまでも多々あったはずが、リサーチの様子をみていると、やはり十分なメディアリテラシーが備わっているとはいえない。どうしても短時間で容易に手に入るネット情報に頼りがちで、その情報の信頼性、客観性は後回しにされてしまう状況がみられる。

メディアリテラシーの向上を目指すには、担当教員がその都度指摘するだけでは不十分である。ある程度まとまった時間をかけ、まずは情報を取捨選択する必要性について個々の生徒に強く認識させ、その上でどのように取捨選択すべきかを学ばせる必要があると思われる。

②レジュメ・探究報告書の作成

前年度と同様、まずは７月の学校祭で中間報告としてのレジュメ（A3版１枚）を作成し、展示した。レジュメは書式を統一し、テーマ、これまでにリサーチした内容、リサーチ結果に基づく自分の考え・今後の課題、参考図書・URLについて記載させた。フィールドワーク前にグループで情報を共有し、ディスカッションを行う上でも、この段階で調べたことをまとめておくことには意味があった。

また、探究報告書は前年度A4版３～５枚としていたところ、A4版５～７枚で作成させた。図表をうまく活用し調べたことをわかりやすくまとめるには、この分量でちょうどよかったと思われる。探究報告書も書式を統一し、テーマ、探究内容、見出した課題とその理由、課題解決策、下級生への引継ぎ事項、参考図書・URLについて記載させた。

レジュメ・探究報告書の作成にあたっては、特に情報の出所を明記すること、図表は見やすいようレイアウトを工夫すること、データはバックアップを取る、必ず期日に間に合うよう計画的に作業を進めることを求めた。見る人、読む人の目線に立って資料を作成することや、効率的に作業を進めることについても学ぶよい機会となった。

③フィールドワーク・ディスカッション

前年度と同様、フィールドワークに行く前と行った後でディスカッションを行った。

フィールドワークに行く前のディスカッションでは、それまでに個別に調査した内容をグル

ープ全体で共有し、グループ全体としてこのフィールドワークで何を学んでくるか、どこでどのような質問をするかについて意見を出し合った。また、10月のSGH研究発表会で何を発表するかについても考えさせ、そのためにフィールドワークの機会をどのように活用するかについてもある程度話し合ってからフィールドワークに出発した。

フィールドワークの時期については、前年度と同様、外来生物については6月、水資源および廃棄物グループについては7月の夏休み直前に行った。また、SOFISは8月に静岡県不二聖心女子学院にて開催された。ただし、ニューヨーク国連研修事後学習のグループについては、前年度の1月に現地に行っているため、今年度のGIではフィールドワークには行っていない。

フィールドワーク後のディスカッションでは、実際に現地に足を運んで学んだことをグループ全体で共有した。どうしても個々のテーマによって、事前に調査した内容がフィールドワークで学ぶ内容と大きく関係する場合と、それほど関係しない場合とが生じてしまうが、事前のディスカッションで各自が調べた情報やそれぞれの問題意識を共有することにより、フィールドワークでの学びをそれぞれが自分のものとしてとらえられるようになる。実際に各問題に携わる専門家のお話を伺ったり、現場を見学したりすることは、机上で学んだ知識が血肉となり、次の学びにつながる重要な機会となる。その機会が一人ひとりにとって有効なものとなるためには、事前、事後両方のディスカッションが必要不可欠であると今年度も強く感じた。

④SGH研究発表会

10月に行われたSGH研究発表会では、グループごとにこれまで調査した内容をふり振り返り、社会に訴えたいこと、啓蒙したいことを3分間の動画にまとめ、発表した。最近はPCのみならずスマートフォンのアプリでも簡単に動画を編集することができ、動画を作成することは生徒たちにとっては比較的身近なこととなっている。中学や高校1年でパワーポイントによる発表は何度も経験しているので、今回新たな試みとして動画発表を課した。

しかし、実際にやってみると、訴えたいことを動画にまとめることは簡単なことではなかった。動画の編集自体は、予想された通り、生徒たちにとって大して難しいことではないようだったが、訴えたいことをどのように説得力をもって説明するか、その内容を考え、組み立てていくことは決して簡単なことではなかった。いざ動画を作成する段になってから、それぞれのテーマについてもっと時間をかけて詳細に調べ、考えを深める必要性を生徒も教員も感じる事態となったが、そうした時間的な余裕はなく、今回ほとんどのグループは満足のいく動画を作成することはできなかったようである。

しかしながら、今回の経験を通じて動画というメディアの特徴を知り、制作する側の立場からそのメリット・デメリットを理解することができたことは、今後につながる重要な学びであったといえる。

2) 各グループの取り組み

A) 水資源の確保と活用

①課題設定と調査研究

現在日本では、地域、時期を問わず、蛇口を開けばすぐに清潔な水を得ることができる。さらに、ここ北海道では夏に水不足になることもなく、名水と呼ばれるような質の高い水さえ豊富にある。水は日々の生活に欠くことのできない大切な資源だが、

こうした環境で暮らしていると、そのような認識が薄れてしまうほど、私たちは水資源に恵まれている。しかし、一度かつての日本、あるいは、他国へと目を向けてみると、このように清潔な水を十分に使用できることは決してあたり前なことではないことに気が付く。このGIの授業を通じてまずはこのことに気が付き、十分な水が得られない地域ではどんな問題が生じているか、そうした問題を解決するためにどのようなことが行われているか、私たちにできることは何かを考えるきっかけとなることを意図し、この課題を設定した。水資源グループ6名の個別探究テーマは上の表のとおりである。

	個別探究テーマ（サブテーマ）
1	日本の水資源、北海道の水資源の現状
2	日本におけるダム建設の歴史
3	日本における上水道・下水道の歴史
4	世界の水資源問題（水をめぐる紛争について）
5	世界の水資源問題（ダム建設について）
6	水資源問題に関する国際的な取り組み

②フィールドワーク

7月20日（金）に行ったフィールドワークでは、前年度と同様、東川町を訪問させていただいた。東川町は、旭岳の湧き出し水の恩恵にあずかり道内唯一の「上水道のない町」として注目されている日本でも類を見ない水資源に恵まれた町である。ただし、それは単に恩恵にあずかっているだけではなく、自然との共生を上手く図ることのできている結果でもある。アフリカなどの干ばつ地域から東川町の取組を視察に來たり、そうした地域に井戸掘りの技術についてアドバイスしたりすることもあるそうである。北海道がいかに水資源に恵まれた地域であるかを知り、それを持続可能に使用していくためにどのような取組がなされているか、さらに、世界の水資源問題を解決するために私たちに何ができるかを考えることを目的とした私たちの調査、研究に対して、最も適切なフィールドワーク先であると考えた。

まず、最初に訪れた東川町役場では、具体的にどのような取組によって大雪山の雪解け水を活用し、上水道のない町として機能しているかを細かく説明していただいた。生活用水、工業用水によって、土壌が汚染されないために条例が定められていることや、地下水を保全するために定期的に地質・水質調査を行っていること、全国規模の地下水に関する連絡協議会に加盟し、他の地域とも様々な情報を共有していることを学んだ。また、日本のみならず世界各国からの視察を受け入れ、2016年の熊本の地震の際にはペットボトルの水を大量に寄付するなど、他地域とも協力しながら町としてできることを行っているというお話も伺った。



次に訪れた大雪旭岳源水公園では、大量に湧き出る東川の雪解け水を目の当たりにし、実際にその美味しさを味わって、昼食後は忠別ダムを見学した。

忠別ダムは、東川町、東神楽町、美瑛町の3町が接する忠別川に建設した多目的ダムで、洪水調節、流量の調節、かんがい用水の供給、水道水の供給、水力発電をその主な役割としている。上述した通り、東川町には上水道はなく、町民は地下水を使用して生活しているが、万が一地下水が使用できなくなった場合にはこの忠別ダムの

水を使用することになっているそうだ。生徒たちは、ダム建設は自然との共生に不可欠であるとみなされる一方で、自然破壊につながる恐れもあることを学習していたので、自然との共生のためにこのダムではどのような工夫がなされているかを質問した。また、海外のダム決壊事故について調べた生徒は、このダムにはどのような決壊対策がなされているかも質問した。忠別ダムの見学は、自然との共生という課題が単純なものではないことを実感し、多様な角度から考えを深め、最善策を練る必要があることを改めて理解するよい機会となった。



③その他

今回は、6名の生徒が各自の興味のままに個別探究テーマを設定するのではなく、各生徒が得た情報が有機的につながっていけるよう意図してこちらで個別探究テーマを用意し、そこから選ばせる形をとった。

生徒の自由度を狭めることに対して調査が上手くいくかどうか多少不安はあったが、このようにしたことでフィールドワーク前後のディスカッションの意義が増し、6人が全員で協力して水資源の問題について調べているという意識がより高まったようにも感じる。最後の動画制作も6人で協力してスムーズに行うことができた。1人よりも仲間と協力して調査し、知恵を出し合うことのメリットを感じられるような調査のさせ方を今後も工夫していきたい。

B) 廃棄物の処理と活用

①課題設定と調査研究

廃棄物のリサイクルを考えるにあたり、「ホタテ貝殻」の再生活用に着目した。主成分である炭酸カルシウムの特徴を活かしながら黒板の「チョーク」以外にどのような価値を生み出すことができるか、その実績と有効活用の調査・研究を行った。そして、ホタテ貝殻のリサイクルの他にも多様な活用方法について、各種産業や海外の動向にも目を向け、産業廃棄物をいかに削減すべきかという課題解決に向けたアクションプランを構築した。

	個別探究テーマ（サブテーマ）
1	ホタテを食用としている日本以外の国々では、貝殻をどのように再利用しているか
2	海洋資源の利用（世界と日本の実践例）
3	チョーク以外にホタテ貝殻の炭酸カルシウムを有効活用できないか
4	廃棄物の処理と利用
5	チョークの素材として、他種の貝殻で代用ができないのか
6	ホタテ貝の「ウロ」の有効活用を模索する

②フィールドワーク

ホタテ貝殻を原材料としたチョークや関連商品の開発・製造について、同業界で大きなシェアを占める「日本理化学工業（株）美唄工場」を訪れた。廃棄物から新たな価値を見出すチョークの製造過程を視察すること以外に、工場長から企業の歴史と同社の障がい者雇用において「皆働（共生）社会」の理念をもとに効率的な作業の工夫・改善を重視し、成長し続ける企業の取り組みにも共感する機会となった。参加メンバーは活発な質疑を行い、また、廃棄処分の短いチョークを再生する体験作業も行った。工場視察を通して廃棄物についての問題意識と課題解決能力を高めることができた。その後、フィールドワークを経てメンバー各自の振り返り、感想や廃棄物の再生利用等のディスカッションを通して、「探究報告書」を作成し、「研修報告会」では3分間の動画にまとめたプレゼンテーションで共有し、深めることができた。

実施日	2018年7月17日（火） 12:30～14:30	実施場所	日本理化学工業（株） 美唄工場	説明者	工場長 西川 一仁 氏
実施内容	・企業理念と積極的な障がい者雇用についての理解 ・ホタテ貝殻を原材料としたチョーク開発の歴史と成分の化学的知識、再利用価値の説明 ・チョークの製造過程の説明、工場内見学 ・課題提起と質問・意見交換				



C) 外来生物との共生

①課題設定と調査研究

外来生物との共生を考える前提として、どのような問題が起きるか(捕食、競合、交雑、感染)、どのような影響が心配されるか(生物多様性への影響、農林業・漁業、人間の健康への影響)が、グループとして網羅されるように配慮し、調査テーマを設定した。また、調査・研究する上で次のA～Fの取組が含まれるよう指導した。

調査テーマの分類	
A	外来生物法の施行状況に関する取組
B	導入阻止に関する取組
C	非意図的導入に関する取組(パラスト水・雑草等を含む)
D	国内外来種に関する取組
E	定着した外来種の防除に関する取組
F	普及啓発に関する取組み

	個別探究テーマ(サブテーマ)	調査分類
1	外来生物が引き起こす問題	A、E
2	外来生物とのつきあい方	A、E
3	外来生物が在来生物に与える影響	C、D
4	外来生物の導入の環境への影響	E
5	北海道の外来生物対策の特徴	A、F
6	侵入害虫根絶がもたらすものとは?	C、E
7	日本の外来生物対策の特徴	B、F

②フィールドワーク

身近な外来生物1種に焦点をあて、セイヨウオオマルハナバチの駆除活動を行っている恵庭市「えこりん村」(株式会社アレフ)をフィールドワーク先として選んだ。営利企業でありながら環境問題にも取り組むという、民間での活動のあり方を知ることが生徒にとって大切であり、かつ、将来の消費行動がかわるきっかけの一つとなつてほしいと考えたからである。セイヨウオオマルハナバチの繁殖活動時期にあわせて、5月31日の実施となった。

まず、セイヨウオオマルハナバチについての説明を受けた。トマトなどのハウス栽培で花粉を媒介させるために、北海道ではアレフが初めてヨーロッパなどから導入したそう。その結果、ハウスから逃げ出し野生化した個体による生態系への悪影響が懸念されている。例えば、餌の競合などによる在来マルハナバチの駆逐、在来マルハナバチに花粉の媒介を依存する在来植物の健全な繁殖の阻害などだ。ここ恵庭で食い止めないと、日高山脈を越え全道に広がってしまうため、導入した企業の責任として、捕獲活動・啓蒙活動が続けているとのことだった。パペットなどを使い、セイヨウオオマルハナバチによる盗蜜の方法などを生徒たちにわかりやすく説明していただいた。

その後、捕虫網、捕獲びんを持ち、捕獲実習を行った。当日は一日中小雨が降り、気温も低く、セイヨウオオマルハナバチの活動は活発ではなかった。在来マルハナバチの活動は少ないながらも見られ、在来マルハナバチとセイヨウオオマルハナバチの見分けはできるようになったが、1時間半程度で女王蜂1匹の捕獲にとどまった。あまりにも捕獲数が少ないことから、フィールドワーク先の担当者の提案で、本来北海道にはいなかった国内外来種であるトノサマガエルの捕獲に切り替えた。小雨の中で花壇の花の根元を動かすと、親指大のトノサマガエルが次から次へと飛び出してくる。アマガエルを避けながら、捕虫網に追い込み、一人7匹程捕獲することができた。生徒にとって、見慣れた普通のカエルのトノサマガエルは実は外来種であるという認識はなく、その数の多さに「外来生物を入れない」という対策の重要さも理解したようだ。午後は、アレフの環境への取組について講義をうかがった。「食」という字は『人』を『良』くすると書く」に表された、食材の生産段階である農業、その生産現場を取り巻く環境にさかのぼって研究・実践してきた企業活動の広さに、生徒は驚きを隠せなかった。

実習フィールド	内容
銀河庭園	外来種セイヨウオオマルハナバチについて講義
	外来種セイヨウオオマルハナバチ捕獲実習
	国内外来種トノサマガエル捕獲実習
森のレストラン天満	地産地消の食材で昼食 リサイクル(生ごみ堆肥化、食用油を暖房に・BDF化) 自然採光・屋上緑化の建物
花の牧場	(株)アレフの環境への取り組みについて 説明・質疑応答
とまとの森	1個の種子から育て1万個以上の実をつけたトマト 見学・説明

③その他

『外来生物被害予防三原則』をテーマとして、映像作品を作成した。ヒアリ、アライグマ、そしてセイヨウオオマルハナバチを例に、「入れない・捨てない・広げない」についての寸劇仕立ての作品が仕上がった。

フィールドワーク先では、昨年と同じ方が担当して下さった。熱意をもって取り組んでいる大人に接することは、生徒によい影響を与える。公の機関ではなく、企業として取り組んでいる現場を見たということも、他人事ではなく「自分たちができること」として考える働きかけになったと思われる。(株)アレフの取り組みは多岐にわたり、食から環境につながる研究実践が多々ある。日頃身近なハンバーグ屋さんが、実は環境活動に熱心なところであったというのは生徒に大きな驚きを与えていた。

昨年は第一希望での選択者がいなかったが、今年は第一希望者でグループが編成できた。学年のカラーの違いももちろんあるだろうが、昨年の実習経験者が、実習体験と熱い思いを後輩に伝えてくれたことが希望者増につながったようだ。教員が特別な場を設けたのではなく、寄宿舎の食卓の日常会話の中でのことだ。学びを通して、生徒自身が行動し、他者に影響を与えている事例である。その生徒は高3のアクションプランでも外来生物問題に取り組み、アメリカザリガニの捕獲や小学校での啓蒙活動を行っている。

D) 気候変動による影響と、その対応 (SDGs 目標13)

①課題設定

聖心女子学院では毎年、夏季休業期間中に姉妹校の生徒が集まり、社会問題に対するワークショップを行っている。各姉妹校の頭文字をとって「SOFIS」と名付けられたそのワークショップは、今年度、8月4日～6日にかけて「気候変動とその対策」をメインテーマに開催された。研究開発テーマの一つである「自然との共生」とも合致するテーマであり、フィールドワークも設定されているため、今年度のフィールドワークと連動した探究学習で取り組むテーマの一つとして設定することとした。

各姉妹校の生徒は、メインテーマに即したサブテーマを定め、調査・研究(探究学習)を事前にしっかりと行い、このワークショップに臨む。札幌聖心

	個別探究テーマ(サブテーマ)
1	砂漠化を引き起こす(拡大)要因、影響、対策
2	洪水が起こる原因、影響、対策

としては右表に示すように、気候変動動によって引き起こされる「砂漠化」と「水害」の2つの問題に焦点をあて、サブテーマを定めた。SOFISに参加したのは高2と高3がそれぞれ2名ずつであったため、ひとつのサブテーマにつき、それぞれの学年から1名を割り当て、各々が調査・研究した内容を突き合わせ、情報の共有に努めるよう工夫した。

②調査・研究

調査・研究は情報共有や、学校祭で来場者に対して成果を普及すること、SOFISの際のプレゼンや探究報告書の作成に必要な情報を集めるとともに、自分自身が理解を深める目的で進められた。

SGHに指定され、探究学習が始まって以来、本校ではこの調査・研究を進めるにあたり、右に示す「調査メモ」の活用を進めてきた。気候変動について、生徒たちは報道では耳にしたことがあっても、その詳しい内容はよくわかっていないという段階であったため、このメモの枚数が必要となる知識の蓄積に繋がると考え、積極的に作成するよう促した。一定の枚数がたまったところで、メンターによる点検を行い、何を調べようとしているのかを把握するとともに、調べが不足していると判断したときには、いくつかのキーワードをヒントとして与え、更なる調べを促した。今回、メンターとなったのは地歴・公民科と理科の2名の教員である。いずれも、気候変動のことを授業で取り扱ってはいるが専門家ではない。調査メモを点検していく中で、メンター自身も気候変動に対する関心を高め、知識の修得に努めることにつながった。

調査・研究を進めていく中で2つのテーマに共通したことは、人間の経済活動が「砂漠化」や「洪水」発生の要因となっていること、その影響が自然界に目に見える形で現れていること、解決に向けての取り組みが官民で行われてはいるが、その認知度が低いことであった。また、同じテーマについて複数の生徒が調査・研究を進め、情報共有をすることで、各々が調査不足だった点や、自分自身は理解したつもりでも、人に伝えるためにはその知識がまだ不十分であった点などを見出すことが出来ていた。

③情報共有（ディスカッション）

SOFISでは各姉妹校がそれぞれ、調査・研究した内容をプレゼンする。それに向けて校内ではリハーサルと情報共有を行った。プレゼンはパワーポイントを用いて行うこととした。限られた（設定された）時間内に要領よく説明するために、次の点に留意するよう助言した。

- ・的確かつ簡潔に
- ・どのようなことが課題となっているか、また、その課題が生じている現状を伝える
- ・平易な言葉を使う（専門用語をわかりやすい言葉に置き換える）
- ・パワーポイントを見れば理解出来ることと、説明が必要なことを区別する

「砂漠化」、「洪水」とそれぞれ分かれて調査・研究を進めていたため、互いの情報をこのリハーサルの際に共有し、かつ作成したパワーポイントが上記4つの項目に叶ったものになっているかについて指摘し合い、その作成を完成させ、調査・研究を完了した。

④フィールドワーク

SOFISの会場となった静岡県裾野市の不二聖心女子学院と、御殿場市の株式会社RICOH環境事業開発センターで行われた。第1日目は、各校の調査・研究内容についての発表が行われ、気候の変動をもたらす原因や、現状、影響について情報の共有が行われた。第2日目は、創立の流れを汲むお茶畑を含む不二聖心女子学院の広大な敷地内をまわり、そこに見られる生物種が年々変化しているということから、気候変動そのものや、影響を体感することができた。また、不二聖心女子学院の理科教諭より、自然の生存権、世代間倫理、地球有限主義という3つの柱を軸にした環境倫理学についての講義を受けた。環境問題に対する新しい視点でのものの見方や考え方に気付かされた講義であった。

RICOH環境事業開発センターではリユース・リサイクル技術の実践・最適化を通じて、これまでの事業領域にとらわれない新規事業の創出を目指しているとの説明を受けた。また、回収した自社製品から取り出した廃プラスチックを利用した油化技術の実証研究の現場見学も行うことができ、その技術開発こそが資源の少ない日本での持続可能な開発に欠かすことが出来ない技術であり、これからの地球環境を守り、維持していくうえでも欠かすことが出来ないものなのだとことを生徒達は実感していた。また、持続可能な開発を目指すには、応分の負担を消費者もしていかなければならないということを理解した。第3日目は、上智大学神学部の吉川まみ准教授によるキリスト教的価値観から見たSDGsの目標13「気候変動に具体的な対策を」について講義を受けた。自分で見、考えて行動することが求められ、なおかつ客観的に、科学的にとらえることがこれからの時代に生きる我々に求められていることであるというお話を伺い、フィールドワークは締めくくられた。

⑤成果の普及

対外的にも公開された本校のSGH研究発表会において、高2GIではテーマに沿った動画を作成し、公開することとなった。これまでにない試みで、動画の作成に生徒は苦勞するかわかれたが、その心配は杞憂に終わった。スマートフォンとアプリを活用し、作成すること自体はそれ程難しいことではない。探究した内容をいかにわかりやすく、訴えることができるかに主眼を置き、その素材を集める、つくり出すことの方が苦



労していた。研究会の参加者からは何を訴えたいのかがよくわかる動画だった、というお褒めの言葉をいただいていた。

⑥評価

このテーマを選んだ生徒達は、自ら調べ・考えることによって、気候の変動が多岐に渡って影響を及ぼすことに気付くことが出来ていた。特に、気候変動の原因となることが人間の活動によることや、その対策を施すことが、SDGsの他の目標の達成にも深く関わり、大きな影響をもたらすことに気付くことが出来ていた。

SGHの研究指定は今年度で終了するが、その趣旨を反映したGIという科目は次年度も開設される。今回この探究テーマに取り組んだ生徒達はGIを選択する予定である。必ずしもこの気候変動を再び課題探究のテーマに選ぶとは限らないが、課題を見出し、その解決に向けて動き出そうとするその姿勢を見せている。そのこと自体、SGHの取組によりグローバルリーダーの育成を目指すという目的に資する大きな成果といつてよいと考える。

E) ニューヨーク国連研修（事後学習）

本研究報告書の「ニューヨーク国連研修」のページをご参照下さい。

IV. 評価・検証

4月および12月に高2の全生徒（4月は31名、12月は30名）を対象にしたアンケートを行った。同じ内容に関する質問項目の結果を比較し、変化が顕著であると思われる項目を取り上げ、評価・検証を行った。なお、評価基準は右表のとおりである。

評価基準	評価4：よくあてはまる 評価3：どちらかというにあてはまる 評価2：あまりあてはまらない 評価1：全くあてはまらない
------	---

目的・ねらい－1）にある「共生社会についての視座を高めること」について、それに関連する評価項目47と58の結果は下表のとおりである。評価項目47、58ともに4月に比べて12月は評価平均値の上昇が見られるとともに、「4」または「3」と評価している割合も増えている。以上の結果から、生徒たちは少なくとも共生社会についての視座を高める必要があることを理解し、共生社会において何が課題となっているかを適切にとらえられるようになったと感じていることがわかる。

評価項目	評価平均値		評価4と3を合わせた割合	
	4月	12月	4月	12月
47 GIの取組みを始める前と現在とを比べると、「人との共生」や「自然との共生」を図ることの大切さを認識するようになった	3.29	3.61	87.10%	100.00%
58 「人との共生」や「自然との共生」を図るうえで課題となっていることを適切に捉えることができるようになった	3.10	3.27	80.64%	93.34%

目的・ねらい－2にある「グローバルな視野を持った思考力・判断力を養うこと」について、それに関連する評価項目12、45、72の結果は次のようになった。いずれの評価項目についても、評価平均値および評価を「4」と「3」とした割合は増えている。こうしたことから、異文化理解には努力が必要で、英語力をつけることは不可欠、しかし英語はツールに過ぎず、グローバル社会に貢献するためには他に専門的な知識・技能を身につけねばならないと考える生徒が増加したことが考えられる。グローバルな視野を持った思考力を多少なりとも養えたものとする。

評価項目	評価平均値		評価4と3を合わせた割合	
	4月	12月	4月	12月
12 異なる歴史的背景や文化圏出身の人々の考え方や行動を互いに理解しあうには努力が必要である	2.45	3.63	80.64%	93.33%
45 英語（外国語）を学ぶことは、自分と意見や文化の背景が異なる人と協力できるようになるための手段の一つである	3.42	3.63	90.32%	96.67%
72 英語（外国語）の活用能力を身につけることはグローバル社会で活躍するためのツールであり、その他に専門的知識・技能が必要である	3.29	3.50	87.10%	96.67%

目的・ねらい－3にある「自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えるための表現力を磨く、他者を理解する寛容性を養う、ICTスキルの向上を図ること」について、それに関連する評価項目52、56、65、67の結果は次のようになった。評価項目65の結果からは、大多数の生徒は他者を理解する寛容性を養うことが大切であると考えていることも推測される。また、評価項目67の結果か

らは、大多数の生徒は今回のGIで表現力を磨こうと努力したことがわかる。さらに、評価項目52と56の結果については、52の評価平均値は12月の方が若干低くはなっているがほぼ変わらないと考ええると、いずれの項目についても評価を「4」と「3」とした割合は増えていることから、生徒たちが自らのICTスキルが向上したと考えていることを示しているものと考えられる。これはまた、レジュメや探究報告書を全てデータファイルで提出することを求めたためであるとも推察できる。

	評価項目	評価平均値		評価4と3を合わせた割合	
		4月	12月	4月	12月
52	PCやタブレット端末などICT機器を使うスキルを身につけ、積極的に活用ようになった(活用している)	3.42	3.40	87.10%	96.66%
56	収集した情報やデータを集計して図や表にまとめ、適切な使い方をすることができるようになった	2.90	3.23	74.19%	93.33%
65	合意形成を図る上で、自分とは異なる意見や考えを反映させることは必要なことだ	2.94	3.27	93.54%	90.00%
67	提案内容を初めて見聞きする人に対し、自分の言葉でわかりやすく、内容に工夫してプレゼンテーションするよう心がけた	2.90	3.27	70.96%	90.00%

最後に、「グローバルな視点で持続可能な共生社会に生きる人間として必要な態度とリーダーとなり得る能力を育成する」ということについて、それに関連する評価項目20、26、70、71の結果は次のようになった。評価項目20と26の結果からは、持続可能な共生社会を形成していく過程で困難は避けられないが、たとえ困難に直面しても他者と協力して解決を図ろうと考え、将来社会に貢献する活動に取り組みたいと考える生徒が増加したと言える。また、評価項目70と71の結果からは、今回の取組を通じて、自らの思考力・判断力に関する自己評価が高まったことが推測される。3年次にアクションプランを経験することで更に自信を付け、自らがリーダーとなり進んで貢献できる態度をより一層養うことができるのではないかと思われる。

	評価項目	評価平均値		評価4と3を合わせた割合	
		4月	12月	4月	12月
20	将来、社会に貢献する活動に取り組んでみたい	3.23	3.40	70.97%	83.34%
26	困難に直面しても、いろいろな人と協力して問題解決に取り組んでいきたい	3.23	3.33	77.42%	96.67%
70	物事を批判的に分析することができるようになった	2.84	3.17	70.97%	93.34%
71	分析した結果から、重要な結論を導き出すことができる	2.90	3.13	77.42%	86.67%

以上のように、この半年間で生徒に劇的な変化があったとはいえないが、今回のGIの取り組みは確実に生徒の変容を促し、目的・ねらいに近づけるものであったといえる。

高2 即興性重視型英語ディベート

I. 目的・ねらい

即興型英語ディベートを通して、次の5つの力を育てることを目的とする。

- A) 「読む」のではなく、即興で用意した考えを英語で話すことによる英語での発信力
- B) 自分の意見を整理し、聴衆を説得することによる論理的思考力
- C) さまざまな分野の論題を議論することによる幅広い知識
- D) 聴衆を意識した話し方を工夫することによる表現力
- E) チームで協力して活動することによるコミュニケーション力

なお、ここでいう即興型ディベートとは大阪府立大学の中川智皓助教が主宰する一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会が推奨する、学校の授業において英語でディベートを行うためにパラメンタリーディベートのやり方をアレンジしたものである。

II. 前年度との変更・改良点

今年度はコース分けをせず、学年全員での授業を行った。進度は前年までの発展コースと標準コースの中間ほどに調整して行った。

III. 実施内容

1) オリエンテーション

「英語表現II」の授業で準備型英語ディベートを経験した生徒が全体の3分の1ほどいるため、準備型英語ディベートと即興型英語ディベートの手法や得られる力の違いについて触れながら即興型英語ディベートとは何かという説明を行った。

2) 高校3年生（上級生）によるモデルディベートの見学

即興型英語ディベートの経験者である3年生の代表者2チーム6名に “Japanese government should allow couples to have separate surnames. （日本は夫婦別姓を認めるべきである）” を論題にディベートを披露してもらい、全員で見学した。

教員6名がジャッジを行い、試合後に、勝敗を決めた理由、それぞれのチームの良かった点を詳しく説明した。

3) ディベート

即興型ディベートの形式と準備の方法、立論、反論、立て直し、まとめの方法を段階的に順を追って学び、最終的に即興型ディベートの形式でディベートができるように次のような練習方法をとった。

第1段階	内容	Speaking and Listening Practice
	論題	“Three things I cannot live without.” (なくては生きていけない3つのもの)
	達成目標	・ メモを見て英語で意見を述べる。 ・ 1分以上英語で話し続ける。 ・ 相手の英語によるスピーチを聞き、メモを取る。 ・ 相手のスピーチが聞き取れない場合に、英語で質問をする。 ・ 書き取ったメモをもとに、相手のスピーチを他のグループメンバーに英語で伝える。

第2段階	内容	Pre-debate Practice (1)
	論題	“School lunch is better than a homemade bento lunch.” (手作り弁当より給食の方がよい)
	達成目標	・パートナーとブレインストーミングを行う。 ・サインポストを2つ英文で作る。 ・立論を立てる。 ・2分以上英語で立論を述べる。 ・相手チームの立論を聞き、メモを書き取る。 ・相手チームの立論に対して、英語で質問をする。

第3段階	内容	Pre-debate (2)
	論題	“High school students should get a part-time job.” (高校生はアルバイトをするべきである)
	達成目標	・肯定側は論題に対する定義を決める。 ・反論の予想を立てる。 ・3分以上の英語で、立論、反論を述べる。

第4段階	内容	Debate
	論題	“Domestic travel is better than traveling abroad for a school trip.” (修学旅行は海外より国内の方がよい) “Convenience stores should be closed late at night.”
	達成目標	・一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会の全国大会で行われているものと同じ形式でディベートを行う。 ・各スピーチ後に1分間のチームタイムを設け、チーム内での反論のための話し合いの時間とした。 ・英語でのコミュニケーションの苦手意識克服のため、ディベートは正しく美しい英語で話すことよりも、英語で意見を相手に伝えることに重点をおくよう指導した。

IV. 評価・検証

1) ルーブリックによる評価

即興性重視型英語ディベート能力を測るために、ルーブリック評価による生徒の自己評価および教員による評価を中間期（12月）と最終回（2月）の2回行った。なお、評価段階は0～3の4段階とした。

生徒による自己評価		中間期（12月）				最終回（2月）			
		3	2	1	0	3	2	1	0
内容	主張に理由があったか	35%	58%	6%	0%	34%	62%	3%	0%
	反論（相手チームに対する反応）があったか	32	52	10	6	14	72	10	3
	定義が出来たか（PMのみ）	47	53	0	0	36	64	0	0
	例やデータを用いて、十分に説明をしているか	29	48	16	6	21	62	14	3
	POIで積極的に議論しているか	19	35	13	32	14	21	31	34
表現	はっきりとわかりやすい言葉で話しているか（声の大きさ、スピード）	35	48	16	0	7	76	14	3
	Non-Verbal Expressionで聴衆を意識しているか（アイコンタクト、身振り手振り）	10	42	42	6	0	45	45	10
	構成はわかりやすいか（論点の順番、ナンバリング、サインポスト）	19	61	19	0	24	66	10	0
	スピーカーの役割を果たしているか	23	61	13	3	24	55	17	3

教員による自己評価		中間期（12月）				最終回（2月）			
		3	2	1	0	3	2	1	0
内容	主張に理由があったか	20%	67%	13%	0%	47%	43%	7%	3%
	反論（相手チームに対する反応）があったか	20	32	36	12	58	23	15	4
	定義が出来たか（PMのみ）	0	63	25	13	33	67	0	0
	例やデータを用いて、十分に説明をしているか	17	37	13	33	47	37	13	3
	POIで積極的に議論しているか	3	20	13	63	3	3	37	57
表現	はっきりとわかりやすい言葉で話しているか（声の大きさ、スピード）	10	57	33	0	40	37	23	0
	Non-Verbal Expressionで聴衆を意識しているか（アイコンタクト、身振り手振り）	10	47	40	3	30	20	43	7
	構成はわかりやすいか（論点の順番、ナンバリング、サインポスト）	27	50	23	0	43	33	20	3
	スピーカーの役割を果たしているか	37	40	23	0	50	33	13	3

生徒による自己評価では、「構成はわかりやすいか」という項目以外のすべての項目について中間期の評価より最終回の評価の方が低くなっている。しかし、教員による評価では、「POIで積極的に議論しているか」という項目以外のすべての項目について中間期の評価より最終回の評価の方が高くなっている。このことから、生徒たちはディベートの回を重ねるごとにディベートの形式やディベートの内容、表現についての理解を深め、結果的に自己評価が厳しいものになったのではないかと考えられる。生徒たちのディベート力が大幅に伸びたことは教員による評価から明らかである。教員による評価において、唯一伸びが見られなかった「POIで積極的に議論しているか」という項目については、初期のディベートにおいて生徒たちは相手チームの立論を聞き取ることができず、繰り返してもらうためにPOIを行っていることが多かったが、後半は十分に相手に聞こえるスピーチができるようになり、POI自体の質も上がり、議論を活発にするための質問をするようになったためであると考えられる。

POIとは

相手チームのスピーチ中に、質問やコメントを15秒以内で発現することができる。それをPoint of Information(POI)といい、手を挙げながら“On the point, sir”や“POI”などと声をかけ、質問する。質問を受けるか否かはスピーカーが決めることができ、受ける場合は“Yes, please”、受けない場合は“No thank you”などのように答える。なお、POIはいつ行ってもよい。ただし、POIで挙手して一旦断られた場合は、その15秒後以降から再度POIをすることができる。POIの間もストップウォッチの時間は止めない。

2) アンケートによる調査結果

項目	開始期（10月）			中間期（12月）			最終回（2月）		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C
ペアやグループで英語で話すことが出来る	10%	73%	17%	32%	65%	3%	55%	42%	3%
クラス全体の前で英語を話すことが出来る	7	40	53	23	65	13	16	74	10
間違いを恐れずに英語でドンドン話すことが出来る	7	27	67	19	68	13	10	74	16
英語で話しを聞きながら要点をメモすることが出来る	10	50	40	19	74	6	23	68	10
相手の話がわからないとき、すぐに聞き返すことが出来る	0	57	40	23	45	32	23	52	26
話しを聞き、内容を引用して議論を広げることが出来る	0	20	80	13	68	19	13	58	29
メモがあれば英語で主張を伝えられる	7	53	40	42	45	13	42	52	6
咄嗟に単語が出ないとき、他の表現に置き換えて言うことが出来る	10	47	43	19	61	19	16	61	23
主張に理由や具体例を添えて話すことが出来る	0	47	53	32	55	13	35	52	13
グループ内でグループの話し合いに貢献することが出来る	10	30	60	29	71	0	39	61	0
グループのメンバーと協力して、グループとしての意見をまとめることが出来る	3	30	67	32	58	10	39	58	3

すべての項目において開始時に比べて中間期、最終回の方が「できる」、「ときどきできる」という回答が大幅に増えている。このことから、生徒たちが英語ディベート学習を通して、英語力やディベートに必要な力を身につけることができたという実感が持てていることがわかる。「グループ内でグループの話し合いに貢献することができる。」という項目については、「できない」

と答えた生徒が中間期、最終回ともに0人であり、意識を持って話し合いに参加できたことがうかがえる。この学習を通して、自分の英語を話す力や意見を述べる力に自信を持ち、今後の英語学習に活かしていくことはもちろんのこと、グローバルリーダーとして成長し、国際社会で貢献することを願っている。

以下に最終回のアンケートに生徒が書いた感想・意見のいくつかを記載する。

- ディベート自体は緊張したが、仲間と協力して意見を考えるのは楽しかった。
- 最初のうちは不慣れで、主張や反論が相手にうまく伝わらなかったが、回数を重ねていくうちに、相手の主張を聞き取ってメモを取り、即興で反論を考えて言えるようになった。POIにも対応することができるようになったのは大きな進歩だと感じ、できたときにはとてもうれしかった。
- 英語で会話することに苦手意識を持っていたが、ディベートを通して、完璧な英語でなくても伝わるのが大切で、積極的に自分から発言することの大切さがわかった。
- 議題に合った主張を論理立てて話すことができるようになった。
- 最初は自分の英語に自信が持てず、発言をしなかったり、小さな声で発表したりしていたが、
- 徐々に多少英語が間違っていたとしても相手に伝わるのが楽しくなって、どんどん自分から発言できるようになった。
- チームのメンバーと話をすると、自分では考えつかないような意見が出てきて視野が広がった。
- The debate class was interesting. Students need not only English ability but also team-work. It was a challenge for us, but we could learn and grow a lot.
- Participating in the debate is a great way to practice English. It's also useful to create awareness on issues that have direct effects on the world's well-being, as well as to develop critical thinking and understanding of the topics.

高3 「アクションプラン」の計画と実行

I. ねらい・目的

- 1) 「人との共生」または「自然との共生」に関わる解決すべきグローバルな課題を自ら見出す。
- 2) 課題解決のための「アクションプラン」を作成・実行する。作成にあたってはライフステージを考慮することとし、18歳の自分たちにできることについて取り組むよう促す。
- 3) 企業、政府機関・公的団体、NPO等との連携のもとにアクションプランを実行する。また、必要となる交渉力やプレゼンテーション能力の向上を目指す。
- 4) 下級生への引き継ぎを考慮し、活動内容を文書化して記録として残す。

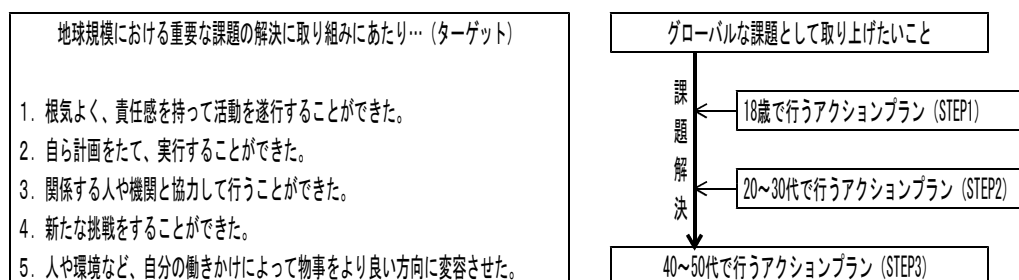
II. 実施内容

1) アクションプラン計画書の作成

前年度（高2）の2月に、アクションプランの概略について考えたことを記すためのワークシートを「アクションプラン計画書①」として渡し、それを春休休業中に準備するよう指示していた。そのため、今年度は新学期が始まってすぐにそのワークシートを提出してもらい、高3のグローバルイシューズ（GI）を担当する教員で手分けして内容を精査するところからスタートした。精査のポイントは、取り上げたアクションプランが「共生」というテーマに即しているか、課題解決を進めていくうえでライフステージを考慮したものになっているか、そのライフステージ上でSTEP1として取り組む内容が18歳の高校生に相応しい内容とレベルになっているかである。精査の結果、計画の変更が必要なところを中心に再検討を指示し、練り直したものを「アクションプラン計画書②」として再提出

高3GI アクションプラン計画書①（春休みの課題）		氏名	2018.4.13 高3 GI												
組 番 氏名		高3GI アクションプラン計画書②													
→新年度始業日に担任に提出															
～到達目標～															
地球規模における重要な課題の解決に取り組みにあたり… 1 根気よく、責任感を持って活動を遂行することができた。 2 自ら計画をたて、実行することができた。 3 関係する人や機関と協力して行うことができた。 4 新たな挑戦をすることができた。 5 人や環境など、自分の働きかけによって物事をより良い方向に変容させた。		1. グローバルな課題として取り上げたいこと													
1. 解決が必要であり、なおかつグローバルな課題として取り上げたいこと		2. 課題として取り上げた理由（グローバルな課題となっていることか、「人との共生」または「自然との共生」のテーマと合致しているかを考慮して）													
2. （1.に関して）これまでにリサーチした内容（現状など）		3. ライフステージを考慮した課題解決に向けてのアクションプラン													
3. （1.に関して）課題として取り上げたい理由		<table border="1"><thead><tr><th></th><th>具体的なアクションプラン</th><th>想定される変容</th></tr></thead><tbody><tr><td>STEP 1 18歳の自分がやること (課題解決の とっかかり)</td><td></td><td></td></tr><tr><td>STEP 2 20～30代でやること</td><td></td><td></td></tr><tr><td>STEP 3 40～50代でやること (最終的な 課題解決)</td><td></td><td></td></tr></tbody></table>			具体的なアクションプラン	想定される変容	STEP 1 18歳の自分がやること (課題解決の とっかかり)			STEP 2 20～30代でやること			STEP 3 40～50代でやること (最終的な 課題解決)		
	具体的なアクションプラン	想定される変容													
STEP 1 18歳の自分がやること (課題解決の とっかかり)															
STEP 2 20～30代でやること															
STEP 3 40～50代でやること (最終的な 課題解決)															
4. （3.に関して）何をもってして課題解決と考えるかのゴール設定															
5. アクションプランの絞り込み (4.で)設定したゴール(課題解決)を50代で達成できると仮定して、その最初のステップとして18歳の自分にできることは何か															
6. 今後グループを作ることになります。現時点で既にグループが作れそうな場合は、そのメンバーを書き出してください。ただし、1グループ最大3名とします。															

するよう求めた。なお、アクションプランの立案にあたり、意識して欲しいことや到達目標を「ターゲット」としてあらかじめ提示し、課題解決は長い年月がかかることが想定されることを踏まえ、ライフステージを考慮した計画の立案を求めたことは従来と同様である。



2) グループング、アクションプランおよびメンターの決定

完成させたアクションプラン計画書②をすべて掲示したうえで、個人で取り組むのか、もしくはグループで取り組むかを届け出させた。グループを構成するにあたっては、取り上げたアクションプランに共通性があること、構成メンバーは3名までとすることを条件とした。

結果として、個人での取り組みが8組、グループでの取組が12組となった。高3GIの担当教員の適性等を考慮し、メンターとして教員一人あたり2～3組を受け持つこととなった。

アクションプラン名	
1) レモネードでハイチ大地震への復興	11) 日本人の英語コミュニケーション向上のためにできることを考える
2) 子どもの未来のために ～子ども食堂を広める～	12) 日本からシリアを思う～難民問題認知度向上のために～
3) 始める、ヘアドネーション	13) 読もう！知ろう！助け合おう！！
4) ホームレスの方々に私たちができること	14) グルテンフリーの食品の推奨～多くの人が安心できる食事を～
5) 貧困地の教育支援 ～私たち学生にできる支援とは～	15) 毛皮のために殺される動物たちを守るために
6) 当たり前がない世界～健常者と障害者の日常の違い～	16) 質の高い教育をみんなに「世界一大きな授業」を通して
7) SDGsを基盤とした生活に向けたアクション	17) アジアの子どもに本を読む喜びを ～絵本を届ける運動～
8) 日本を外国人の方々にも住みやすい社会へ	18) ピアノプロジェクトで防ぐ孤独死
9) ヘルプマークって知ってる？	19) 身近な外来生物について考える～withアメリカザリガニ～
10) 虹色の輪を広げよう ～若者のLGBTへの理解を深める～	20) スポーツでコミュニケーションの壁をなくそう

3) アクションプラン企画書の作成

アクションプランを実行するうえで、企業や大学、NPO等の外部の団体(以下、連携先)との連携が求められていることは従来と変わらない。そこで、生徒たちがどのようなことに取り組もうとしているかを連携先にも理解していただく必要があり、そのプレゼン資料としてこれまでと同様、「アクションプラン企画書」を作成した。作成にあたっては、アクションプラン計画書②をもとに、ビジネス文書としての性格をもたせ、その文言や内容・根拠を明確かつ簡便に記載するよう留意を促した。

これまでの先輩が残してくれたアクションプラン企画書が大いに参考となり、記載する内容そのものについては最初の段階からの的を得ているものが多く、メンターとの綿密な打合せのうえでその内容と文言を確認しながら作成し、完成させた。

2018年 月 日
アクションプラン企画書
I. 連絡先 生徒氏名 学校名 学校住所 学校電話番号 アドレス 指導担当教員
II. グローバル社会において「共生」を果たすうえの課題とその解決方法 1) グローバルな課題として取り上げたこと 2) 課題として取り上げた理由 3) 課題解決策(最終的な到達目標) 4) 18歳の自分たちがまず行う課題解決策(アクションプラン) 5) アクションプランの実施により想定される変容
III. アクションプランの実施計画(予定)

4) 連携先との交渉

今年度の特徴はまず、春期休業中にアクションプランの見通しを立て、それに相応しい連携先とすでに交渉・打合せを行っている高3生が多くいたことである。これも上級生からの引き継ぎの効果であるといえる。昨年から作成することとした「アクションプラン報告書」に目を通していたり、直に話を聞いていたため、早めに行動に移した方がよいという心理が働いたものと思われる。その点では連携先を探すことに苦労は少なかったといえる。また、例年以上に連携先との連絡・調整が綿密に行われており、アクションプランの目的を十分理解していただいたうえでご協力いただけることにつながっていた。一方で、生徒と連携先との間での連絡・調整事項はメンターにも必ず報告するよう周知していたが、先走ってしまい、メンターの知らないところで物事が進み始めようとしていることもあった。これもまた例年にはみられない傾向であった。このことについてはあらためて高3生全員に周知を徹底し、それ以降は問題は生じなかった。メンターに対しても、進捗状況について随時、把握に努める留意を促した。

5) アクションプランの実行

アクションプランを実行する時期については、例年と比べて一定の幅を持たせることとした。これは、連携先にとってご協力いただけやすい時期に合わせてアクションプランを実行した方が協力を得られやすいという昨年度の反省を踏まえたものである。ただし、アクションプラン報告書の提出期限を10月末に設定したため、その執筆と校正にかかる時間を考慮して各自適切な時期に実行していた。なお、授業時間中ではあるが、外部に出かけてアクションプランを実行しなければならない場合には公欠扱いとした。

アクションプランを実行することそのものがゴールではない。机上で立てたプランを実際に行ってみることで、想定していた変容や成果が得られたかを検証することも非常に大切なことである。課題を解決するために、誰にでも、いつでも、どこでもといった視点をもって、プランそのものを見つめ直し、改善を図っていくことこそ重要である。各々の生徒にはこれらのことを考えてもらい、その考えたことをアクションプラン報告書に反映してもらうこととした。

6) 成果の普及

A) メディアへの記事掲載・出演

アクションプランの実行に際して、昨年度までと決定的に異なるのは、成果の普及についてである。これまでも新聞社やテレビ局等メディアへのプレスリリースは行っていたが、取り上げていただけた機会はそう多くはなかった。しかし、今年度は非常に多く取り上げていただけた。例えば、聴取者層が同じ年代のラジオ番組に、取り組んでいるアクションプランの紹介と協力を呼びかけたいと生徒自らが売り込むケースがあった。これは、生徒自身が自分の取り組んでいることに意義を感じ、誇りをもったからこそである。その他には、アクションプランの内容に共感した連携先が、自らのコネクションを通じてメディアにご紹介くださったケースもあった。

メディアで扱われることによる反響は非常に大きく、記事等を目にした一般の方々から学校への問合せ、物品提供の申出などが相次いだ。世間一般の方々にも本校のSGHの取組を広く知っていただく機会となり、その目的や意義をご理解いただくことにつながった。それは、学校祭やバザーなどで開催したSGHの発表ミニイベントの来場者数に表れていたこと推察できる。

日付	対象となったアクションプラン	媒体名	形態・番組名	内容
6月18日(月)	始める、ヘアドネーション	FMノースウェーブ	RADIO GROOVE番組出演	活動の紹介、「髪」の提供呼びかけ
7月18日(水)	始める、ヘアドネーション	北海道新聞	記事掲載	活動の紹介、「髪」の提供呼びかけ
8月4日(土)	レモネードでハイチ大地震への復興	十勝毎日新聞	記事掲載	活動の紹介、歩行者天国でイベントする告知
8月20日(月)	始める、ヘアドネーション	FM白石	金曜ブラブラ白石情報局番組出演	活動の紹介、「髪」の提供呼びかけ
11月10日(日)	SDGsを基盤とした生活に向けたアクション	北海道新聞	記事掲載	活動の紹介、ワークショップイベント告知
11月20日(火)	虹色の輪を広げよう ～若者のLGBTへの理解を深める～	フリーマガジン「ch FILES」	意見広告	
1月31日(木)	SDGsを基盤とした生活に向けたアクション	朝日新聞	記事掲載	聖心女子大&早稲田大学学生団体SDGs勉強会講師

※著作権の関係上、掲載記事の一部は「SGH探究学習・活動成果報告書」をご参照ください。

B) 企画・運営と発表参加

連携する相手が多岐に渡り、なおかつその連携先と組んで一般の方々を対象にしたセミナーやワークショップを自ら企画・運営するグループが現れたのも今年度の大きな特徴である。SGHに指定されて以降、最もアクティブに活動を進めた生徒たちであるといつて過言ではない。公の場で自分たちの取り組んでいることに対して関心をもってもらえたり、来場者からの問いかけが随分と励みになったと述べていた。また、次への取り組みに向けたモチベーションのアップにもおおいに資するところがあったとも述べている。

日付	対象となったアクションプラン	セミナー・ワークショップ名	連携先	内容
6月15日(金)	SDGsを基盤とした生活に向けたアクション	SDGs北海道アクション SDGs連続セミナー	NPO法人北海道club、RCE北海道道央圏協議会ほか	研究発表
9月26日(水)	SDGsを基盤とした生活に向けたアクション	わくわくBRING Night	NPO法人北海道club、日本環境設計株式会社ほか	研究発表
11月10日(土)～11日(日)	SDGsを基盤とした生活に向けたアクション	4回つながろう!北海道 SDGs×コミュニティアートキャラバン	NPO法人北海道club、日本環境設計株式会社ほか	研究発表、ワークショップ主催
1月26日(土)～27日(日)	SDGsを基盤とした生活に向けたアクション	北海道高等学校ユネスコ研究大会	北海道高等学校ユネスコ連絡協議会	研究発表、ワークショップ講師
1月29日(火)	SDGsを基盤とした生活に向けたアクション	はなはなSDGs×em factory 主催 「SDGs 勉強会」	聖心女子大学学生団体「はなはなSDGs」 早稲田大学学生団体「em factories」	研究発表、ワークショップ講師

C) 研究発表大会

SGHの指定最終年度である今年度は、10月5日(金)に行われた。高3はそれぞれの取組状況や成果等を示すポスターを作成し、発表時間15分を1クールとしたポスターセッションを3クール実施し、来場者に少しでも多くの、またいろいろな取組を知っていただく機会を設けた。来場者の中には何年も続けてこの研究発表大会にお出でいただいている方もおり、掲示したポスターをご覧になり、物事の見方や考え方、論理的でかつ根拠をきちんと提示しているその内容に感嘆され、高校での3年間の成長の様子を賛辞をいただいた。

この大会で発表したポスターをご覧になった北海道大学の教授からのお勧めもいただき、「2019 持続可能な世界・北海道高校生ポスターコンテスト」に応募したところ、最優秀賞(1組)、優秀賞(3組)を受賞した。また、優秀賞をいただいた3組のうち、2組は合わせて特別賞も受賞する栄誉を手にした。



D) 受賞歴

①2019 持続可能な世界・北海道高校生ポスターコンテスト

主催：持続可能な世界・北海道高校生ポスターコンテスト実行委員会

共催：北海道大学大学院環境科学院(札幌-道央圏ESD-SDGsコンソーシアム)

RCE北海道道央圏協議会

部門	賞	受賞者	テーマ
〔一般部門〕	最優秀賞	須藤あまね・東由理花・芹澤優希	「ドキドキ・ワクワクSDGs啓発」
	優秀賞	大久保絵未	「身近な外来生物について考える ～with アメリカザリガニ～」
	優秀賞(実践環境科学賞もあわせて受賞)	秋林瑠々・近藤くりあ	「始める、ヘッドネーション」
〔国際部門〕	優秀賞(星をつかむで賞もあわせて受賞)	石井愛莉	「レモネードでハイチ大地震からの復興」

②第1回SDGsクリエイティブアワード

主催：SDGsクリエイティブアワード実行委員会

共催：北海道、札幌市

後援：国連広報センター、内閣府、JICA北海道、朝日新聞北海道支社、HTB北海道テレビ、他

部門	賞	受賞者	テーマ
SDGsローカルアクション映像部門	北海道知事賞	Teen×Flores-Seed	「チャレンジャー ～世界を変革させる高校生の風儀～」

※受賞者の「Teen×Flores-Seed」とは、SDGsの普及を目指して活動している札幌市内の高校生のチームの名称である。本校の3年生が3名、このチームに所属し、内1名は代表を務めている。

7) アクションプラン報告書の作成およびジャーナル・エビデンスの整理

ジャーナルとは、アクションプランの実行とそれにかかる準備の過程の記録である。特に連携先とのやり取りを記録に残しておくことで、後になって言った言わない等のトラブルを防ぐ意味でも有効である。これには、やりとりした内容がわかるメモや画像、メール・FAX・電話の送受信記録等をエビデンス（証拠）として添付することを求めた。いずれもその活動時間ごとに作成してファイリングし、ターゲットの達成状況を確認するため の資料としても活用した。

アクションプラン報告書とは、自分たちの取り組んだ活動の成果を示す記録であるとともに、下級生に対する引き継ぎの文書でもある。第三者がそれを読み、大筋でもどのようなことに取り組んだかが理解できるよう文章を工夫し、画像や図表、グラフの効果的な使用を求めた。また、右に示したとおり、統一の書式を定めた。

アクションプラン報告書（記載事項）	
提出日 2018年10月 日	
<u>I. アクションプランのタイトル</u>	
<u>II. メンバー名</u>	
<u>III. グローバル社会において「共生」を果たすうえでの課題とその解決方法</u>	
1) 取り上げた課題 2) 課題として取り上げた理由や背景 3) 想定される（もたらされる）変容 4) 課題解決に向けたアクションプラン ①STEP1 ②STEP2 ③STEP3(最終STEP)	
<u>IV. 連携する企業・団体等</u>	
名称、担当者名、住所、電話番号	
<u>V. ジャーナル（主な活動記録、交渉記録）</u>	
<u>VI. アクションプランの実施報告と検証（成果や変容）</u>	
<u>VII. 下級生への引き継ぎ事項</u>	
<u>VIII. アクションプランを終えて・自己評価</u>	
記載事項は上記のとおり A4版、40字×55行 枚数制限なし ※ただし、ダラダラと書かず、要点を押さえて必要な情報と根拠が第三者に伝わるよう、分量を考慮すること	

III. 評価・分析

生徒を対象にした自己評価およびアンケート（以下、自己評価）を実施した。その目的は、SGHの取組の趣旨を反映するために開設された学校設定科目「グローバルイシューズ(GI)」のプログラムに取り組むことにより、

- ①グローバルリーダーたる資質がどれくらい育っているか、および生徒自身がそれをどれくらい意識しているか
- ②本校の研究開発テーマである「共生」を果たしていくことの大切さに、どれくらいの気づきが得られているか

を測ることにある。本自己評価は、高2までのプログラムを終えた段階の4月と、全てのプログラムを終えた段階の12月に実施した。評価基準は右表のとおり4段階とした。その結果を比較することで、本校が立案したプログラムが上

評価基準	評価4：よくあてはまる
	評価3：どちらかというにあてはまる
	評価2：あまりあてはまらない
	評価1：全くあてはまらない

記の①・②に挙げた資質や能力を磨くことにどれくらい資するかを判定することができる。なお、12月に実施した自己評価は、SGH運営指導委員会からの助言により、4月に実施した自己評価の質問項目のうち、重複する内容の質問を整理・統合し、文言の一部も変更した。ただし、4月と12月の結果を比較することを前提としていたため、その趣旨が変わらぬよう十分に配慮した。また、12月の自己評価では新たな評価項目もいくつか追加した。こちらについては4月の結果と比較できないことをご容赦願いたい。

今回の評価項目は「国際理解・異文化理解・自国理解」、「国際貢献」・外国語の活用」・「SGHの取り組みについて」の4つのカテゴリに分類している。結果そのものは、本報告書の「研究開発報告」ページをご参照いただきたい。4月と12月の結果を比較・分析してみると、2つの項目を除いた全ての評価項目で評価平均値が上昇した。その2つの項目とは、

評価項目23：「世界の自然や環境を守るために活動している機関を支援したい」

評価項目41：「英語（外国語）でのコミュニケーション能力をさらに高めていきたい」

である。評価項目23については、環境に関わる分野のアクションプランが少なかったことと相関する。今年度の生徒の興味・関心は、どちらかというところ「人との共生」に関係する課題に向いていたため、このような結果となったと推察される。また、評価項目41については、評価「4」と「3」を合わせた割合で比較すると、その割合は4月よりも12月の段階の方が良い結果を示している。また、評価「2」を付けた者がいなくなっている。評価平均の値そのものは下がったものの、プログラムの有効性は十分に確認でき、目標は達成したと見て差し支えないと考えている。

その他に、評価平均値が3.0前後の項目を中心に考察を加えてみたい。

評価項目30：将来、グローバル社会に関する会議やシンポジウムに参加したい

評価項目33：英語（外国語）で書かれた新聞や雑誌に目を通す機会をもつようになった

評価項目39：自分の言いたいことを英語（外国語）で表現できる

評価項目40：日常生活において外国人と接するうえで、不自由のない程度にコミュニケーションがとれる英語（外国語）による会話力が身についている

これらの4項目については、評価平均値そのものは低いですが、4月に比べると「2」や「1」と自己評価している割合が大幅に減少していることが共通している。低い評価を付けた何名かの生徒に聞き取り調査を行ったところ、特に「外国語の活用」カテゴリに分類される評価項目33、39、40については日々の英語の授業への取組や、長期および短期で数多く訪れる留学生との交流、英語で文章を表す機会の増加などを通じて、生徒自身が意識的に改善に努めていたことが低いながらも評価平均値の改善に繋がっていることがわかった。また、評価項目30の評価平均値が低いことは、前述の3項目の評価と連動していることがわかった。グローバル社会に関する会議やシンポジウムへの参加意欲が低いのではなく、参加するにはそれ相応の英語（外国語）活用能力が必要であろうという思いが尻込みさせているということもわかった。参加意欲は低いどころか、実は高いのである。

「SGHの取組が自分にもたらしたことは何か」という評価項目の自由記述による回答や、アクションプラン報告書にある記述、そして指導・助言等を通じて得られた生徒の声から、このGIのプログラム・取組自体を高く評価してくれていることがわかった。生徒自身がそれに取り組むことによっ

て視野を広げ、自分の考えや意見を表すことの大切さや、根拠を提示しないと相手を納得させたり・説得できないことを知ったとあった。また、多数の意見に耳を傾けることと、その集約に苦勞しながらも課題解決に向けた行動に反映させることの難しさは並大抵のことではないが、それを成し遂げたことによる達成感が次への躍動の原動力となったとも述べている。

保護者およびメディアや研究発表会等を通じて本校の取組を知ることとなった一般の方々からは、課題を見出す目が鋭い、視野を広げて物事を見つめるようになった、物事を掘り下げて考える力がある（育っている）、文章の表現力が向上した、相手を思いやる気持ちが育っているなど、こちらも概ね高い評価をいただくことができた。アンケートの結果という定量的な評価はもちろんのこと、数値では表すことができない定性的な評価の面でもよい結果が得られたといえる。

ニ ュ ー ヨ ー ク 国 連 研 修 報 告

ニューヨーク国連研修

I. 目的・ねらい

- 1) 「人との共生」をテーマとし、多民族の共生に向けて行動し続けるアメリカ合衆国を研修先として、多くの人々との交流を重ね、解決策を模索する。
- 2) 国際的に活躍する聖心女子学院関係者等の教育資源を活用し、新たな価値観や行動を生み出すことを目指す学習プログラムを開発・実施することにより、多様な価値観を認め、Dialogを重ねることによって課題解決の方法を創造するグローバルリーダーとなれるよう、その自覚の萌芽を促す。
- 3) 国連NGOとの連携を通し、「持続可能な開発目標（SDGs）」について考え取り組むことで、グローバルな視点を持ち、社会的な問題等の解決に向けて行動を起こす動機となり、行動を変容させていく。

II. 実施内容

この研修の事前学習は高1の10月から行い、フィールドワークは2月に実施される。そして、フィールドワークから戻った後から高2、高3と事後学習が行われる。本報告書には右表の事項について記載することとする。

本報告書への掲載事項	
事前学習・フィールドワークについて	2018年度の高1
事後学習について	2018年度の高2（2017年度に研修参加）

1) 2018年度研修の事前学習・フィールドワークについて（対象：高1）

A) 参加者選抜

高校1年生全員を対象として、事前に参加予定者として9名を選抜した。配布資料を参考に、その中から主張したいポイントを調査したうえで、その解決策や自分の意見を1200字のスピーチ原稿として完成させ、実際にスピーチを行った。

配布資料

私たちが目指す世界　子どものための「持続可能な開発目標」
“The World We Want
—A Young Person’s Guide to the Global Goals for Sustainable Development”

B) 事前学習の方法と活動内容

①テーマによるリサーチと、そのまとめ発表

2クール実施した。1クール目は一人一つのテーマを分担し、書籍やインターネット、新聞や雑誌などを利用して情報を収集し、一人10分、レジュメ1枚の条件で発表を行った。相互に質疑応答を行い、不足については追加調査の上、報告を求めた。

2クール目については、テーマは自分たちが不足を感じることを出し合い、その中から選ぶ形を取り、調査報告を行った。

現地の人々とのDialogを想定した時に必要と思われる知識の獲得と整理、的確な情報処理と発信の手段の獲得を目指す。

②レクチャーを通しての知識の蓄積と理解の深化

本校の教員から、調査だけでは補えない最新の情報や、専門的な知識を得る機会を設けた。レクチャーを通じて、多方面からのアプローチや判断材料を獲得することの重要性について生徒に認知させ、今後の探究活動に活かすような気づきの機会とする。

③ディスカッション（3項目で実施）

テーマの内容にかかわらず、多様な価値観について受容し、また自分の考えを主張していく機会とする。また、社会的な問題の解決のための行動の糸口をとらえる機会とする。

現地で質問したい10の質問

ニューヨークで出会う人々に、スムーズに自分たちの質問の意図が伝わるように、おおよそ10の項目にまとめた。訊くべきことの優先順位をつけること、項目の合一や削除などを自分たちで行うことで、合意形成の機会の一つとした。

『種をまく人』の伝えたいメッセージとは何か

9名に課題図書として示した書籍について、その作者が伝えたいこと、またどうしてこの研修の課題図書となるのかということについて考え、意見を出し合った。研修参加の目的の再確認や、事後の活動の継続意識を高めるために実施した。

課題図書名：『種をまく人』

著者：ポール・フライシュマン／著、片岡しのぶ／訳

出版社名：あすなろ書房

人との共生のために必要なことは何か

自分たちが今後どのように動いて行ったらよいのか（アクションプランの構築）ということ踏まえ、現地で質問をしたいと思っていることについて、自分たちはどう考えているのかということを考えるテーマとなっている。

④ジャーナルの記載

自分の活動の記録を取ることで自分の学びの歩みと不足、今後の方策を立てる材料とした。また、必ず日本語と英語で記録を残すように指示し、小さな事柄一つでも英語で思考し文章を構築する訓練を行った。英語科のネイティブスピーカーの教員の添削を複数回受け、正しい表現方法を身に着けるように指導した。

C) フィールドワーク

①日時 2019年2月11日～18日

②引率・現地指導 引率：Sr. 田口保子（企画も兼務）、相馬 晴美
現地指導：Sr. Gwen Hoeffel, Sr. Sheila Smith

③参加者 高1 グローバルクラス生徒 4名
高1 ソフィア・サイエンスクラス生徒 4名 （合計8名）

④スケジュール、実施内容の概要

[2/11 月]

- ・千歳空港集合(10:00)
- ・成田空港出発(17:55)
- ・New Ark Liberty空港到着（現地時間16:45）
- ・宿舎へ移動、到着19時 全行程を引率して下さるSr. Gwen Hoeffelに迎えられ、ホテルについてオリエンテーション。SDGsに即したリネンの使用等。

[2/12火]

- ・聖家族教会（Holy Family Church）にてお祈り
- ・国連パスポートの取得
- ・国連NGO RSCJ at UNにてオリエンテーション

講師：Sr. Sheila Smith（国連NGO代表）

（経歴）RSCJ at UN（経済社会理事会ECOAOOCとの協議資格を持つ聖心会NGO）代表
聖心会員（本校の母体である修道会）

- 内容：「なぜ聖心会が国連にNGOをもっているか」（共通の目標をもつため）
「RSCJ at UNのステータス（ECOSOC－国際連合経済社会理事会に意見を反映させることが出来る）について」等
- ・ 国際連合日本政府代表部（国連日本大使館）訪問・講話（Sr. Smith同席）
講師：総務部加藤要太参事官
内容：「持続可能な開発目標（SDGs）について」
SDGsの概要と意義、日本政府によるSDGsの取り組み
最後にお礼のご挨拶、全員で「ふるさと」の合唱を披露した。
会計班で働く卒業生33回生新田久美子さんとも会う。
 - ・ パトリック大聖堂（St. Patrick's Cathedral）見学
移民（アイルランド系）の方が苦しい生活の中からお金を出し合って建てた荘厳な教会で、その移民の方々、体調を崩し研修参加を断念した仲間、これからお世話になる方々、待っている家族・友達・先生、難民や苦しむ人々のために祈る。
 - ・ 宿舎にて振り返り、分かち合い



[2/13 水]

- ・ 終日姉妹校訪問・ボランティア活動・交流
姉妹校であるニューヨーク聖心(Convent of the Sacred Heart 91st Street)に7時45分に登校。校長先生始め先生方とホストシスターにご挨拶し、以下の活動を行った。
ア) ABC Cassidy's Place訪問・ボランティア活動
姉妹校の生徒とともに、ハーレムの子どもたちが普通の生活体験をし、必要なケアを受けるための保育所であるABC Cassidy's Placeでボランティア活動を行った。
イ) 授業参加・ホームステイ
ABC Cassidy's Place訪問から姉妹校へ戻った後、それぞれのホストシスターとともに授業に参加した。姉妹校としての共通点や相違点を実感した。放課後はホストシスターと下校し、ホームステイをさせていただいた。



[2/14 木]

- ・姉妹校にて
校長先生はじめお世話になった先生方、ホストシスターと交歓、感謝を表すひとときを過ごした。
- ・国連本部 57th Session of Commission for Social Development 第57回社会開発会議 (CSocD57) 会議の一環で国連広報局の市民社会報告会議に参加
テーマ：Start Local, Go Global (テーマ：地域から世界へ)
内容：パネルディスカッション形式で、持続可能な開発目標を促進する映画、食料、廃棄食品の活用などについての実践例紹介と話し合い。
- ・国連NGO Office にて講話
講師：Ms. Teresa Blumenstein (NGO移民委員会メンバー)
内容：現在は紛争による難民よりも、気候変動により本来の土地に住み続けることができなくなり、移動を余儀なくされる移民のほうが多い。この地球環境を守るためにはどのようなことが必要なのかについて。その後、一人ひとり昨日から今日までのふりかえりを分かち合う。
- ・国連Church Centerで静かに祈りの時を持つ。その後、宿舎で翌日のFacetimeの準備をする。



[2/15 金]

- ・聖アグネス教会 (The Church of St. Agnes) でお祈りを捧げる。
- ・国連広報局 (D P I) 訪問・講話
講師：Mr. Felipe Queipo (アウトリーチ部NGO課スタッフ)
内容：国連広報局とNGOとの提携の目的
平和を創るための情報の力と人々の尊厳、世界をより良い場所とする真の教育についてその大切さ、一人一人を大切にし、未来の世代に社会と環境をより良いものにしていくための持続可能な開発目標SDGsへの身近なことからの取り組み。
- ・国連ツアー (日本語) 参加
昨年に引き続き、日本語でのガイドにより、国連の取り組みや現場の様子をより正確に理解することが出来た。
- ・第57回社会開発会議 (CSocD57) の一環、市民社会フォーラム草案採択会議に参加。

- ・国連NGOオフィスにて、Sr.HoeffelとSr.Smithに感謝のプレゼントを差し上げ、「ふるさと」を歌い、イザヤの預言を披露した。
- ・Facetimeを利用して札幌のディベート組と交流。移民・難民の受け入れ、取り組みなどに関して質疑を交わした。



[2/16 土]

- ・エリス島の移民博物館見学 (Sr. Hoeffel, Sr. Smith、の他、韓国からのSr.Kimも同行)
移民の方が実際に生活していた宿舎を見、気持ちを想像し、自らの身に引き比べて考えることでこれまでの調べ学習の意義が深まった。
- ・Ground Zero (9.11の現場) にて犠牲者のために静かに祈りをする。
- ・聖マラキー教会 (St.Malachy's Church) にて今回の研修の振り返りを行う。
- ・タイレストランにて夕食を楽しみ、その後指導いただいたシスター方に、これまでの学びと振り返りをご報告する。花と合唱で感謝の集いを行った。



[2/17 日]

- ・宿舎出発 (6:30) New Ark空港出発 (10:50)

[2/18 月]

- ・ 成田空港到着（15:30）後、振り返りを行う。
国連研修を通して学んだこと、今後のアクション・プランについて分かち合う。
- ・ 成田空港出発（17:55）、新千歳空港到着（19:40）、解散。

[2/23 土]

- ・ 午後から、第一回集まりをもって事後ミーティング（事後学習）開始した。



3) 2017年度研修の事後学習について（対象：高2）

A) 研修の振り返り

今回の研修を終え、振り返りのアンケートを記入・提出後、集計を実施した。反省点・改善点を明らかにし、現地でお世話になったシスターとのSkype通信時に共有を行った。

B) 現地で学び、深めた内容を伝える発表とその成果

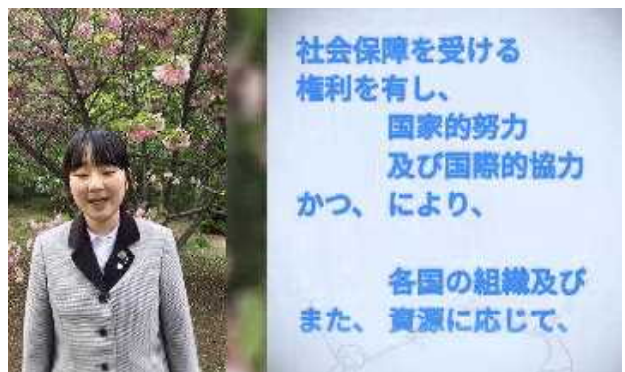
学んできたことを自分たちの言葉で表現することで、同世代の他の生徒たちの難民・移民・地球環境に関する問題に対する興味・関心を深めた。また、展示会場が校内の生徒にとって、研修に参加したメンバーに直接質問・意見交換をする場として機能することで、さらにその関心を広げ、学びを深めることにつながった。掲示物だけでなく、動画を使い、SDGsや世界人権宣言をより身近に感じられるよう工夫を行った。

- ・ 今回の研修で学んだ内容をパワーポイントプレゼンテーションとして3月に発表
- ・ 内容をさらに深め、学校祭（7月）にて展示発表

C) アクションプランの策定・実施

世界人権宣言70周年
人権のために立ち上がりましょう

2018年、世界人権宣言が採択されてから70周年を迎え、世界人権宣言70周年記念ウェブサイトで行われている、世界の人々が世界人権宣言（30の条文のいずれか）を読み上げて、その動画をアップするキャンペーンに参加した。またその参加について、研修メンバーだけではなく、同級生や姉妹校の生徒にも呼びかけ、その輪を広げた。



世界人権宣言70周年記念ウェブサイトより

Twitter『世界を応援する女子高生』

2016年実施のニューヨーク国連研修参加者のアクションプランを引き継ぎ、情報の発信とリツイートを行い、情報の拡散を意図して活動している。上記の「人権のためにたちあがりましょう」の情報をアップし、動画の視聴と活動参加を呼び掛けた。

D) 新たな課題設定と調査探究

前年度のニューヨーク国連研修を経て、「人との共生」の課題について考えてきた生徒たちが、今度は「自然との共生」の観点で新たに課題を見出し、調査研究を行った。テーマは、研修中も強く意識していた持続可能な開発目標（SDGs）の17の目標の中から選び、環境を意識した課題を設定した。学校祭ではレジュメとして報告し、また、探究報告書としてその内容をまとめた。

「人との共生」「自然との共生」が国際連合という組織を通じてつながり、解決すべき課題は複合的な要因が絡み合っている存在であるということや、解決を考えるためには多面的なアプローチが必要であることを理解した。



Twitter『世界を応援する女子高生』より

抜粋した開発目標			
目標6	清潔な水と衛生	目標13	気候変動への対策
目標7	再生可能エネルギー	目標14	海のいのちを守ること
目標11	持続可能なまちと地域社会	目標15	陸のいのちを守ること

Ⅲ. 評価・検証

事前学習開始直後の10月と、ニューヨーク国連研修直後にループリック評価を実施した。
（高1 グローバルイシューズ掲載のループリック評価用紙を使用）

1) 自己評価が上昇したポイント

質問項目	評価平均	
	出発前	帰国後
レジュメの内容について、簡潔で効果的な論理の展開と資料の活用を考え、説得力をもたせた	3.2	3.6
情報の読解について、情報の文脈・語句・表現に注意して読み、その内容を自分で説明できるほど理解した	3.4	3.7
フィールドワークにおいて、事前に疑問点を整理し、話の内容から自分の考えの共通点・相違点・新たな知見を整理した	3.3	4.0

※評価は4段階（1～4）で行われた

2) 自己評価が変動しなかった、もしくは低下したポイント

質問項目	評価平均	
	出発前	帰国後
聞き取る姿勢において、発表を的確に聞き取り、わからない点は質問し、その内容から自分の意見をもつことができた	3.5	3.4
情報の収集において、多言語を意識して情報源を求め活用できた	3.6	3.4

ループリック評価では14の項目があるが、そのうちの13項目において、自己評価は同値もしくは上昇傾向が見られた。約4か月に渡る事前学習の中で、何を意識して学習を進めればよいかということのを的確に把握できるようになってきている。また、前期のフィールドワークのためのリサーチに比して、提出の締め切りやその内容の深度について厳しいものとなっていることもあり、それをやり遂げた達成感が自信につながって、解答にも上昇傾向がみられると考えられる。

唯一低下したポイントである聞き取る姿勢については、発表を聞きながら質問をするということ

まではできたとしても、その後自分の意見を構築していくことに困難さを感じた結果である。ただの感想ではなく、根拠のある意見をきちんと考え、述べ伝えることは高校1年生には難しかったと想像できる。客観視し、自分の今の力を冷静に分析した結果の表れとしてとらえ、これからの成長につながるものと期待したい。

司書・学校図書館の役割

司書・学校図書館の役割

司書および学校図書館は、SGHのすべての取組について、担当教員と連携し、生徒の事前学習のためのオリエンテーションを実施している。必要に応じて、ブックリスト配布、関係資料展示、資料調査の援助、レファレンス業務などを実施している。

I. 本校における学校図書館の役割

学校図書館は、一定の年齢の生徒と教職員を利用者とし、授業との連携や課題学習の援助など教育課程の展開に沿った運営を行うという、他の図書館とは違った役割と特徴を持つ。学校図書館法第2条に「学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教養を育成することを目的として設けられる学校の設備である。」と定義されているとおり、本校の図書館は、すべての教育活動を支援するために、資料の収集と充実をはかり、教職員との連携のもと運営されている。

学校図書館は生徒たちが課題の発見と解決に向けて自主的、自立的な学習活動を進めていく上で、また教職員の授業研究を支援する知識と情報の拠点として必要不可欠な場所ではなければならない。さらに、学校司書は生徒の情報検索能力および情報活用能力を育てるための指導的活動（利用指導）を担わなければならない。

次期学習指導要領には、総則において「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること」という項目がある。また各教科においても学校図書館の活用について規定している。さらに、特別活動の中のホームルーム活動において「主体的な学習態度の確立と学校図書館等の活用」として、自主的に学習する場としての学校図書館等を活用し、自分にふさわしい学習方法や学習習慣を身に付けることとしている。

本校の学校図書館は次期学習指導要領の実施を待つまでもなく、教職員と連携し、すべての教育活動を支援してきたが、学校図書館の機能として挙げられる、「読書センター」、「学習センター」、「情報センター」、それぞれの機能を充実させることは今まで以上に重要である。

II. 活用の現状

本校では、中学校入学時の図書館オリエンテーションに始まり、総合的な学習の時間の中で、調べ方を学ぶカリキュラムが組まれ、百科事典の引き方、辞典・事典の使い方やその他の参考図書の使い方など、学年が上がるごとに図書館の利用法を段階的に習得できるように指導しており、そのために担当教員と司書は常に連携し、ティーム・ティーチングを行っている。そして、中学3年時には各自テーマを設定し、卒業研究論文を書くことが義務づけられている。生徒たちはテーマ設定の準備段階から図書館で調査をすすめていく。図書館は研究テーマに関連する資料収集と提供に力を注ぎ、必要な資料が生徒たちの手元に届くように日々の選書や情報収集が重要な仕事になっている。

高校生は年間約9回程度実施されている課題研究ミーティング(国際文化、環境科学、人間関係)に参加し、意見文の提出が義務付けられている。意見文には根拠となる資料を添付しなければならない。多くの図書館資料の中から必要な情報を検索する能力と活用能力が向上することにつながる。そして、それは高校3年生の集大成である卒業研究論文を作成する上での基盤ともなっている。

各教科においても中学・高校を通して、図書館資料を利用した授業展開も多くあり、2017年度の図書館利用時間数は273時間である（詳細は別紙参照）。調べ学習にはさまざまな形態があるが、ゼミ形式の授業では発表準備のために図書館での調査は欠かせない。

また、貸出し冊数は年間総数6,680冊、一人当たり平均38冊であり、その内訳は文学が約40%、その他の分野が60%という割合である、これは、課題学習に必要な本が多く借り出されているということである。読み物としては、おもしろい本、泣ける本、恋愛小説、こわい本など、要望はさまざまであるが、

読書の楽しみを見出せるよう、読書相談には個別に対応している。

生徒たちにとって図書館を利用することは特別なことではなく、このような蓄積がSGHの取り組みにおいても図書館を上手に活用できることにつながっている。

Ⅲ. 実施内容

各学年のグローバルイシューズ（GI）の事前・事後学習におけるすべての課題に対し、司書はテーマ設定の段階から関わり、調査研究を支援している。以下にその手順と具体的な事例をいくつか紹介する。

1) 教師との連絡

- ・図書館、図書館資料を使用する日時の確認（他教科との重複を調整）
- ・テーマに関連した図書資料、雑誌、新聞記事の確認（質・量ともに充分かどうか）
- ・授業のねらい（資料の収集と提供の範囲を考慮）
- ・授業と図書館の連携（司書がどのように関わるのか確認）
- ・課題に関するプリントがある場合は図書館用に確保

2) 図書館の準備

- ・テーマに沿った資料収集と整理
- ・必要に応じて「〇〇コーナー」設置、貸出制限（週末貸出、一夜貸出で対応）
- ・必要に応じてブックリスト配布、事前オリエンテーション実施
- ・レファレンス・サービス、レフェラル・サービスの充実
- ・調査メモ用紙（情報カード）の準備

3) 具体的な事例

A) 高1 日本語ディベート

肯定組、否定組それぞれに議論する内容について検討し、資料のリサーチを開始。

情報カードを使い議論に必要な情報を整理し、書き込む作業を進める。

関連図書の展示と新聞記事のファイルを整理し展示し、必要に応じて個別に対応する。



関連書籍ワゴン



新聞切り抜きファイル



話し合いの様子

B) 高2 フィールドワーク

外来生物、水資源、廃棄物、気候変動、ニューヨーク国連研修事後学習など、それぞれの探究テーマに沿って、調査方法や資料の見方など、個別に対応している。場合によっては一緒に検索し、どのように調査していくか利用指導も行う。



C) 高3 アクションプラン



「ザリガニと水辺を考える会」のメンバーで、札幌市内の小学校教諭の佐藤広也氏が来校され、レクチャーを受けている様子

アクションプランで取り上げられたテーマであるザリガニ（外来生物）、ヘッドネーション、LGBT関連の資料展示



IV. 評価・検証】

各学年、週1時間の枠の中で、小グループの活動が担当教師の指導のもと調査が進む中、図書館司書は全体に関わることで個別には関わりづらいという側面もあった。また、同時に展開することで個別に対応することが難しく、特に訪問先の地域に関する資料はほとんどHP上の資料にあたるものが多く、事前学習についての図書資料提供は非常に困難であった。しかし、各地の情報は新聞記事が有効に利用できることも確認でき、新聞の切り抜き情報は図書館の学習教材として計画的に整備していく必要性を感じている。

さらに、後期の生徒各自のテーマについて図書館司書も把握し、個別対応、テーマ資料展示など、調

査に必要な資料はほぼ準備できた。これは、担当教師との連携があって初めてできることである。また、テーマに関連した新刊書は積極的に購入し資料群に追加した。しかし、海外のある地域の環境問題や現在進行形のことに関しては図書資料が存在しない場合もあり、雑誌、新聞、インターネットなど、調査内容によってさまざまなメディアを使いこなせるようになることがますます重要になってくるものとする。

学校図書館には情報検索能力の育成という役割も課せられている。これは教科学習や課題学習などを支援する豊富な資料と適切な方法に基づく利用指導があってはじめて生徒自らが調査し研究することによる課題解決が可能になるのである。

今後、さらに、他者と協働して課題解決していく学習が重視されており、その一つにグローバルイシューズの学びがあげられるが、学校図書館は、今までの資料提供という「支援」だけでは不十分であり、多様な「資料」を「学習教材」として使えるような形にしていくことが求められるだろう。

今後の教育課程

今後の教育課程 ～SGH指定の成果を反映して～

2014年度にSGHの指定を受けた本校は、今年度末でその研究開発を終了することとなる。次年度以降の教育課程をどのようにするのか、ということについて学校長から諮問され、検討チームによる検討を重ねてきた。その結論は次のとおりである。

【結論】

- 1) 学校設定科目「グローバルイシューズ」を引き続き開設する
- 2) 高1は必修で1単位、高2と高3は選択で1単位とする

【理由】

- 1) 各学年で実施されたSGH自己評価・アンケートの集計結果から、SGHの取組は生徒から高い評価を得ていると判断できる。また、保護者からも同様な声が多数届いている。2022年度より学年進行で実施される新しい学習指導要領や、2020年度から実施される「大学入学共通テスト」をはじめとする大学入試改革では、「知識・技能」を身につけるだけでなく、それを活用して「思考力・判断力・表現力」をより一層高めていくという考えがベースとなっている。SGHの指定終了後も引き続き「グローバルイシューズ」を開設する理由は、その取組が新しい学力観のベースとなる力を育成するのに相応しいと判断したからである。

- 2) 指定期間中は教育課程編成の特例を受け、必修である「社会と情報」、「総合的な学習の時間」の単位を全て減じ、また、「コミュニケーション英語Ⅰ」の増単分を減じることで、各学年に2単位ずつ「グローバルイシューズ」を開設してきた。

科目名	単位数	特例指定前			特例指定後		
		高1	高2	高3	高1	高2	高3
コミュニケーション英語Ⅰ	4	5			4		
社会と情報	2		1	1	必修科目であるが設置しない		
総合的な学習の時間	3	1	1	1			
グローバルイシューズ					2	2	2

しかし、指定期間終了に伴って教育課程編成の特例も終了する。よって、必修科目を教育課程に再び反映させ、なおかつグローバルイシューズを開設するための苦肉の策が2単位から1単位へと減じることであった。しかし、総合的な学習の時間（総合的な探究の時間）との連動により、まずは時間数の確保の目処をつけることができた。一方で、特に理系進学を目指すには標準単位数以上での科目開設は必要不可欠である。進路選択の多様性が増す中で、これもまた苦肉の策ではあるが、本校で開設している「ソフィアサイエンスクラブ」という主に理数系の探究学習的な要素も含んだ学校設定科目との選択とすることで課題の解決を図ることとした。

【検討課題】

- 1) この研究報告書が発行される頃には、各学年のグローバルイシューズの構成内容は決定されているはずである。どのようなテーマ、内容で探究学習を進めていくかによってフィールドワークの行き先が決定される。その構成内容を決定することに大きな影響を及ぼしているのが「予算的な裏付け」である。国からの予算措置がなくなる以上、各フィールドワークやニューヨーク国連研修の実施にかかる費用は自己負担となり、それは保護者に大きくのしかかる。また、引率教員の旅費の予算措置が新たに必要となる。いずれについても、負担軽減の観点から検討を進める必要がある。
- 2) 高3では「アクションプランの立案と実行」を引き続き実施する予定である。これまでもそうであったが、企業やNPO、大学などの外部機関との連携のもとに進められてきたが、その開拓は生徒自身が行ってきた。総合的な学習の時間との連携により時間数の確保に目処

がついたと述べてきたが、従来確保できた時間数よりは減少する見込みである。連絡・交渉にそれ相応の時間がかかることでもあり、時間不足に陥らぬよう、これまで以上に担当教員が進捗状況をチェックし、適切な助言を与える必要がある。

- 3) ポートフォリオの一部として活用するために、記録をしっかりと残させる必要がある。これまでも探究報告書やアクションプラン実施報告書とした形に残すことに取り組んできた。その内容をより一層充実させ、場合によっては進路選択と密接に関わるような場合には、実施内容だけでなく、動機や根拠等についても詳細に記録に残しておくよう指導していく必要がある。
- 4) 教員の指導体制の確立も必要である。本校の教員は、その身分を中学校または高等学校のいずれかに属するようになっている。しかし、グローバルイシューズには所属・教科に関係なく全教員がその指導にあたる体制をとってきた。グローバルイシューズの指導を学年担任団任せにせず、全校体制で臨むことが継続・確立されるようにしていかなければならない。
- 5) グローバルイシューズは、高1～高3まで体系化し、整合性の取れた指導内容となるよう、これまでの取組をベースにはするが、精査していく必要がある。

これからはSGHの取組の成果が広く普及し、より多くの高等学校で同様の取組が始まるものと思われる。札幌聖心女子学院として、本校らしい課題探究型学習を追究していく所存である。

教科		標準	54回生 1学年		53回生 2学年								52回生 3学年														履修単位																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
			SSC		GC	SSC				GC				SSC										GC				SSC		GC																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
			必 修	選 択 ★	必 修	必 修	SSC・GI 選択 ◆●	地 理 選 択 ◆	理 科 選 択 ★	必 修	選 択 ★	必 修	選 択 ★	私立文					国公文					理		必 修	地 理 選 択 ◆	地 理 演 習 選 択 ▲	選 択 ★	私 立 文	国 公 文	理																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
														必 修	地 理 選 択 ◆	地 理 演 習 選 択 ▲	理 科 選 択 ★	選 択 ◆	必 修	地 理 選 択 ◆	社 会 演 習 選 択 ▲	理 科 選 択 ●	英 数 選 択 ■	理 社 演 習 選 択 ▲	理 科 選 択 ●									必 修	必 修	地 理 選 択 ◆	地 理 演 習 選 択 ▲																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
国語	国語総合	4	5		5																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					

關係資料

【別紙様式 5】

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間 26～30	ふりがな ①学校名	さっぽろせいしんじょしがくいんこうとうがっこう 札幌聖心女子学院高等学校				②所在都道府県 北海道
③対象 学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模
全日制普通科 (中学)	1年 (29)	2年 (30)	3年 (23)	4年 (82)	計 (106)	全日制課程普通科 106名 中学校 82名
⑥研究開発 構想名	Active Dialog ―共生の実現へー					
⑦研究開発 の概要	1. 本校が放課後に、また、後に総合的な学習として実施してきた課題研究をさらに強化する。 2. 課題研究のテーマを「人との共生」、「自然との共生」の2つにしぼり全研究を整理統合する。 3. 海外研修の目的・成果を2つの主題別にまとめる。 4. 英語コミュニケーション能力をさらに強化する研究・研修を行う。 5. 論理的思考力と発表能力をもつグローバルリーダーの育成を目指す。					
⑧研究開発 の内容等	⑧-1 全体	(1) 目的・目標 本校の研究開発テーマを「人との共生・自然との共生を目指し、諸課題に挑戦する」として、課題分析能力とプレゼンテーション能力の定着を図り、グローバルリーダーの育成を目指す。 (2) 現状の分析と研究開発の仮説 2014(平成26)年度入学生の段階から論理的思考力、問題設定・解決能力の一層の向上を図っていく必要があると考えられ、これらの生徒が新しく設定した課題研究に取り組み、共生の観点から研究と実践を進め、それぞれの主張を発表し、まとめていくことによって、論理性のある問題解決能力を身に付けることが可能になると考える。 (3) 成果の普及 ①本校での利活用 ②大学・企業等へのはたらきかけ ③小学校との協力体制づくり ④他校への情報提供 ⑤保護者の理解促進				
	⑧-2 課題研究	(1) 課題研究内容 主題を世界的な課題である①「人との共生」、②「自然との共生」の2つにしぼり、下記のような展開を考える。 ①「人との共生」 a) 少数民族の国を設定し、身近なアイヌ民族との状況比較を基本に共生への課題を追究するため、多数民族との関係、国家政策との関係における現状と問題点を探る。 b) 難民と移民について調査の対象国を選定し、各国の受入れ状況とその対策を共生の課題として追究するため、世界から移民や難民にまつわる争いや摩擦が消えない背景要因と現状の問題点を探る。 ②「自然との共生」 a) 3R運動の源としての資源確保について、資源との向き合い方に問題意識を持ち、エネルギーや水資源の確保と環境問題についての問題点を探る。 (2) 実施方法・検証評価 ①実施方法 2014(平成26)年度入学生より学年進行で実施する。2014年度については、総合的な学習の時間、2単位)で実施する。2015(平成27)年度以降				

	については、各学年２単位での実施を基本とし、「人との共生」「自然との共生」のテーマ追究のために、学校設定科目を新設した独自の教育課程を編成する。 ②検証評価方法 すべての取組の前に、「その目的」、「つきたい力」、「望ましい姿」などの細目が記載されたルーブリックを示し、生徒自身が到達目標を具体的に理解する。 ※課題解決の情報を得るため、国際機関NPOや国連などを訪問する。 ※共通の問題と、個別の問題に整理したうえでまとめ、対話と和解等、共生の視点で提言、発表の準備を行う。 ③課題のまとめと、その提言 取り組みを通した結論についての発表、報告、提言を校内、或いは校外で行う。取組み後に、評価のためのアンケートを実施し、個々の生徒が自らの意識や行動の変化を自覚する場とする。 (３) 必要となる教育課程の特例等 なし
⑧ -3 上 記 以 外	(１) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 授業外の時間及び海外研修、課題研究の研究主題「人との共生」「自然との共生」に関わる研究を通して、他者に対する奉仕や思いやりの心を養い、グローバルリーダーとしての素養を身に付けさせる。 (２) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 特になし (３) グローバルリーダー育成に関する環境整備，教育課程外の取組内容・実施方法 (ア) 小学校への英語出前授業 (イ) 外国人留学生による母国紹介ワークショップの開催 (ウ) 外国人教員によるグローバル課題ワークショップの開催 (エ) 長期・短期留学の門戸拡大 (オ) 留学生の積極的な受け入れ (カ) 海外Gap Yearボランティア学生の受け入れ (キ) 帰国子女の積極的な受け入れ (ク) 各種コンテストへの積極的な参加 (ケ) インターナショナルデイの開催 (４) 幹事校としての取組（該当する場合のみ記入） なし
⑨ その他 特記事項	●アジアスタディーツアーや大学へのスタディーツアーへの共同参加 世界の姉妹大学を中心に研修活動に参加し、グローバルな視野を広げる。 ●国連スタディーツアー（Little Raiza Project）参加 国連を中心とした世界の中での我が国及び自らの果たすべき役割等を理解する。 ●ボランティア活動 梅干弁当募金先の視察やペットボトルキャップ運動の成果を調べる。 ●外部機関の講演の聴講および、他者へのフィードバック

Active Dialog - 共生の実現へ

情報の収集・分析・考察ができる
問題解決能力の育成

持続可能な共生社会に貢献できる
人材の育成

英語・日本語によるディベート能力
及びプレゼンテーション能力の
育成

研究開発テーマ

人との共生

- ・少数民族問題
- ・移民・難民問題

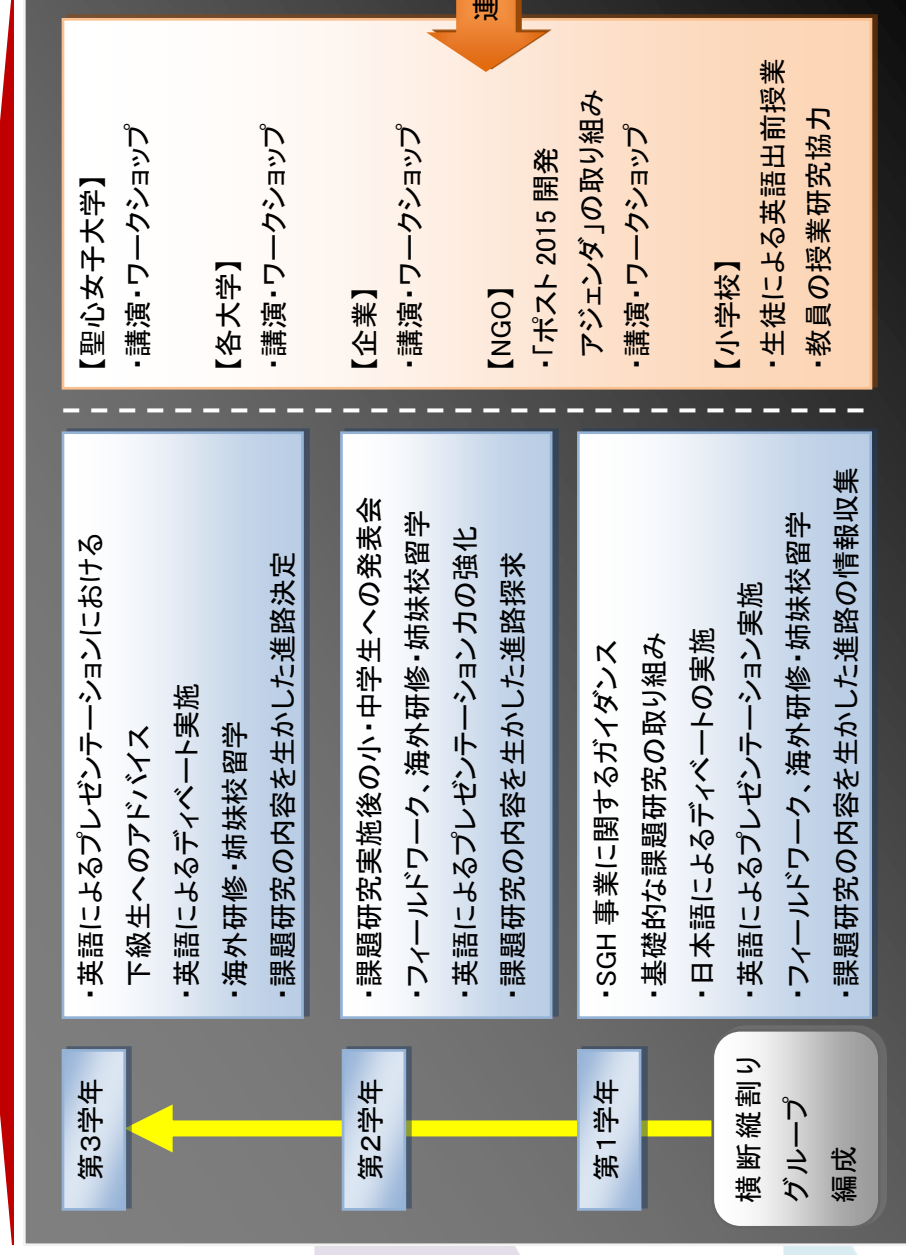
自然との共生

- ・資源(水・ゴミ)問題
- ・食問題

検証

- ・アンケートによる自己評価・意識変容の
追跡調査
- ・ルーブリック・ポートフォリオによる評価
- ・「SGH 実行委員会」の設置

聖心女子大学・各大学・企業・N G O・小学校



2018年度 第1回 SGH運営指導委員会

【日時・場所】 2018年10月5日（金）13:40開始
札幌聖心女子学院中学校・高等学校 第3パーラー

【主催】 学校法人聖心女子学院

【出席者】 [運営指導委員]
池上 清子氏 長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授
小野 有五氏 元北星学園大学教授
北原 敬文氏 元札幌市教育委員会教育長
松坂 ヒロシ氏 早稲田大学教育学部教授
望月 恒子氏 元北海道大学副学長・大学院文学研究科教授

[管理機関]
石川 明 学校法人聖心女子学院常務理事

[札幌聖心女子学院]
阿部 益太郎（校長） 梅原 宏之（教頭）
構野 秀樹（事務長） 漆崎 琴（教諭）
松原 今日子（教諭、記録） 佐藤 拓也（教諭）
渡辺 亜希子（教諭） 北 都子（教諭）

【議事次第】

1) 開会

挨拶 石川常務理事（以後の司会も行う）

2) 報告

A) 2018年度上半期における実績

①活動の変更点について

- ・高2 フィールドワークの中止と追加
希望者がおらず『メタンと地球温暖化の関係』は実施せず
SOFISの参加者で研究を行う
- ・高3 アクションプラン
外部連携先の充実（上級生から下級生へのアドバイスが活かされた連携先）
メディアへの露出が増えたことは成果の普及につながったようだ

②中間アンケートの結果報告（5月に実施）各担当より

[高1について]

- ・外国の文化などに興味・関心がある（文化面も含めて）、社会への貢献、外国語の必要性などの数値が高い結果となった。
- ・英語力や外国での出来事については自信がない、わからないなどの回答が多かった。

[高2について]

- ・高1と同じ傾向がみられる。多様な価値観をもつ社会が重要だと思っている傾向がみられる。
- ・英語力、自己肯定感が低い学年であるという傾向がアンケートからみえる。
- ・成功体験を積ませる必要がある。

[高3について]

- ・グローバル社会の中で生きていきたいという意識・意欲は高い。
- ・他学年と同じ傾向がみられる。英語力の必要性は感じつつも、学ぶことへの意欲は低い。
- ・昨年度の高3生とアンケート全体に大きな差異はなかった。

B) 2018年度下半期における事業計画予定

グローバルイシューズ (GI) の今後について、生徒からは続けることへの肯定の意見が多い。

3) 質疑応答

松坂委員 学年進行で見てみるとアンケートに顕著に上がった・下がった成果はあるのか。

佐藤教諭 あまり見られない。

北原委員 34番の項目（「自らがリーダーとなり、周りの人々にも協力を求め、共に貢献活動を行っていききたい」）について、学年によって下がっていつている。しかし取組を見ていると上がっているように思われる。必ずしも正確にアンケートに反映されているようには見えない。プラスに使える扱い方をすべきではないか。

望月委員 生徒は自分を客観的にみることができるようになったのではないか。丁寧に指導しているので、教員の目を利用して客観的に示すようにしたらよい。

佐藤教諭 このアンケートは進級してすぐに行ったものなので、次のアンケートでは数値はあがると思われる。

池上委員 学年が上がるごとに客観的に見ることができるので、自己肯定感は下がる結果も出てくる。高校3年生の自由記述のアンケートなどを参考にするべきである。このままグラフにしてはいけない。4つのカテゴリーに分けてはどうか。「課題の認識」「分析する能力」「コミュニケーション能力」「自分の考えを提案する力」にわけてアンケートを利用するとよいのではないか。社会が求めている成果は、英語ができる結果、何をできるようになったのかということだろう。記述式のコメントを書いた生徒からもう少し掘り下げて意見を聞いてみるのはどうか。

小野委員 追跡調査ではない点が弱いアンケートになってしまった。成長過程には使えない。アンケート項目が多いので、池上先生の話の通り、分類することが必要である。

石川常務 瞬間の気持ちを聞いているアンケートなので、以前と比べてみる聞き方にしてはどうかと思う。いくつかの項目をそのように変えてみてはどうだろうか。

小野委員 自由記述の部分では、高校3年生はそうにたくさん書いてある。

松坂委員 最初は質的（自由記述）でとってから、その後、いくつか項目を選び量的にアンケート（選択式）をとってみる方法もある。

望月委員 高校3年生の自由記述は、SGHで行っている課題をよく理解していることがわかる。

池上委員 高校3年生の自由記述はSGHの成果である。それをどう数量的に出せるかが、今後の課題である。「何を」「どのように」考えられるようになったのか聞いてみるのもよい。

石川常務 これまでの意見を取り入れて、後期アンケートを行ってみたらどうか。

阿部校長 国から求められているのは数値だったが、今回のご意見を参考にさせていただきたい。

石川常務 最後のまとめの期限はいつごろか。

佐藤教諭 3月の下旬である。

石川常務 それに合わせた材料集めを行う必要がある。

小野委員 あまり時間はないので、高校3年生のアンケートを参考にとるのがいい。成果がわかりやすい。

北原委員 このアンケートは保有し、同じアンケートをもう一度とることも必要。本質にかかわる部分も出てくるので、取り上げる必要がある。

池上委員 文科省の札幌に対する中間評価が低くて驚いた。最終評価を上げるためにどうしたらよいか考えていく必要がある。行動の変容に結びつけるような項目を前面に出したらよい。

小野委員 悪い面ももちろん項目にあった方がよい。時間が足りない、難しいということがあったなど課題として正直に取り上げることも必要である。

望月委員 NY研修への参加が少なかった理由は何か。

佐藤教諭 時間の面もそうだが、事前・事後学習の大変さを上級生から聞いた結果のようだ。

漆崎教諭 5月までは希望者も多くいたが、大変さをアピールした結果、候補者が少なかった。

松原教諭 応募しないこととしたが応募すればよかったと言い出す生徒もいる。

石川常務 来年度以降のSGH関係の取り組みについて、校長から説明をお願いします。

阿部校長 現在は特例で2時間で必修科目として行ってきた。情報・英語から1時間ずつもらっていた。指定が終わる来年度は、通常の教育課程に戻す必要がある。高校1年生は1単位で必修で行う、2年生・3年生は選択必修で1単位で行っていく予定である。

5年間の取り組みで生徒の成長が見られた。学校が育てほしい生徒になり、必要な科目だと認識している。この5年間の財産を次に続けていきたい。

北原委員 学校設定科目なのか。

佐藤教諭 1年生は学校設定科目で1単位、2年生・3年生は選択教科で行っていく。

池上委員 SGHで得られた経験をどのようにつなげていくのか。SDGsアワードに申請してもよいのではないと思うくらいの取り組みだと思う。来年度の申請をしたらよい。

石川常務 この運営指導委員会については、確定していないことがらもあるため、来年年明けにももう一回開かせて頂くことになる。

池上委員 今日の発表会については、高校2年生の動画では、1番目（廃棄物）と4番目（SOFIS）がよかった。1番目の動画は楽しさがわかり、楽しいと学ぶことができる。4番目の動画は具体的な事例を取り上げているところがよかった。わかりやすい筋書きがよかった。

渡辺教諭 初めての試みだったため、教員側も戸惑ったところが多かった。スマートフォンを利用して生徒たちはすぐにつくることができていたが、中身の薄さはごまかせないことがわかった。

北原委員 高校3年生の発表をみて、よい育ちができていた。高校2年生の動画には表現に稚拙な部分はあったが、それはそれでよいのではないか。実際に表現をして、表現をすることの難しさを理解することができたのではないかと思う。そのための大事なステップになったのではないか。

池上委員 高校3年生は堂々と課題を理解し、人に伝えることができていた。この点でも、自己肯定感が低いとは思えない。

4) 閉会

挨拶 石川常務理事

2018年度 第2回 SGH運営指導委員会

【日時・場所】 2019年2月20日（水）14:53開始
学校法人聖心女子学院 法人本部会議室

【主催】 学校法人聖心女子学院

【出席者】 [運営指導委員]
池上 清子氏 長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授
小野 有五氏 元北星学園大学教授
北原 敬文氏 元札幌市教育委員会教育長
松坂 ヒロシ氏 早稲田大学教育学部教授

[管理機関]
宇野 三恵子 学校法人聖心女子学院理事長
石川 明 学校法人聖心女子学院常務理事
田渕 雅彦 学校法人聖心女子学院事務局長代理
田口 雅史 学校法人聖心女子学院事務局長代理

[札幌聖心女子学院]
阿部 益太郎（校長）
梅原 宏之（教頭）
漆崎 琴（教諭）
松原 今日子（教諭、記録）
佐藤 拓也（教諭）

【議事次第】

1) 開会

挨拶 石川常務理事（以後の司会も行う）

2) 理事長挨拶（宇野理事長）

2014年度から、生徒も教職員も一丸となって5年間取り組んできた。教員の意識変革も含め、生徒の成長とともにその成果があるかと思う。まとめの会ではあるが、今後の教育にどのように活かしていくかという視点で、ご助言ご指導いただければと思う。

3) 議事

①SGH事業の5年間の活動報告（札幌聖心：佐藤）

SGH自己評価・アンケートについては、前回の反省から項目を整理し、ポジティブな回答が得られるような回答項目に設定。（77項目）

◆各学年のアンケート分析報告

高1 異文化理解へのアプローチ、意識向上がはかれていた。しかし、タイムマネージメントの困難さを自覚する生徒が多数存在。

- 高2 異文化理解の重要性について理解を深化させており、成長が見られる。しかし、課題解決のためのリーダーシップについては二の足を踏む傾向。
- 高3 明らかに主体的に能動的に動く生徒が増えた。アクションプランの実行について主体的に活動をしていた。意欲は高いが、英語運用については困難を感じている生徒も存在。

◆中間評価の指摘に対する改善点

- ・海外フィールドワークの改善の充実を図り、予算の都合上国内のフィールドワークを設定、充実。
- ・成果物の作成、報告書を作成。報告書としてだけでなく、下級生への引き継ぎ文書としても活用。
- ・授業時間内での活動できるプログラムに改変。(課外時間に食い込まない工夫)

◆総括

- ・新しい学力観に応じた、生徒に力をつけられる教育課程の開発ができた。
- ・生徒自身からの活動の継続を望む声がある。世界の課題を自らの問題ととらえ、課題解決をしようとする意欲と姿勢を育成することができた。
- ・国内で、グローバルの視点のフィールドワークを実施し、考える視点を得ることができる。身近なことから大きな視点で物事を捉えていくことが可能。

②今後の取組

- ・2019年度以降も、グローバルイシューズを授業として行うこととしたい。
検討課題) ・内容を精査する必要がある。活動時間とその内容のバランス。
→書く力、情報リテラシーの涵養、考える力、行動力
- ・経済的な負担を考慮したフィールドワークの設定。
- ・連携先との協力関係の構築(アクションプラン、フィールドワークの実施)

4) 質疑応答

北原委員 かつて「同じ生徒が時を経てどのように変容したのかを、個人として追いかけた方がよいのではないか。」と指摘したのは、以前の学年別のデータが学年進行に従って悪化していたからだ。しかし、今回の資料を見ると、学年が進むにつれて向上していく傾向が見られ、個人に着目して同じ学年集団を追跡すると1・2年生では、むしろ悪化している。そうであるならば、学年進行に沿った資料に戻した方がよいのではないか。その方が、これまで見続けてきた生徒の成長の実像に合致しているものと思われる。

佐藤教諭 4月のデータを載せるかどうかということについていかがか？

松坂委員 腑に落ちないデータが出た場合、生徒にインタビューをして考えを言葉で問うとよいかもしれない。数字とは違うレベルの成長が見られるのではないか。

小野委員 1年生については、4月のアンケートは意味がないのではないか。SGHの理解が十分できていない段階なので、回答は難しい。2年生、3年生については4月12月の比較は可能。平均値として見ると、全体的に上昇傾向として読めるはずではないか。

松坂委員 高1の4月、高3の12月のデータを比較してはどうか。

北原委員 今の高3の昨年度のデータがあれば見ていけばよいのではないか。

小野委員 シンプルでわかりやすいものがよい。

北原委員 項目を適宜抜粋して報告してはどうか。

石川常務 いいものがわかりやすくまとめられていることが重要。今回のアンケート結果は、生の結果として今後の教育課程検討に活かしていけることと思う。

北原委員 学校設定科目としてやっていくのであれば、中学校課程においてもこれに関連して何かに取り組むようなことは考えられないだろうか。総合的な学習の時間の内容との関わり。各教科の教育内容とリンクさせていくことができるはずだろう。

松坂委員 札幌聖心の副読本として、このような取り組みが読み物となっているとよいのではないか。

北原委員 各教科のカリキュラムの中で、「この学習内容はグローバルイシューズに関連性がある」ということを意識し、特化していくことがよいのではないか。

松坂委員 今回の提出資料、アンケートについてはすべてデータとして残していくということでよいだろうか。

佐藤教諭 はい。

石川常務 中高一貫校として、この取り組みを何らかの形で中学校にも取り入れていくことは考えていくとよいであろう。新しい学力観への対応については、今の方向で進めていくことがそれにも役立つと考えているがどうだろうか。

北原委員 よいと思う。

松坂委員 英語の4技能がますます強調されていくときに、ディベートは非常に効果的であろう。

阿部校長 ご助言ありがとうございます。今年の高3はSGHがある程度固まった3年目に高校1年生として入学してきた生徒たちである。修正、改善を重ねたプログラムで3年間過ごしたことがよい形で大きく影響したかと思う。報告についてはよいところを活かして対応していきたいと考えている。

梅原教頭 今後の教育課程への普及について資料を用いて説明

- ・ 昨年秋からGIチームを編成、2019年からのGIについての検討を行ってきた。
- ・ アクションプランの取り組みについては大変評価できるのではないかと継続をしたい。しかし、現場にいる教員の負担が相当であることも事実である。望ましい継続の方法について模索した。
- ・ SGH指定終了により特別措置は解除、よって情報と総合的な学習を復活させる。
- ・ 理系科目（数学、理科）が進路選択として必要な生徒については除外。
- ・ 高校1年生はグローバルイシューズ必修、高2以上は選択として設定する。

小野委員 3年生のグローバルイシューズは必修ではなくなったことに伴い、選択の方法についてはどうなるのか。

松坂委員 高校2年は即興型英語ディベートということか？

漆崎教諭 そうです。テーマはある程度設定することになるかもしれない。

池上委員 NY国連研修について、現中3が行くということになるのか？何人ぐらい希望しているか？

阿部校長 31人の母集団のうち、17名の希望者がいる。また、高校入学生からも希望者が出てくる可能性があるのですが、確定ではない。NYに行くのにはかなり費用がかかるので、継続についてはこの点を含めて考えて行かなくてはならない。

池上委員 行きたいと思っている人が行ける状況を作って行かなくてはならないだろう。経済的な問題があるのは当然ではあるが。

石川常務 生徒の母集団が少ないにもかかわらず、カリキュラムは多様であり、現場での対応は大丈夫なのだろうか。

阿部校長 一人でも授業を開講しているので、人に関わる費用が大変多くなっているのが現実である。

池上委員 SGHをやったことがどのように活かされていったかということについては、次年度以降のGIの継続ということがその成果といえるか。また、中学校の卒業研究とのつながりが大切であろう。

漆崎教諭 つながりということであれば、中3では国語の授業において即興型の日本語ディベートを行っており、それが高校の論証型日本語ディベート、英語の即興型ディベートにつながっていく。中学校のすべての教科内容を積み重ねて、高校につながっていくものと思う。

小野委員 高校3年がグローバルイシューズが必修でないのは残念ではある。受験を想定していかなくてはならないというのは理解できるが、各授業内容の中に、是非グローバルイシューズの要素を入れていくことを考えてほしい。(生物や化学、地理など)

梅原教頭 私は地学を担当しているが、世界的な課題についてはかなり教科書の中での比重も増えてきている。意識して授業を行っていくことも必要であろう。

北原委員 高校の総合的な学習の内容はどのようになるのだろうか。GIと一体化していつて見ていった方がよいのではないかと。中学校の段階でどのような成長が見込めるかというデザイン化も併せて行う必要があるであろう。

梅原教頭 中学校も含めて教育課程の再構築を行う予定である。

宇野理事長 SGHは高校のプロジェクトといわれるが、実際は中1からの取り組みであろうと思う。6年間かけてどのような取り組みをしていくかというイメージ化と整理が必要。6年間の流れを意識すべき。また各教科の教員が、自分の教科内容と課題研究との結びつきを意識していくことが重要。

池上委員 大学の入試が変わるのはいつからか。情報収集も大変だろう。

阿部校長 高校1年生が受験をするのが最初。考える力が必要となるであろう。

梅原教頭 本校の生徒は新しい大学入試には有利になるはずなのだが。

池上委員 グローバルイシューズが独立した科目なのも大事であるが、それぞれの教科がグローバルイシューズを自分の科目の中で取り上げることがとても重要。SDGsも各教科の切り口で教員が取り扱うようにした方がよい。そうすることで、選択によってグローバルイシューズをとることができない生徒にも対応できるであろう。自分の生活とリンクさせることが大切。むしろグローバルイシューズという授業がなくなることが理想形。

宇野理事長 GI を特別視するのではなく、各教科で普通に取込まれて取り扱われていくことができることが理想。ポストSGHは、GI の運営だけではなく、教材の検討も含め各教科での教科指導のあり方を提言していくことであろう。

北原委員 各教科の単元をまとめ、その教科の教員ではなくても、どの教科でいつ、そのような内容が取り組まれているかがわかるような資料ができるとよいだろう。サッカーの試合にたとえるとすれば、パスやドリブルの練習は教科で、GI は練習試合のイメージであろうか。総合的な取り組みを行う場としてGIを残していくのが望ましい。

松坂委員 これからは数字にとらわれず、本来の教育ができるのではないかと期待したい。人数が少ないことを活かして、一人ずつにフォーカスした教育ができるであろう。

石川常務 今年度のSGH発表会は素晴らしかった。募集のためにもよい機会であり、外部の人にもっと来てもらいたかった。

北原委員 先生たちにフォローしてほしかったという生徒の反省コメントはあったが、生徒たちは自分たちで取り組み、確実に成長しているのが見られてよかった。修学旅行はどうなっているのだろう。修学旅行先での自主研修をグローバルイシューズと関連付けるのはどうであろう。費用の問題の解決にもつながらないか。

漆崎教諭 高校は長崎市内。平和とキリスト教がテーマである。

池上委員 他校ではあるが、長崎大医学部に訪問してくる。機会があれば授業見学などもできる。

小野委員 水俣は行けないだろうか。長崎から日帰りは可能であるが。

松原教諭 中学校は、修学旅行は京都奈良、中学2年はアイヌ民族と自然をテーマに宿泊学習を実施している。

北原委員 全員が同じ体験をするのは大切だが、それぞれの興味関心に従って研修を行い、後にその経験を振り返って皆で分かち合うとよいと思う。そのような形を考えると、いろいろなことが考えられるであろう。

漆崎教諭 いろいろな経験や研究の分かち合いについては、卒業研究はフィールドワークの報告などで生徒たちは経験していることと思う。

阿部校長 5年間のご指導、本当に感謝申し上げたい。すべてを完璧にはできてはいないが、生徒も教職員も走りながら取り組んできたところである。ご指摘の通り、教育課程の見直しについては、中学校・高等学校いずれも行い、このSGHの経験やご指導のポイントについては最大限に活かしていければと思っている。前校長の発案で始まり、本部の多大なる支援によって何とか活動を続けることができた。生徒にも達成感、成就感が得られたとが一番であった。今後につながるように努力をしていきたいと思う。

5) 閉会

挨拶 石川常務理事

